国道２０２号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ

周船寺遺跡群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第429集

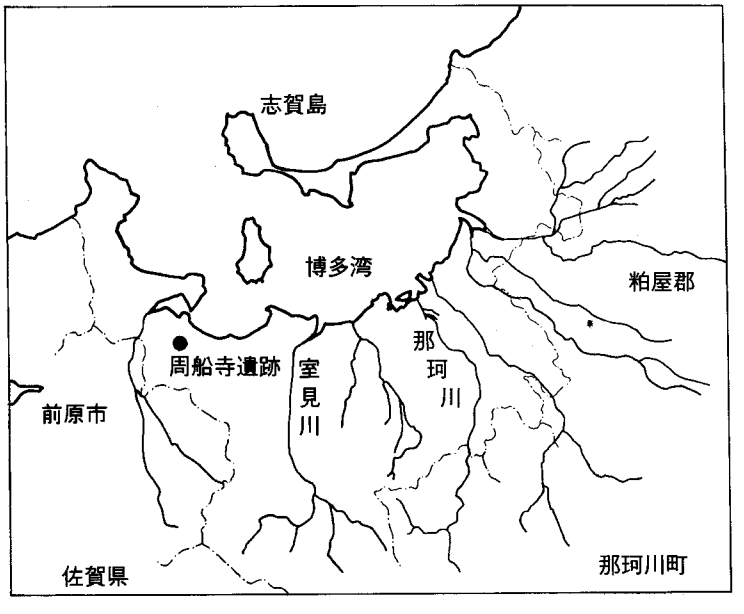
１９９５

福岡市教育委員会

国道２０２号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ

周船寺遺跡群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第429集



1995

福岡市教育委員会

序

一般国道202号線は福岡市を起点に唐津市、伊万里市、佐世保市に至る延長203kmの西九州の幹線道路です。福岡市は明治以来九州の政治、経済の中枢都市として発展し唐津街道と呼ばれた国道202号線は西九州と福岡市を結ぶ動脈として重要な役割を果たしてきましたが、モータリーゼーションの発達した現在では幹線道路としての機能が低下し、沿線住民の日常生活にも支障を来たしています。今宿バイパスはこの交通混雑の緩和及び地域開発の促進を目的として福岡市西区福重から糸島郡二丈町福井まで23.8kmのバイパスです。福岡市域内では福重から周船寺まで共用が開始され、全体でも前原市の一部を除き完成しまもなく全線が共用できることでしょう。

今回報告する飯氏地区は伊都国の中心地、糸島平野の東端にあたり早良・福岡平野とを結ぶ交通の要衝にあたり多くの遺跡があります。特に国指定遺跡の大塚古墳や丸隈山古墳、鋤崎古墳等の前方後円墳や古墳時代後期の群集墳など古墳密集地域として知られています。福岡市では今宿バイパス建設に伴い九州地方建設局と事前協議を重ね、やむを得ず現状保存出来ない箇所については発掘調査を行い、記録保存を実施しています。発掘調査は平成３年度で終了し、多くの成果を得ることが出来ました。ここに報告する周船寺遺跡群は弥生時代前期の甕棺墓を初めとし中期の土壙や溝等当時の集落の一端を垣間見ることが出来ました。今宿から周船寺地区にかけては伊都地区区画整理が計画され埋蔵文化財の調査の全体の把握に貴重な資料を得ることが出来ました。

最後になりましたが、福岡市で今宿バイパスの調査を開始したのが昭和61年の女原遺跡の調査であり10年近い年月が過ぎ去りました。この間、調査に関わった人も多く入れ替わり、とくに福岡国道工事事務所の関係者及び地元の方々を初め発掘調査から整理、報告まで多くの皆様のご理解と御協力のお陰で調査を完了することが出来ました。ここに感謝の意を表するとともに、本書が文化財保護や普及、教育などに活用いただければ幸甚に存じます。

平成７年３月３１日
福岡市教育委員会
教育長　　尾　花　　剛

例　言

1．本書は一般国道202号線今宿バイパス建設に伴い発掘調査を実施した福岡市西区周船寺・千里に所在する周船寺遺跡群第6次調査の報告書である。
2．発掘調査は福岡市教育委員会が建設省の委託を請け平成２年４月１日から同年９月14日まで実施した。
3．発掘調査で検出した遺構は種類毎に記号を附し、甕棺をＫ、土壙をＳＫ、溝状遺構をＳＤ、掘立柱建物をＳＢ、ピットをＳＰと表記し、遺物にもそのように注記している。石器の（　）内の番号は遺物登録番号である。
4．本書に使用した遺構実測図の作成は調査担当者が行い、遺物の実測図の作成は担当者の他に濱石正子、撫養久美子、入江のり子、大庭友子、二宮忠司が行い、打製石器の実測及び文章執筆には大庭友子、二宮忠司の手を煩わした。
5．本書に使用した図の製図は濱石正子、撫養久美子、入江のり子、大庭友子が行った。
6．本書に使用した写真のうちアドバルーン写真は空中写真企画にお願いし、遺構は松村、長家が行い、遺物写真は土器を松村、石器を二宮が撮影した。PL．の左端の番号はFig．の番号である。
7．本書で使用する方位は全て磁北である。
8．本書の執筆は石器については二宮忠司、大庭友子がおこない、その他は松村が行った。
9．本書に関する実測図、写真の記録あるいは遺物類は平成７年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
10．本書に関するデーターは以下の通りである。

遺跡調査番号	９００１			遺跡略号	ＳＳＪ－６
調査地籍	福岡市西区周船寺・千里			分布地図番号	１３１
開発面積	20,500㎡	調査対象面積	8,500㎡	調査面積	7,500㎡
調査期間	1990年(平成２年)４月１日～1990年９月14日				

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに
1．調査に至る経過 …… 1
2．調査の組織 …… 2
3．遺跡の位置と環境 …… 2

Ⅱ　調査の記録
1．調査の概要 …… 7
2．縄文時代晩期包含層の調査 …… 8
(1)　調査方法 …… 8
(2)　遺物出土状況 …… 8
(3)　出土土器 …… 8
(4)　出土石器 …… 10
3．甕棺墓の調査 …… 17
4．土壙の調査 …… 25
5．掘立柱建物の調査 …… 52
6．溝状遺構の調査 …… 53
7．その他の出土遺物
1)　ピット出土土器 …… 54
2)　出土石器 …… 55
Ⅲ　おわりに …… 70

挿 図 目 次

Fig. 1　国道202号線今宿バイパス路線内遺跡位置図（1/25,000） …… 3
Fig. 2　周辺遺跡分布図（1/50,000） …… 4
Fig. 3　調査位置及び周辺地形測量図（1/4,000） …… 6
Fig. 4　縄文時代包含層グリット設定図（1/300） …… 7
Fig. 5　縄文式土器出土状況実測図（1/20） …… 8
Fig. 6　包含層出土縄文式土器実測図(1)（1/3） …… 9
Fig. 7　包含層出土縄文式土器実測図(2)（1/3） …… 10
Fig. 8　包含層出土石器実測図(1)（1/1） …… 12
Fig. 9　包含層出土石器実測図(2)（1/1） …… 14
Fig. 10　包含層出土石器実測図(3)（1/1、1/2） …… 15
Fig. 11　包含層出土石器実測図(4)（1/2） …… 16
Fig. 12　甕棺墓分布図（1/50） …… 17
Fig. 13　1号甕棺墓、甕棺及び出土管玉実測図（1/20・1/8・1/1） …… 18
Fig. 14　2号、3号甕棺墓、甕棺実測図（1/20・1/8） …… 19

Fig. 15　4 号、5 号甕棺墓、甕棺実測図（1/20・1/8）…… 20
Fig. 16　6 号、7 号甕棺墓、甕棺実測図（1/20・1/8）…… 21
Fig. 17　8 号甕棺墓、甕棺実測図（1/20・1/8）…… 22
Fig. 18　2 号土壙実測図（1/30）…… 25
Fig. 19　2 号土壙出土土器実測図(1)（1/4）…… 26
Fig. 20　2 号土壙出土土器実測図(2)（1/4）…… 27
Fig. 21　3 ～ 5 号土壙実測図（1/30）…… 28
Fig. 22　3 ～ 5 号土壙出土土器実測図（1/4）…… 29
Fig. 23　6 ～ 8 号土壙実測図（1/30）…… 30
Fig. 24　6 ～ 9 号土壙出土土器実測図（1/4）…… 31
Fig. 25　9 、11、12号土壙実測図（1/30）…… 32
Fig. 26　11号土壙出土遺物実測図（1/4）…… 33
Fig. 27　13、16、17号土壙実測図（1/30）…… 34
Fig. 28　13、16、17号土壙出土土器実測図（1/4・1/8）…… 35
Fig. 29　20号土壙実測図（1/30）…… 36
Fig. 30　20号土壙出土土器実測図(1)（1/4）…… 37
Fig. 31　20号土壙出土土器実測図(2)（1/4）…… 38
Fig. 32　20号土壙出土土器実測図(3)（1/4）…… 39
Fig. 33　20号土壙出土土器実測図(4)（1/4）…… 40
Fig. 34　20号土壙出土土器実測図(5)（1/4）…… 41
Fig. 35　21、22号土壙実測図（1/30）…… 42
Fig. 36　21、22号土壙出土土器実測図（1/4）…… 43
Fig. 37　23号土壙実測図（1/30）…… 44
Fig. 38　23号土壙出土土器実測図（1/4）…… 45
Fig. 39　24～28号土壙実測図（1/30）…… 46
Fig. 40　24～27号土壙出土土器実測図（1/4）…… 47
Fig. 41　29～32号土壙実測図（1/30）…… 48
Fig. 42　29～32号土壙出土土器実測図（1/4）…… 49
Fig. 43　掘立柱建物及び出土土器実測図（1/80・1/4）…… 51
Fig. 44　溝状遺構出土土器実測図（1/4）…… 52
Fig. 45　ピット出土土器実測図（1/4）…… 54
Fig. 46　遺構外出土石器実測図(1)（1/1）…… 56
Fig. 47　遺構外出土石器実測図(2)（1/1）…… 58
Fig. 48　遺構外出土石器実測図(3)（1/1）…… 59
Fig. 49　遺構外出土石器実測図(4)（1/1）…… 60
Fig. 50　遺構外出土石器実測図(5)（1/1）…… 62
Fig. 51　遺構外出土石器実測図(6)（1/1）…… 64
Fig. 52　遺構外出土石器実測図(7)（1/1）…… 66
Fig. 53　遺構外出土石器実測図(8)（1/2）…… 67
Fig. 54　遺構外出土石器実測図(9)（1/2）…… 68

図 版 目 次

ＰＬ．1　(1)　遺跡遠景（飯氏遺跡より）
ＰＬ．2　(1)　調査区全景（東より）
ＰＬ．3　(1)　Ⅱ区全景
ＰＬ．4　(1)　Ⅲ区全景
ＰＬ．5　(1)　縄文式土器出土状況
ＰＬ．6　(1)　甕棺（１～５号）出土状況
ＰＬ．7　(1)　２号甕棺出土状況（東から）
ＰＬ．8　(1)　４号甕棺出土状況（南から）
ＰＬ．9　(1)　６号甕棺出土状況（東から）
ＰＬ.10　(1)　８号甕棺出土状況（南西から）
ＰＬ.11　(1)　２号土壙遺物出土状況
ＰＬ.12　(1)　４、５号土壙（東から）
ＰＬ.13　(1)　６～８号土壙（北から）
ＰＬ.14　(1)　９号土壙遺物出土状況（東から）
ＰＬ.15　(1)　11号土壙遺物出土状況（東から）
ＰＬ.16　(1)　17号土壙（西から）
ＰＬ.17　(1)　20号土壙遺物出土状況（西から）
ＰＬ.18　(1)　24号土壙（西から）
ＰＬ.19　(1)　28号土壙（東から）
ＰＬ.20　(1)　32号土壙（北東から）
ＰＬ.21　(1)　２号掘立柱建物
ＰＬ.22　(1)　１・２号甕棺
ＰＬ.23　(1)　３～５号甕棺
ＰＬ.24　(1)　７・８号甕棺・１号甕棺内出土管玉
ＰＬ.25　(1)　２・９・11・17・20号土壙出土遺物
ＰＬ.26　(1)　20号土壙出土遺物
ＰＬ.27　(1)　20号土壙出土遺物
ＰＬ.28　(1)　20号土壙出土遺物
ＰＬ.29　(1)　21・23・32号土壙・包含層出土遺物
ＰＬ.30　(1)　縄文時代晩期包含層出土石器（1/1）
ＰＬ.31　(1)　縄文時代晩期包含層出土石器（1/1）
ＰＬ.32　(1)　縄文時代晩期包含層出土石器（1/1）
ＰＬ.33　(1)　遺構検出面出土石器（1/1）
ＰＬ.34　(1)　遺構検出面出土石器（1/1）
ＰＬ.35　(1)　遺構検出面出土石器（1/1）
ＰＬ.36　(1)　遺構検出面出土石器（1/1）
ＰＬ.37　(1)　遺構検出面出土石器（1/2）

(2)　遺跡全景（東より）
(2)　Ⅰ区全景
(2)　Ⅰ、Ⅱ区全景
(2)　縄文時代包含層調査区全景
(2)　甕棺群全景（東から）
(2)　１号甕棺出土状況（東から）
(2)　３号甕棺出土状況（北から）
(2)　５号甕棺出土状況（東から）
(2)　７号甕棺出土状況（東から）
(2)　２号土壙（東から）
(2)　３号土壙（東から）
(2)　８号土壙（東から）
(2)　９号土壙（東から）
(2)　11号土壙（東から）
(2)　16号土壙（西から）
(2)　20号土壙（南西から）
(2)　23号土壙（西から）
(2)　25号土壙（西から）
(2)　29号土壙（西から）
(2)　１号掘立柱建物（北東から）
(2)　３号掘立柱建物

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経過

一般国道202号線今宿バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は従来、建設省九州建設局の委託を受けた福岡県教育委員会によって昭和43年から調査は路線決定のための分布調査及び予備調査、試掘調査及び一部の本調査が断続的に実施され、各々報告書が刊行されている。その後福岡県教育委員会文化課から福岡市域内の文化財については福岡市で対応して欲しいとの要請があり、協議の結果当該地域については福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課がこれを担当することになり昭和61年９月から大塚遺跡の発掘調査に着手し、徳永遺跡群、蓮町遺跡群、飯氏遺跡群、周船寺遺跡群等の調査を実施し、平成３年度にそれまで未買収の飯氏遺跡群Ⅰ区Ｃ調査区の調査をもって今宿バイパス関係の発掘調査を終了した。今回報告する地点は福岡市文化財分布地図（西部Ⅱ）の周船寺遺跡群に隣接していたので飯氏遺跡群の調査時に試掘調査を実施し、その結果土壙、甕棺、溝等の遺構が検出されたので発掘調査を実施することとなった。調査は平成２年４月１日から同年９月14日まで実施した。

福岡市域内でこれまで調査された今宿バイパス関係の埋蔵文化財報告書は以下の通りである。なお、この報告書が最終報告書となる。

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第１集　福岡県教育委員会　1970
—福岡市大字拾六町所在の遺跡群—湯納遺跡　宮の前遺跡Ｅ地点　高崎古墳群　大又遺跡
今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第２集　福岡県教育委員会　1971
—福岡市大字徳永・飯氏所在の遺跡—若八幡宮古墳　飯氏馬場遺跡　飯氏鏡原遺跡
今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第３集　福岡県教育委員会　1973
—福岡市大字拾六町所在の遺跡—高崎古墳群　大又遺跡
今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第４集　福岡県教育委員会　1976
—福岡市大字拾六町所在湯納遺跡の調査—
今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第５集　福岡県教育委員会　1977
—福岡市西区・糸島郡前原町所在遺跡の調査—湯納遺跡　今宿大塚南遺跡　今宿高田遺跡
今宿小塚遺跡
今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第10集　福岡県教育委員会　1984
—今宿高田遺跡—
大塚遺跡・女原遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書第224集　福岡市教育委員会　1990
国道202号線今宿バイパス関係文化財調査報告Ⅰ
徳永遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書第242集　福岡市教育委員会　1991
国道202号線今宿バイパス関係文化財調査報告Ⅱ
徳永遺跡Ⅱ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第306集　福岡市教育委員会　1992
国道202号線今宿バイパス関係文化財調査報告Ⅲ
飯氏遺跡群１　福岡市埋蔵文化財調査報告書第352集　福岡市教育委員会　1993
国道202号線今宿バイパス関係文化財調査報告Ⅳ
飯氏遺跡群２　福岡市埋蔵文化財調査報告書第390集　福岡市教育委員会　1994
国道202号線今宿バイパス関係文化財調査報告Ⅴ

2．調査の組織

平成２年度から同６年度の調査関係者は以下のとおりである。

調査委託　建設省九州地方建設局　福岡国道工事事務所

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花　剛

調査総括　文化財部長　後藤　直
埋蔵文化財課長　折尾　学　柳田純孝（前任）
埋蔵文化財課第一係長　横山邦継（現）　飛高憲雄（前）

調査庶務　埋蔵文化財課第一係　入江幸男

調査担当　埋蔵文化財課第一係　松村道博　宮井善朗　長家伸

試掘調査　埋蔵文化財課第一係　小畑弘巳

調査・整理補助　池田光男　濱石正子　入江のり子　撫養久美子　山下智美　大庭友子

調査作業　太田孝房　鬼丸邦宏　平田信吉　三苫宗登　山崎吉松　朱雀義雄　吉岡清巳　有吉貞江　池　弘子　上原チヨ子　柴田シズノ　清水文代　末松信子　末松克子　杉村文子　津田和子　中牟田サカエ　中村千里　西島タミエ　西島初子　西納テル子　西能トシエ　能美ヤエ子　野坂康子　古井モモエ　松本愛子　三苫ヨシ子　森友ナカ　吉岡員代　吉岡竹子　吉岡蓮枝　吉積ミエ子　那賀久子　那賀ミツ子　箱田邦子　徳重コマキ　徳重忠子　間せつ子　柴田麗子　中村初子　西田マキエ　高木正代　後藤ミサヲ　坂田セイコ　小林フミ子　坂本キミ子　大神マツノ　吉岡アヤ子　藤野フジ子　柴田タエ子　小金丸ミネ子　井上靖崇

整理作業　飯田千恵子　太田頼子　西原由紀子　太田次子　太田順子　濱野年代　牟田恵子　林由紀子　大石加代子　堂園晴美　土斐崎つや子　小森佐和子　山田順子　冨永優子　山下恵美子

3．遺跡の位置と環境

周船寺遺跡群は糸島平野の東縁にあたり福岡市西区周船寺・千里に所在する遺跡群である。糸島平野の南には背振山稜から派生する浮嶽、獅子舞嶽、井原山等の標高800～900ｍを測る山塊が聳え、さらにその北には飯場山、王丸山、高祖山等標高400～700ｍの中起伏の山地を形成し背振主稜とは独立した地塁群となり、階段上に低くなり洪積台地、沖積平野となる。これらの山塊に源をもつ長野川、雷山川、瑞梅寺川の沖積作用により低地を形成し、海岸線に砂丘が発達するためその背後は排水不良となり過湿地を生み出している。糸島半島の中部以南から背振山塊の軸部にわたって糸島花崗閃緑岩が広く分布している。さらに飯場付近は変成岩類があり泥、砂質岩、チャート、緑色岩を伴い、その北方には塩基性岩類も認められる。

糸島平野と今宿平野[註1]とを界する高祖山からは多くの低丘陵及び台地、沖積微高地を生み出しているが、今回調査した周船寺遺跡群はその東側にあたる。西側を瑞梅寺川の支流の一つである周船寺川から枝別れした谷響川により限られ、東は高祖山（416ｍ）から北へ延びる低山地の麓までの沖積微高地の先端部に位置する。山麓から北へ展開する狭い微高地でその規模は東西300ｍ、南北500ｍ、標高13ｍ前後を測り、南から北へ緩やかに傾斜する。

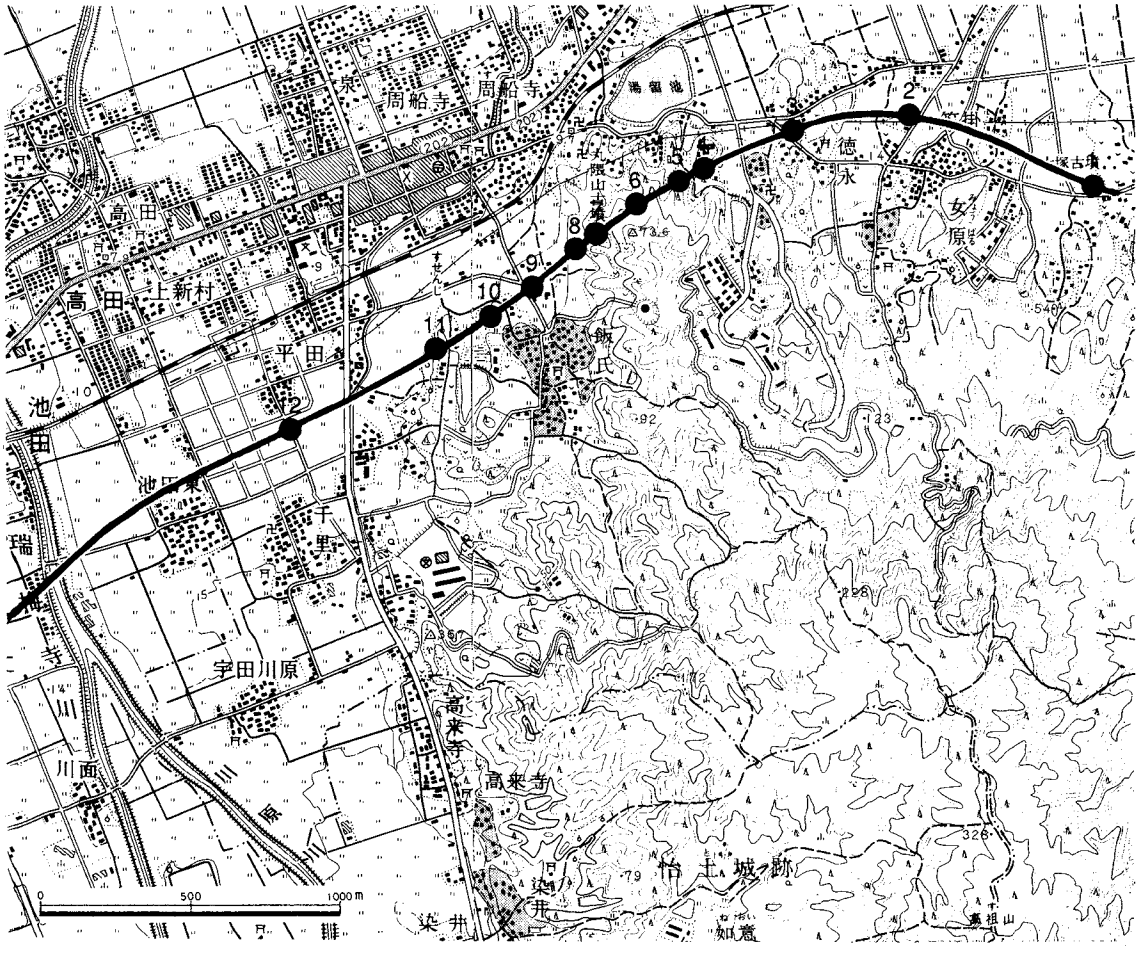
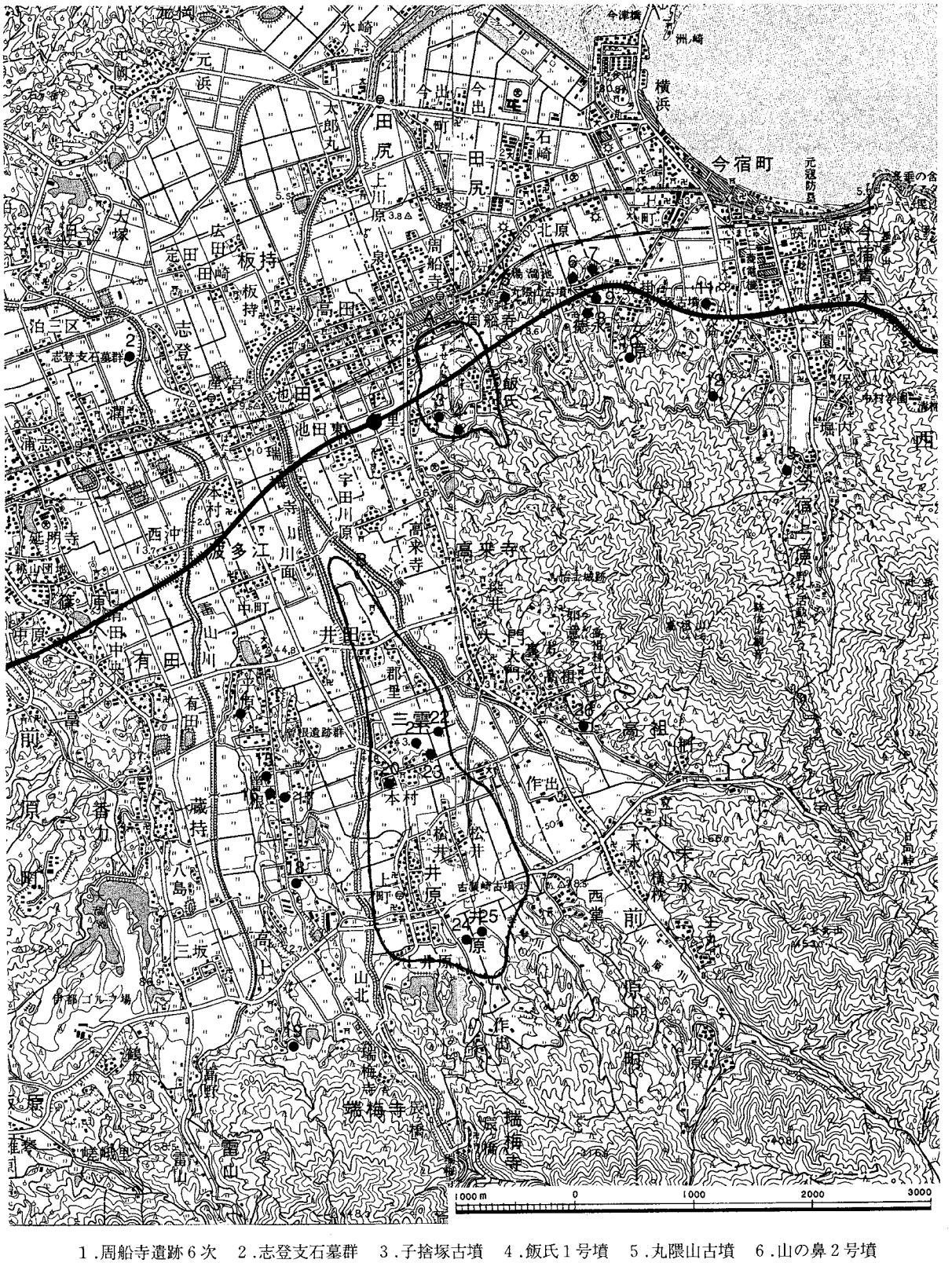


Fig. 1　国道202号線今宿バイパス路線内遺跡位置図（1/25,000）

地点	遺跡名・地区次数	遺跡略号	調査番号	調査地所在地	調査面積㎡	調査期間	調査担当	概　　要
1	大塚遺跡６次	OTS	8640	西区今宿字大塚	1,200	860924～861229	二宮忠司、吉武学	中世集落跡
2	女原遺跡３次	MBR	8640 8720	西区女原字中牟田、他	7,500	860924～861229 870701～871031	二宮、松村道博、吉武	古墳時代集落、他
3	徳永遺跡群Ⅰ区	TKU	8808	西区徳永	1,282	880410～880610	松村、宮井善朗	中・近世集落
4	徳永遺跡群Ⅱ区	TKU	〃	〃	1,712	880601～881006	松村、宮井	古代包含層
5	徳永遺跡群Ⅲ区	TKU	8846	〃	1,760	890117～890331	松村、宮井	古墳時代集落
6	徳永遺跡群Ⅳ区	TKU	〃	〃	1,314	890301～890331	松村、宮井	古墳時代包含層
7	蓮町遺跡群Ⅰ区	HMC	8920	西区飯氏字蓮町	1,083	890420～890720	松村、宮井	弥生終末～中世包含層
8	蓮町遺跡群Ⅱ区	HMC	〃	〃	1,214	〃	松村、宮井	古墳時代・中世集落
9	飯氏遺跡群Ⅰ区	ＩＩＪ	8921	西区飯氏字井尻他	8,900	890515～900110	松村、宮井、長家伸	古墳時代集落
１０	飯氏遺跡群Ⅱ区	ＩＩＪ	〃	西区飯氏字ﾑﾀｻｶ	500	900188～900331	松村、宮井、長家	弥生時代甕棺墓群
１１	飯氏遺跡群Ⅲ区	ＩＩＪ	〃	西区飯氏字鏡原	6,588+α	890815～900331	松村、宮井、長家	弥生甕棺墓群、古墳集落
１２	周船寺遺跡群６次	ＳＳＪ	9001	西区大字千里尾形町他	7,500	900401～900914	松村、長家	弥生時代集落、縄文時代包含層

Tab. 1　国道202号線今宿バイパス路線内遺跡調査一覧表



1.周船寺遺跡6次　2.志登支石墓群　3.子捨塚古墳　4.飯氏1号墳　5.丸隈山古墳　6.山の鼻2号墳
7.山の鼻1号墳　8.下谷古墳　9.若八幡宮古墳　10.小松原1号墳　11.今宿大塚古墳　12.谷上古墳
13.本村5号墳　14.平原遺跡　15.先山古墳　16.ワレ塚古墳　17.銭亀塚古墳　18.高上大塚古墳
19.屋敷1号墳　20.三雲南小路遺跡　21.端山古墳　22.茶臼塚古墳　23.築山古墳　24.井原2号墳
25.井原1号墳　26.高祖古墳　A　飯氏遺跡群　B　三雲・井原遺跡群

Fig. 2　周辺遺跡分布図 (1/50,000)

糸島平野の中心部に位置する前原市は律令時代には怡土郡にあたり古くは『魏志倭人伝』にいうところの伊都国にあたり平原遺跡を初めとして縄文時代から各時代にわたる多くの遺跡がある。以下糸島平野東部から福岡市域にかけての主要な遺跡を概観する。縄文時代前期の遺構、遺物は少なく飯氏鏡原遺跡、若八幡宮前遺跡等の調査時に付随して遺構外から押型文土器が採集されている。後、晩期になると著しく遺跡数が増加し沖積微高地への進出が窺われる。[註2] 三雲遺跡群の石橋・サキゾノ地区の調査では住居跡や埋甕、千里シビナ遺跡（周船寺遺跡群第３次調査）でも埋甕が検出されている。弥生時代[註3]～古墳時代の遺跡では近年、井原[註4]、三雲遺跡群が調査され住居跡や墳墓が数多く検出されているが、古くは江戸時代の国学者青柳種信は『柳園古器略考』[註5]を著し三雲南小路、井原鎚溝の甕棺から発見された多数の古鏡や青銅器・玉類をまとめている。末盧国から奴国に至る中継地点にあたり、一大卒を置く伊都国の繁栄を垣間見ることが出来る。弥生時代全般にわたりこれまで多くの遺構が調査されているが甕棺を除き特筆すべきものは少ない。後期から終末期の今宿五郎江、浦志遺跡から小銅鐸が各々1点出土しており注目される。古墳時代になるとこの地域には首長墓である前方後円墳が増加する。調査地点の北北東1.5kmには丸隈山古墳があり、今宿平野の丘陵先端、あるいは独立丘上に若八幡宮古墳や山の鼻古墳、鋤崎古墳、今宿大塚[註7]、飯氏二塚等の今宿古墳群を形成している。若八幡宮古墳の主体部は木棺直葬[註6]で４世紀中[註8]ごろ、丸隈山古墳は内部主体が竪穴系横口式石室で5世紀初頭、今宿大塚古墳は二重環濠をもつ６世紀前半代といわれている。一方瑞梅寺川流域には端山、築山古墳がある。このなかで最も古いものは端山古墳であろう。内部主体は明らかではないが墳丘確認調査の出土遺物から４世紀中ごろであろう。同様に築山古墳も内部主体等は不明であるが墳丘確認調査の出土遺物から４世紀末頃と考えられる。又雷山川流域の曽根丘陵には先山、ワレ塚、銭瓶塚、高上大塚古墳は５世紀前半から以降の構築であり盟主層の変化を窺わせる。高祖山から派生する丘陵部には300をこえる群集墳が築かれている。集落址は先に述べた三雲、井原遺跡群の調査で弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡を多く調査し多くの成果が得られている。調査地点の南約2kmの位置に朝鮮式山城怡土城がある。『続日本紀』によれば吉備真備等により天平勝宝８年に築城が始まり神護景雲2年に完成されたとされる。高祖山の西斜面を利用して構築された山麓に土塁、水門、城門が設けられている。

註１　福岡市　「福岡市土地分類細部調査報告書」　1990
　２　福岡県教育委員会　「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第2集-福岡市大字徳永、飯氏所在の遺跡」　1971
　３　福岡県教育委員会　「三雲遺跡　Ⅲ」福岡県文化財調査報告第63集　1982
　４　福岡市教育委員会　「千里シビナ遺跡」福岡市文化財調査報告第88集　1982
　５　福岡県教育委員会　「三雲遺跡Ⅰ～Ⅳ」福岡県文化財調査報告第　1980～1983
　　前原町教育委員会　「井原遺跡群」前原町文化財調査報告第25集　1987
　　前原町教育委員会　「井原遺跡群Ⅷ」前原町文化財調査報告第32集　1990
　　前原町教育委員会　「井原遺跡群」前原町文化財調査報告第35集　1991
　６　福岡市教育委員会　「山の鼻一号墳」福岡市文化財調査報告第309集　1992
　７　福岡市教育委員会　「丸隈山古墳」福岡市文化財調査報告第146集　1986
　８　福岡市教育委員会　「鋤崎古墳」福岡市文化財調査報告第112集　1984

Fig. 3　調査位置及び周辺地形測量図（1/4,000）

Ⅱ　調査の記録

1．調査の概要

調査地点は糸島平野の東端にあたり、標高13mを測る沖積微高地に位置する。調査は幅50mで東西に長く拡がり道路、水路などにより寸断されていたので東側からそれぞれⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区として調査を実施した。遺構番号は各々遺構略号を付し通し番号とした。遺構は耕作土の直下に認められたが甕棺の上甕はほとんどが削平を受け、土壙も残存状態が悪く、住居跡は一棟も検出出来無いなど長年の水田化のため大きく削平を受けたものと考えられる。以下各区から検出した遺構についてその概要について述べる。

Ⅰ区では調査区の北東部から縄文時代晩期の包含層を確認することができた。遺物の量は極めて少なく散発的であるが一部集中する部分があり住居跡の可能性が持たれたが遺構としては把握出来なかった。東端からは弥生時代前期の甕棺墓が8基検出しさらに調査区北側に拡がるものであろう。管玉が2個出土した他は小壷などの副葬品は認められない。他にⅠ区の西側からⅡ区にかけて弥生時代中期を中心とする不定形の土壙30基、時期不明の掘立柱建物1棟がある。

Ⅱ区でも遺構の残りは悪いがピット、土壙、掘立柱建物を中心とした弥生時代の遺構が西半部に多く検出出来た。土壙は不整形の土壙であるが、20号だけは弧状を描く細長いものであるが甕、壷、高坏、器台などがほぼ完形品を主体とした土器が出土し祭祀用の遺構と考えられる。その南側に1×2間、3×4間の掘立柱建物が2棟が検出出来た。東側には南北に走る浅い溝があり建物を囲むものであろうか。Ⅲ区では西にいくに従い基盤層が下がっており、遺構は減少し東側に土壙、溝、ピットが僅かに見られ、遺跡の西限を示すものであろう。

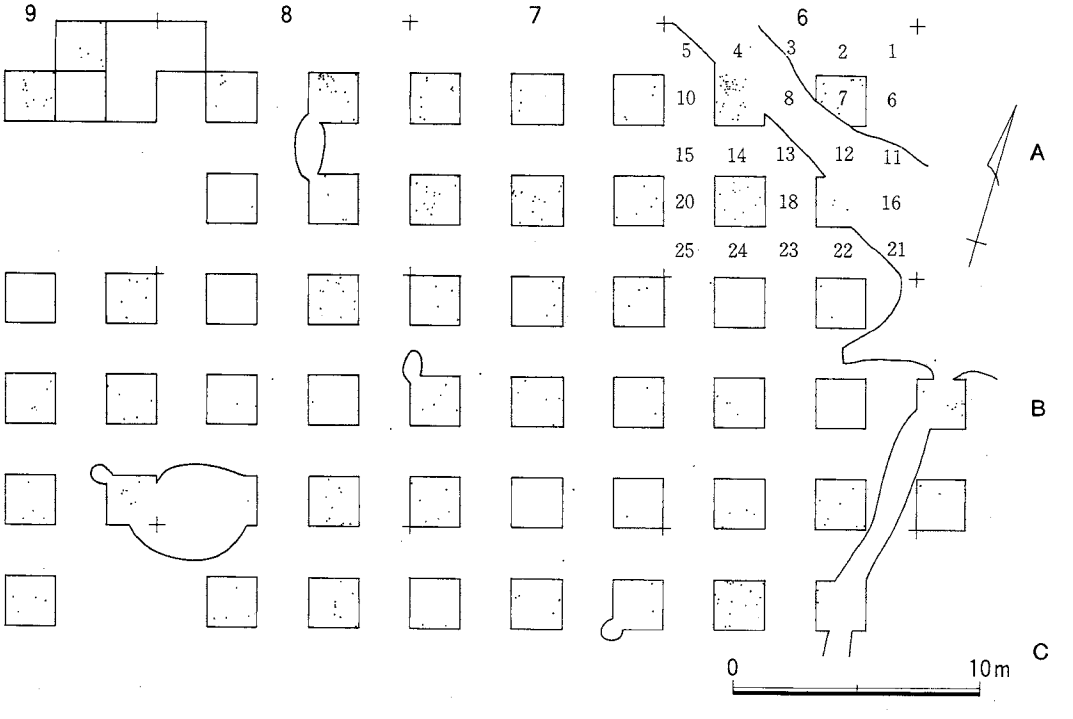


Fig. 4　縄文時代包含層グリッド設定図（1/300）

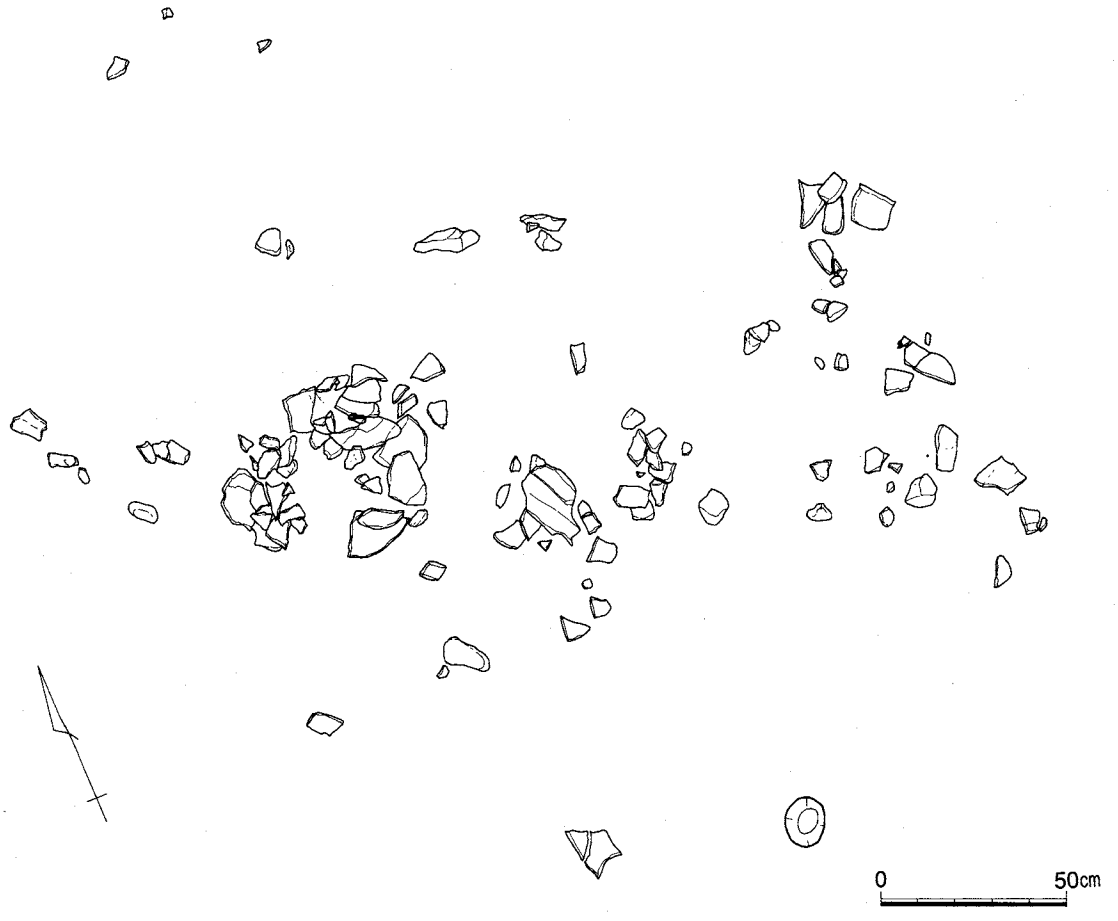


Fig. 5　縄文式土器出土状況実測図（1/20）

2．縄文時代晩期包含層の調査

（1）調査方法

Ⅰ区の遺構検出時に基盤層から土器片、黒耀石のフレイク等が点々と採集されたので上面の調査後に縄文時代包含層の調査を実施することにした。上の遺構の調査時に10ｍごとのグリッドを用いていたので、その杭を活用してその中を２ｍ毎に細分して北東隅から西北に順次算用数字で表し大グリッドの後に1、2、……としＡ-9-2と言うように表記した。

（2）遺物出土状況（Fig. 5, PL.5）

遺物は遺構検出面の少しくすんだ黄褐色土から５㎝から10㎝の間に出土し、下層になるに従い減少する。包含層は調査区全体に拡がる訳ではなくＡ-7～Ａ-9区の北側に多く出土する傾向が窺われ、さらに北側に拡大するものであろう。その中でもＡ-9-6区に特に集中した個所（Fig-4）が見られる他は10点前後を数えるものがほとんどである。前述したように削平が著しいために現状では調査地全体が平坦な状況を示すが本来縄文晩期の包含層のある地点から北側が徐々に高くなり微高地をなしていたものであろう。沖積微高地の縁辺で削平を免れた包含層の一部分が遺存していたものである。

（3）出土土器（Fig. 6, 7）

いずれも縄文時代晩期の土器である。１から４は小型の浅鉢である。１は半精製品で口縁部から胴部にかけて一部欠失するがほぼ完形品で口径15.4㎝、器高6.8㎝を計る。丸い底部から胴部中央で不明瞭な稜をもち頸部ですぼまり口縁部が内湾しながら開く。胎土には石英粒、砂粒を少量含むが精良で色調は黒褐色から茶褐色を呈する。内外面とも研磨状のナデを施す。２も同様な器形を示すもので

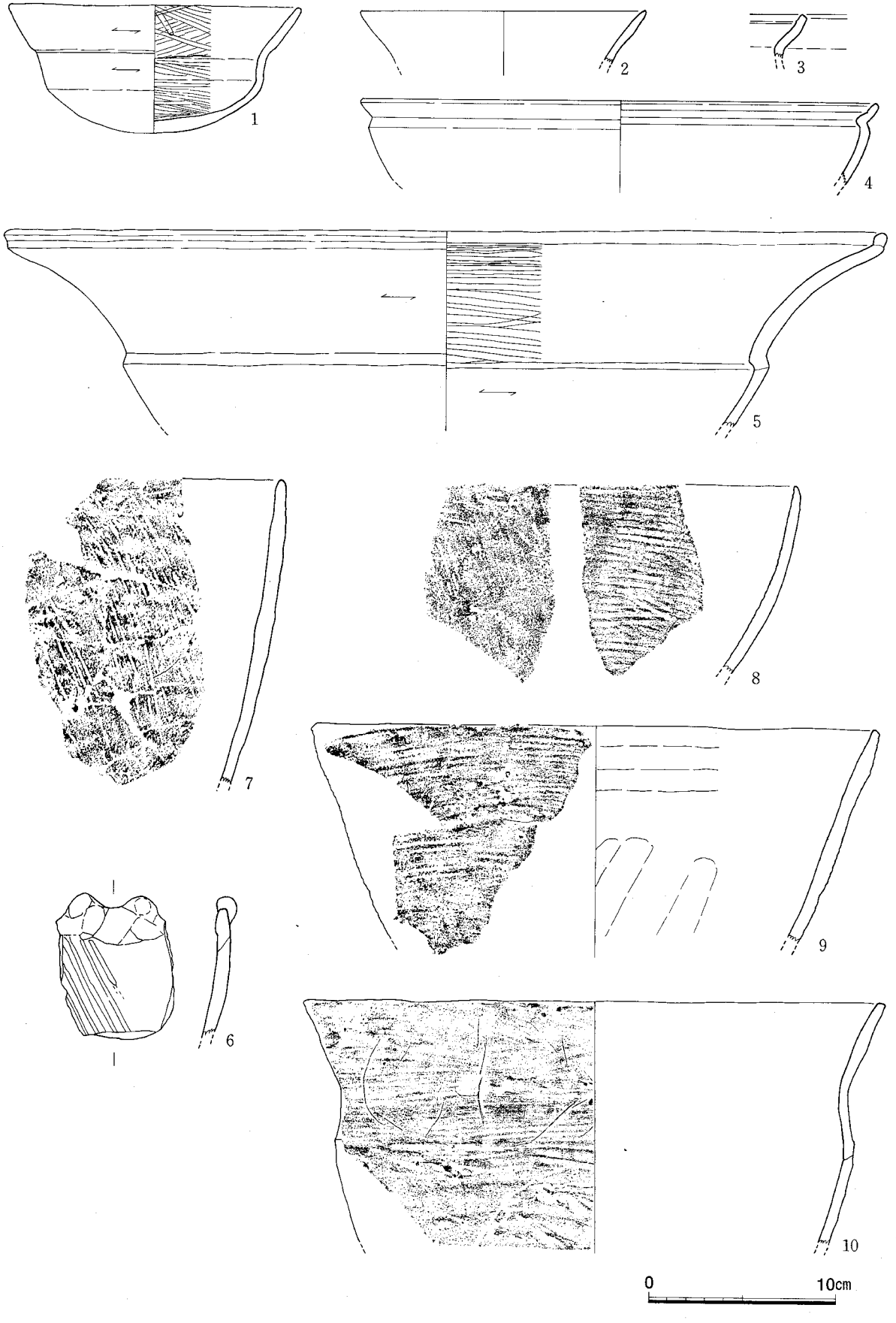


Fig. 6　包含層出土縄文式土器実測図(1) (1/3)

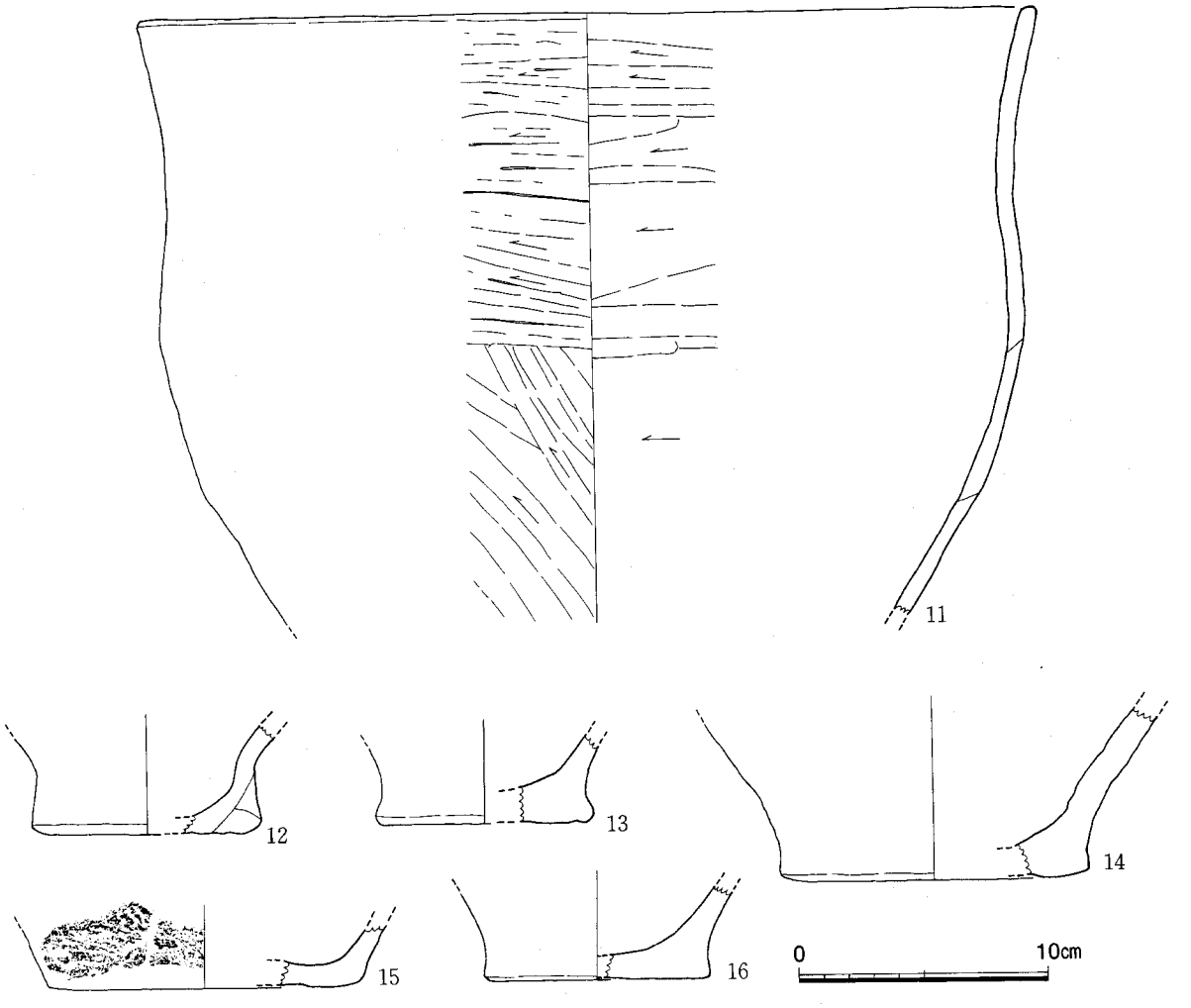


Fig. 7　包含層出土縄文式土器実測図(2) (1/3)

あろう。3は口唇部内面が肥厚して段を有する。5は精製の大型の浅鉢で口径46.7cmを計る。胴部から底部の下半を欠失する。口縁部は直立し外面に凹線、内面に稜をもつ。また内湾する胴部と外反する頸部の境は大きく屈曲し内外面の稜が顕著である。胎土には砂粒を少量含むが精良で茶褐色である。6から11は粗製の深鉢である。6は口縁部2ヶ所に山形の突起を作り出す。外面は荒い条痕、内面は篦状工具により横方向にナデている。胎土には砂粒を多く含み茶褐色を示す。7から9は胴部から口縁部に直線的に開く形態で条痕整形を行う。条痕をナデ消しているのもある。10、11は頸部ですぼまり口縁となる。内外面とも条痕調整でその後ナデている。12から16は深鉢の底部片である。内面はナデ、外面は条痕調整と思われるが器面が磨滅し15のみ条痕が残る。

（4）出土石器

縄文時代晩期包含層から出土した石器は213点出土した。この内35点を図示した。

石　鏃　(Fig. 8-1～5, PL. 30-1～5)

石鏃は5点出土した。**1**　側辺部に研磨が施された二等辺三角形を呈する石鏃で、両脚、先端部の一部を欠損している。**2**　一部自然面を有する剝片鏃で、裏面には研磨が施されている。抉入部は深い。**3**　脚部に厚み、幅を持ち両方に段を有し、断面半円状の形態を持つ。両面とも細かな押圧剝離が認められるが、側面観は左からの剝離が多い。**4**　大まかな剝離によって仕上げられた三角鏃で、裏面には素材の剝離面を有す。断面は肉厚で先端部には細かな剝離を有する。**5**　先端部、脚部の一部を欠損する剝片鏃で、両側辺部に細かなリタッチを加えているが、抉入部は深く断面三角形を呈す

る。先端部裏面には厚さを調整するために剝離が認められる。すべて黒耀石製である。

掻　器・削　器　(Fig. 8-6・7　10-28, PL. 30-6・7)

6　左側辺部を刃部とし、切出形ナイフの形状に類似する削器である。刃部形成は左側辺部からの剝離が主で、裏面はやや細かな剝離を有し、断面は肉厚の三角形を呈する。**28**　サヌカイト製の削器である。横剝ぎの剝片の端部を表面からの二次加工により刃部を形成している。下端部にも両面からの剝離が認められ、掻器としての利用も考えられる。**7**　掻器（コンケーブスクレーパー）である。下端部の中央部に大まかな剝離により「コ」字状を呈する下端部とし、この部分を刃部として使用している。6. 7とも黒耀石製。

サイド・ブレイド　(Fig. 8-8, PL. 30-8)　**楔形石器**　(Fig. 8-9・10, PL. 30-9・10)

8　裏面側辺部に細かな剝離が見られるサイド・ブレイドである。黒耀石製。**9**　両面の先端部に打裂痕が認められ、右側辺部には下端からの打撃による剝離面が認められる楔形石器である。肉厚の断面を有する。9・10とも黒耀石製。

石　核　(Fig. 8・9-11～13, PL. 30-11～13)

石核は13点出土したが、図示したのは3点である。**11**　調整打面を持つ石核で、表面調整のため左側辺部からと下端からの剝離が認められる。**12**　調整打面を持つ石核で、打撃方向はすべて上からの剝取方法を持つ。**13**　打面再生剝片で、剝取方法は調整打面から行なわれている。3点ともすべて黒耀石製である。

折断剝片　(Fig. 9-14～18, PL. 30-14～18)

折断剝片は47点出土したが、図示したのは5点である。頭部を残すものは**14・16～18**の4点、末端部を残すもの**15**である。すべて折りとられたもので、切断（切断剝片；剝片の側辺部の両端か一端にノッヂ状の剝離を加えて折取る方法を切断技法と呼称しているが、この技法により剝ぎとられた剝片を切断剝片と呼び、ノッヂ状の剝離を加えないで折取る方法を折断技法と呼んでいる）されたものはない。すべて黒耀石製。

14　表面に自然面を有する剝片で、中央部付近を表面からの加撃によって折取ったものである。二つの剝離面をもつ状態であるが、不純物により二つに分けられた状態となっている。表面には自然面を有し、裏面にはバルバー・スカーが残る。打面は平坦面である。**15**　折断により末端部が残る。両側辺に二次加工を加えることなく表面側辺からの打撃によって折断している。折断された面に細かな剝離が認められるが、これは折断後に付けられたものである。表面観は自然面を残し、素材の剝離方向は上からのものである。右側辺に細かなリタッチが施されているが、左側辺にはその痕跡は認められない。**16**　横長剝片を折断したもので頭部が残る。右側辺部下部からのリングが入ることから裏面に圧力が加わって折断されている。素材の剝片の剝離方向は上方向からのものである。裏面は大きなバルバー・スカーが残り横長に剝離された状況が判断できる。打面は平坦打面である。

17　小型の縦長剝片の末端部を折断している。折断面から裏面からの圧力によって折取られたものである。素材の剝離方向は上方向のみで表面に自然面を有する。両側辺に細かなリタッチが認められサイド・ブレイド的要素をもつ。打面は小さく剝離され自然面である。**18**　縦長剝片の末端部を折断しているもので、裏面からの圧力によって折取られたものでその後二次加工を施している。素材の縦長剝片の表面には上下二方向からの剝離面が認められる。裏面には側辺部に二次加工を加えている。打面は小さく平坦面である。

縦長剝片　(Fig. 9. 10－19～27, PL. 30. 31-19～27)

図示した縦長剝片の剝取方向は、一方向からのもの6点、上下二方向が3点、上下横方向が1点で

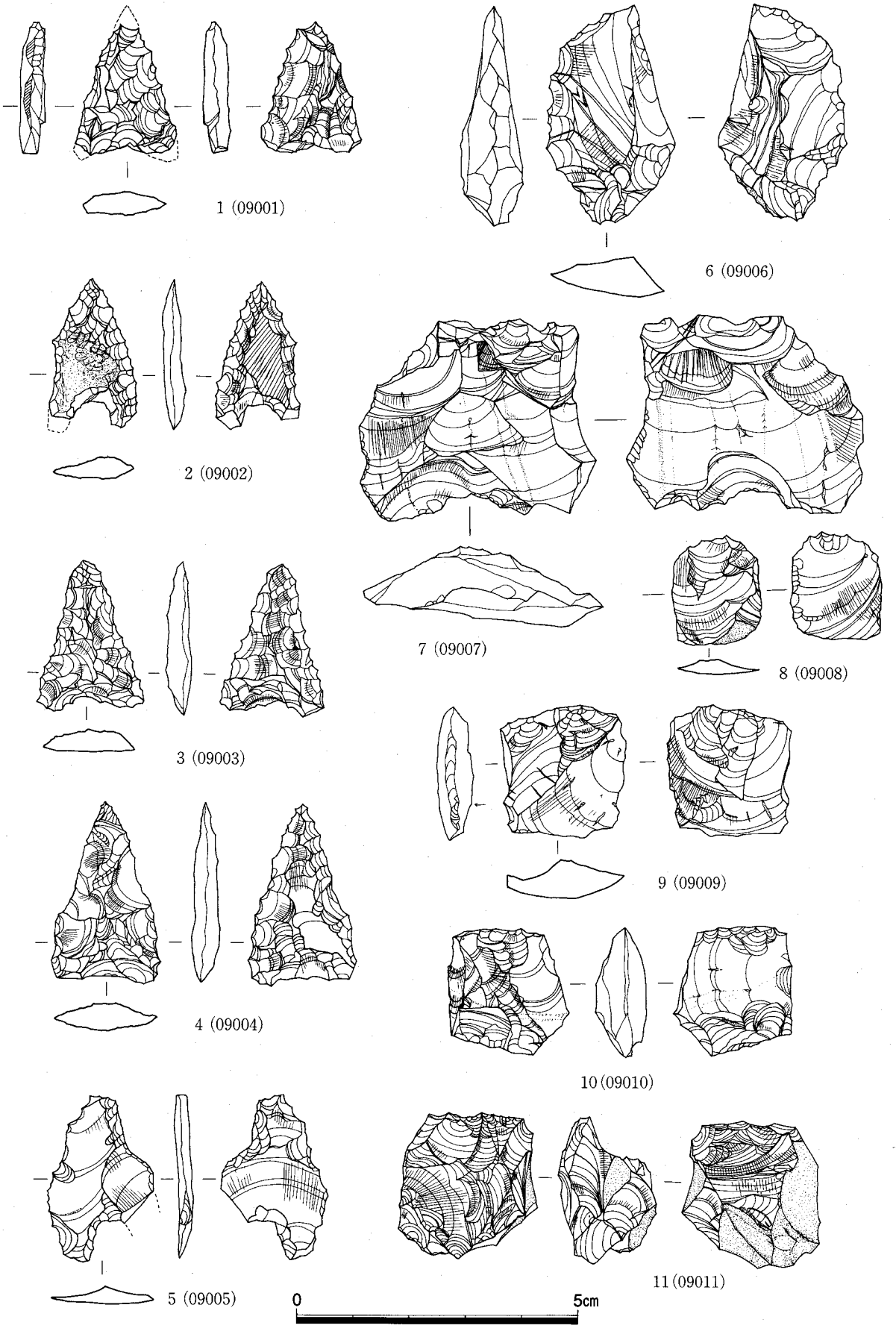


Fig. 8　包含層出土石器実測図(1)(縮尺1/1)

ある。石核との関連から考えると出土した石核からはこれだけ長い剝片を剝取した形跡を持つ石核は認められず、石核と剝片との形態・技法の相違が窺える。出土した石核からは、**20.23.26** の剝片が剝取されたものと思われる。しかしながら縄文時代後期に佐賀県鈴桶遺跡にみられる縦長剝片を連続的に剝取する技法（鈴桶型技法）の流れを汲む技法が縄文時代晩期まで認められる（福岡市早良区田村遺跡から出土、福岡市調査報告書第104集Ｐ26に収録）ことから、当遺跡からは発見できていないが、同様の技法が存在することが彷彿される。特にこれから述べる縦長剝片と石核とには技術的には共通点はない。しかしながら縦長剝片が現存することから、それらを剝離した石核が現存したことは明らかである。しかしながら鈴桶技法そのものではなくその流れを組む技法が存在していたことは明らかである。

19　縦長の剝片で表面に自然面を有し、剝離方向は上からの剝離によるものである。打面は自然面に調整剝離を施し、剝取したものである。断面が部厚く Tool の素材としては不適当なものである。

20　縦長剝片であるが、これも Tool の素材としては断面が厚く側辺部の形状から側面再生剝片の可能性が高い。打面は平坦打面で、調整は行なっていない。表面の剝離方向は上・下・横位の三方向である。 **21**　自然面を打面にもつ縦長剝片である。表面の剝離は上・横位の二方向であるが、横位の剝離は一個所のみで他はすべつ上からの剝離である。側辺下位に自然面を残している。断面は三角形を呈し、側辺部に刃こぼれ状の剝離が認められる。**22**　側面・打面に自然面を残す縦長剝片である。断面三角形を呈し、鋭利な右側辺には僅かながら使用痕が認められる。打面は自然面に調整剝離したものである。 **23**　横長の剝片で、打面は調整剝離を施したものである。表面観は下位からの剝離が主体を占める。側面調整のための剝片の可能性が高い剝片である。 **24**　横幅の広い縦剝ぎの剝片である。打面は平坦打面で、表面観からは上からの剝離方向を示す。断面は薄く三角形を呈する。

25　小型の縦長剝片で、打面は平坦で裏面にバルブ、バルバースカーが残る。表面観は上下二方向の剝離方向をもち左側辺に二次加工を有する。右側辺部には自然面が残る。裏面下部には下方向からの剝離をもつ。 **26**　打面は自然面に調整加工を加えた調整打面である。剝離方向は表裏面とも上からの剝離をもつ。側辺部には細かな剝離がみられ使用された可能性がある。断面は薄い三角形を呈する。 **27**　表面に自然面を有し、打面は細かな調整された面を残す。両面とも一回の剝離面を残すが表面の自然面は背と成りうるものであり、右側側辺部に細かな使用痕が認められ、ナイフ形の形状を呈する。

打製石斧　(Fig. 10. 10-29～33, PL. 31・32-29～33)

29　肉厚の断面を持つ打製石斧である。大まかな剝離の後、周辺部に加工を加え形状を整えている。裏面には素材となった主要剝離面が認められる。 **30**　撥形に開く扁平打製石斧で、刃部の一部が欠損している。表面は左方向からの剝離、裏面は右方向からの剝離が主体である。 **31**　分銅型に近い形状を示すもので、上端部からの観察では未製品の感が強い。横剝ぎの剝片を素材として、周辺部に加工を施している。ただ刃部となる下端部には二次加工は認められない。 **32**　縦長の剝片を素材として両側辺部に二次加工を加え石斧としている。裏面の刃部部分に使用による擦痕が認められる。

33　分銅型の打製石斧である。上端部には二次加工がほとんど施されず周辺部・刃部に加工を加え打製石斧としている。石材は安山岩を使用している。

掻　器・削　器　(Fig. 10-34・35, PL. 32-34・35)

34　安山岩製のコンケーブ・スクレーパーである。一側辺部の摂理面を背とし、右側辺部に抉入部を形成して刃部としている。**35**　周縁部に二次加工を加えた削器である。

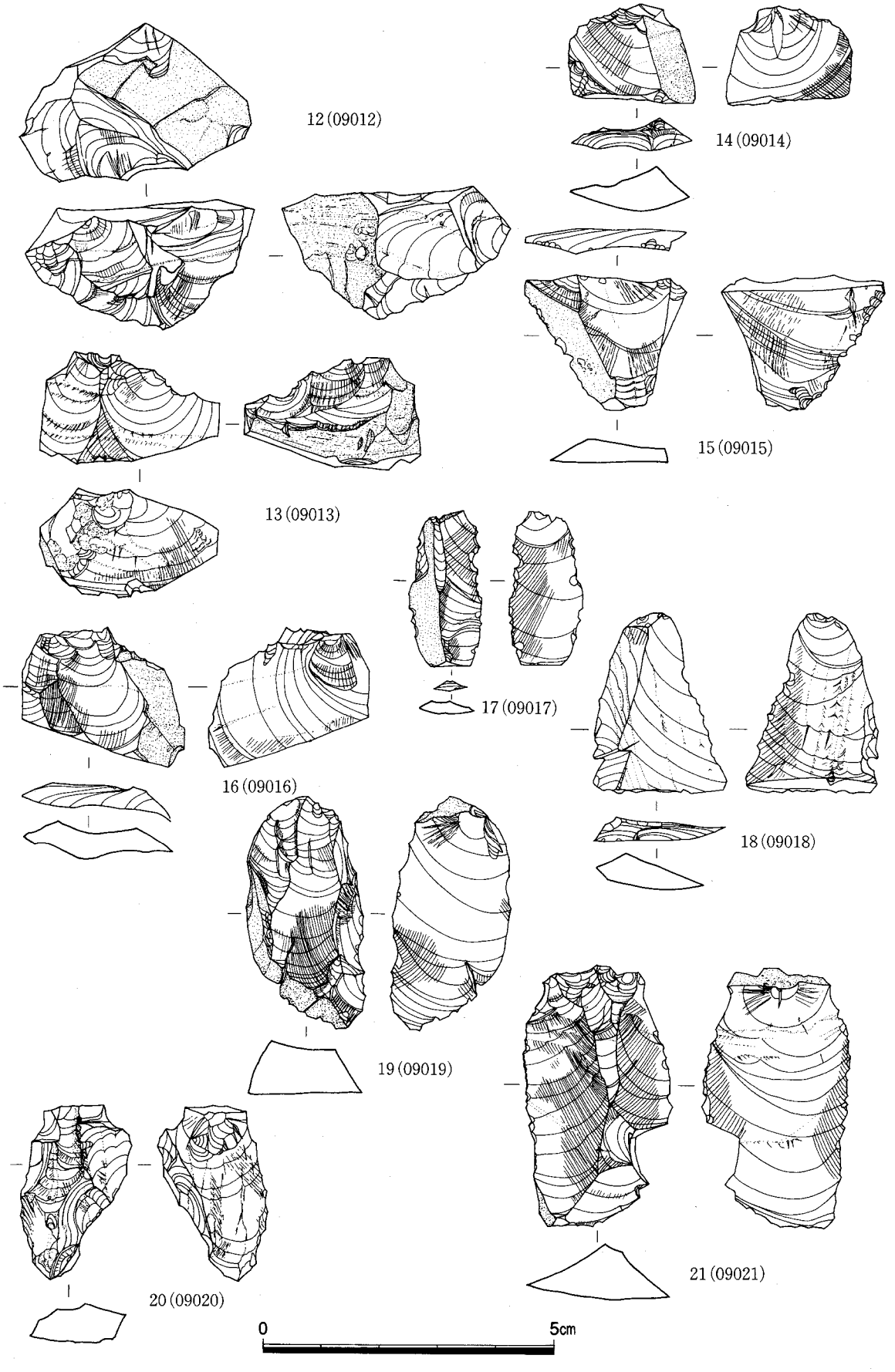


Fig. 9　包含層出土石器実測図 (2) (縮尺1/1)

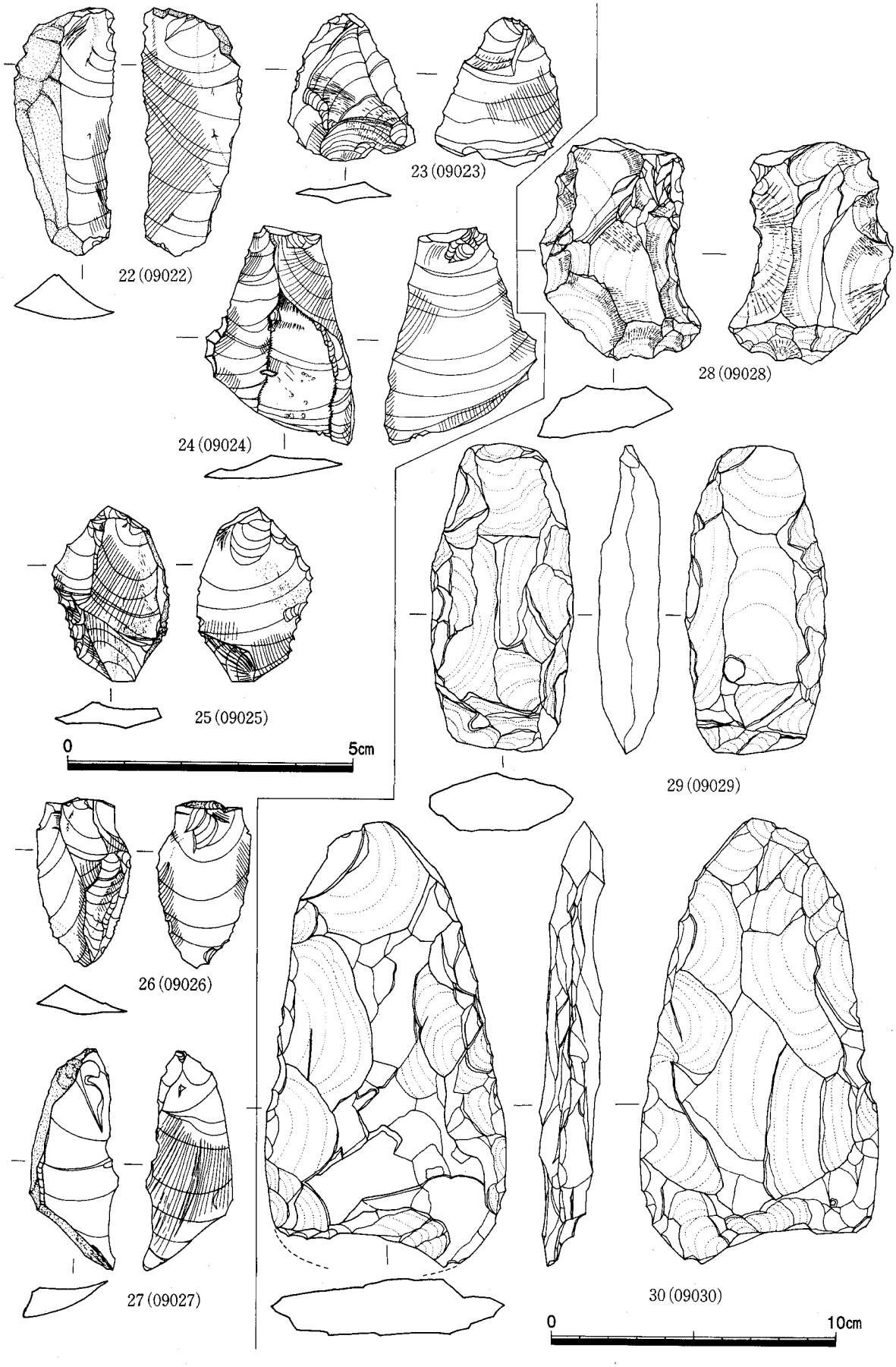


Fig. 10　包含層出土石器実測図(3)(縮尺1/1, 1/2)

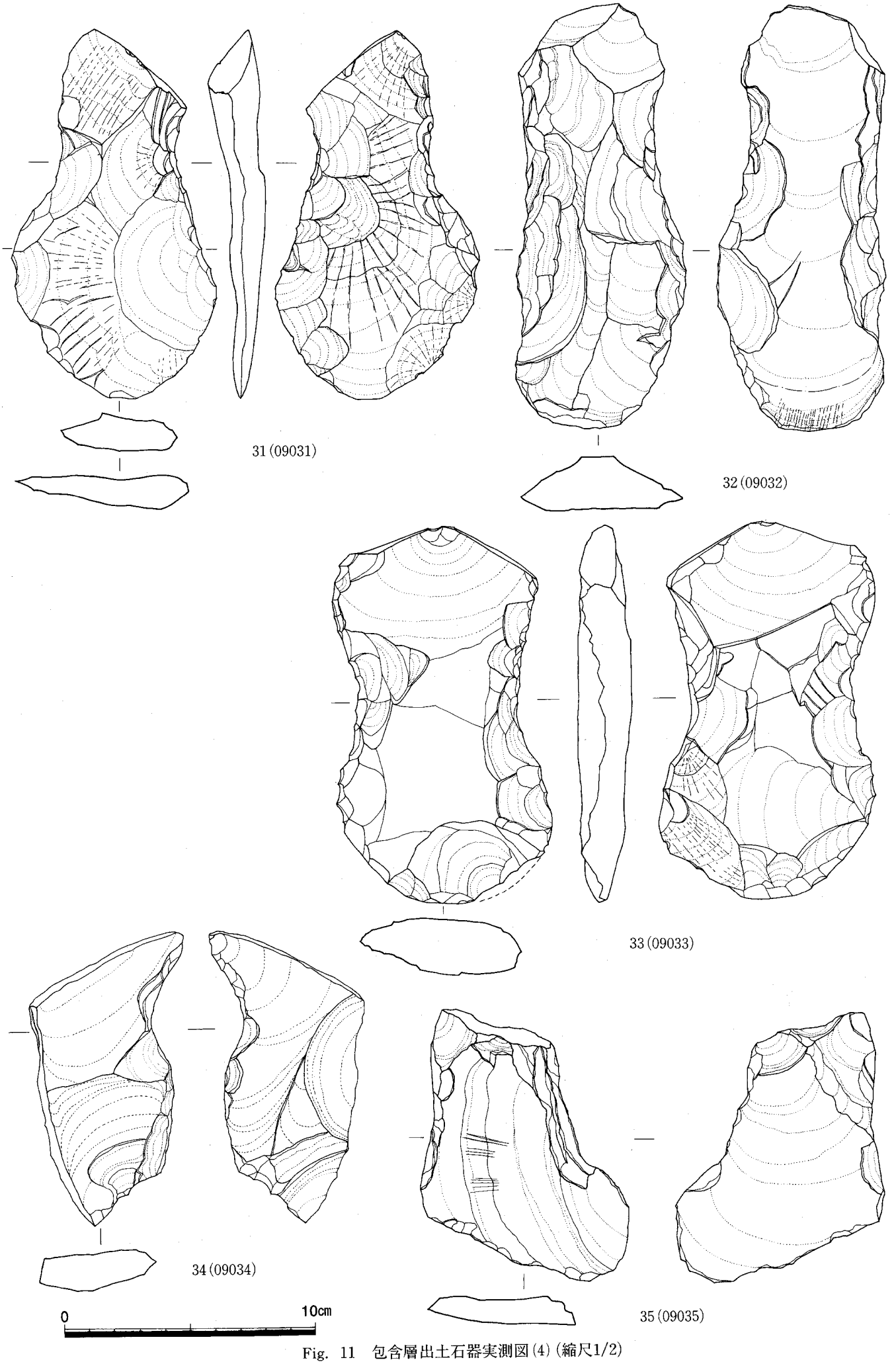


Fig. 11　包含層出土石器実測図(4)(縮尺1/2)

3．甕棺墓の調査

今回の調査で検出した甕棺墓は８基と少ない。北側は調査区外に拡大し、全体を調査していないので全体の基数は不明であるが、弥生時代前期の甕棺墓群からするとあまり増加するものではなくおそらく小規模の甕棺墓群であろう。上、下棺とも壺と壺を組み合わせたものであるが甕棺と呼称し、壺であっても上甕、下甕として説明を行う。

１号甕棺墓（Fig. 13, PL. 6，22）

１号甕棺は甕棺墓群のほぼ中央部に２～４号甕棺墓と相接しながら最も東に位置する。上甕の大部分と下甕の上半部が削平を受ける。壺と壺の組合せで上甕は底部を欠損し頸部から口縁部を打ち欠き胴部だけの遺存である。下甕は口縁部だけを打ち欠いている。主軸はＥ-30°-Ｓ、埋置角度は26°である。掘り方は甕棺ぎりぎりで楕円形を呈する。その規模は86×73cmである。

上甕　口縁部は打ち欠き、底部を欠損し胴部だけの遺存である。胴部最大径を上半に置く。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で黒褐色ないし黄褐色をなす。摩耗が著しく調整は明らかではないが、外面は研磨、内面はナデを施すものであろう。破片が小さく径が不明確であるが、もう少し大きくなろう。

下甕　口縁部を打ち欠いている。上端径38.6cm、器高66.6cm、胴部最大径59cmを計る。上げ底の底部で最大径を胴部上半におき、頸部と肩部の境に沈線を巡らし、口縁部に向かって内傾する外面は丹塗で、調整は外面の頸部から胴部が横、斜めの研磨、底部近くが斜め方向の研磨を施す。内面は口縁部近くが横の研磨、他はナデ調整である。

出土遺物（Fig. 13）

甕棺の覆土中から碧玉製管玉２個が出土した。いずれも短いもので１は径0.4cm、長さ0.85cmであ

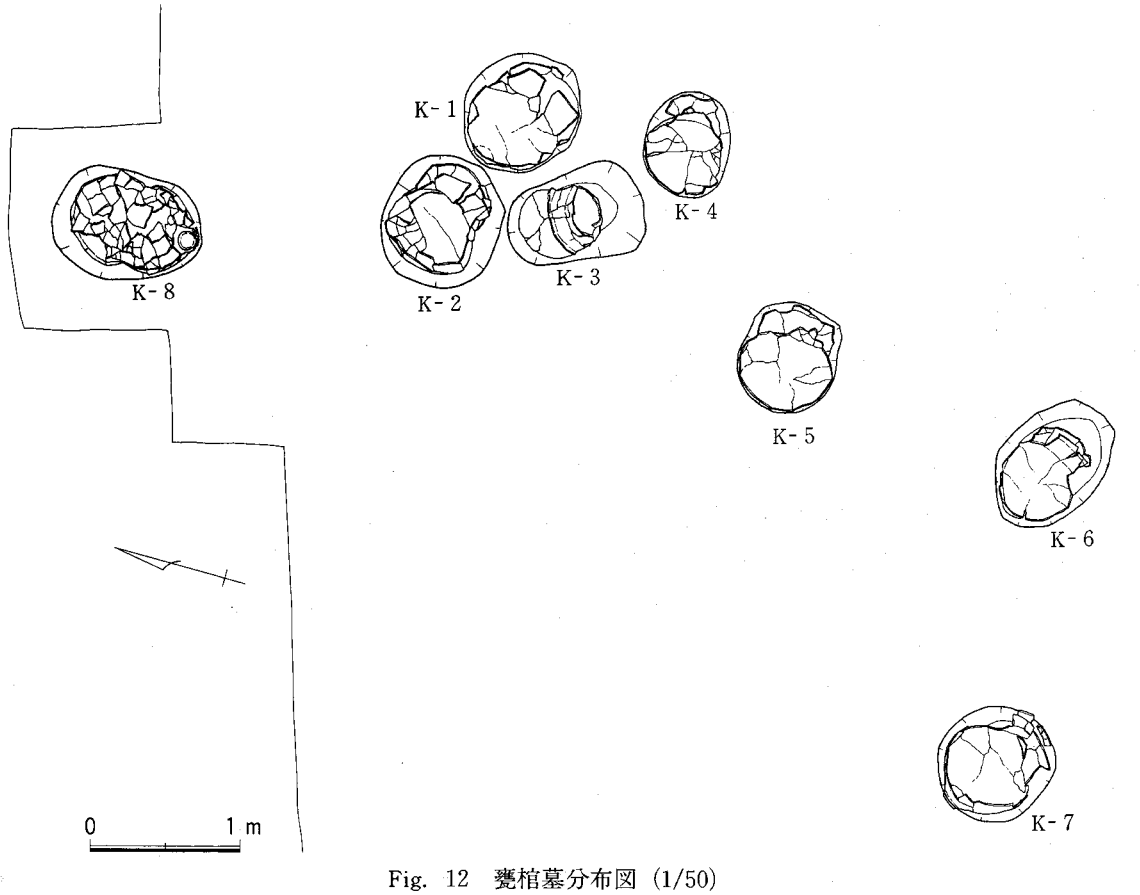


Fig. 12　甕棺墓分布図（1/50）

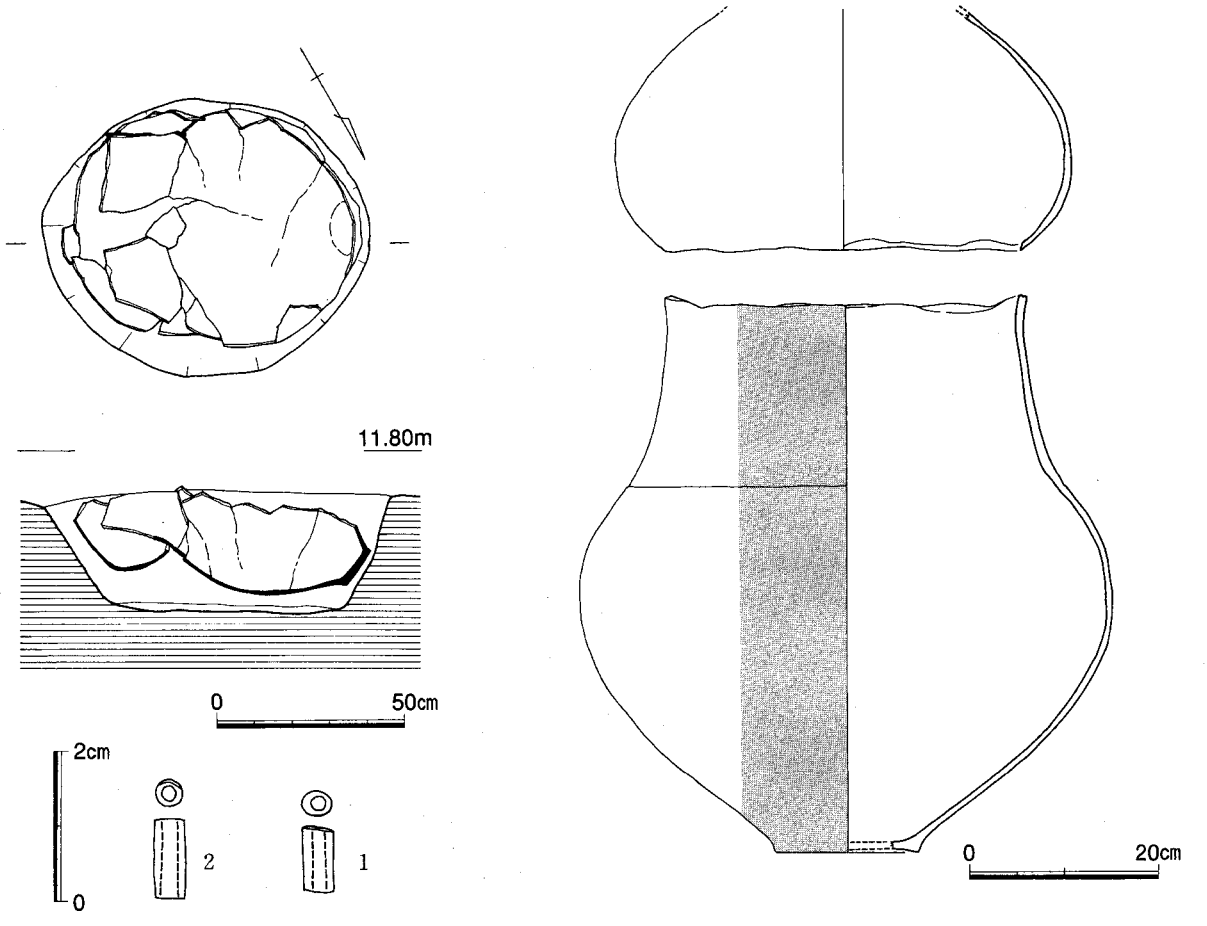


Fig. 13　1号甕棺墓、甕棺及び出土管玉実測図（1/20・1/8・1/1）

る。質はあまり良くなく淡灰色で僅かに緑色を帯びる。2は径0.4cm、長さ1.05cm、灰緑色で縁を少し欠損する。

2号甕棺墓（Fig. 14, PL. 7, 22）

1号甕棺に接してその北西に位置する。壺と壺の組合せであるが上甕の大部分は削平を受けて胴部の一部しか遺存しない。上甕も2/3ほどが残るが全体の状況は把握できる。1号甕棺と同様に上甕は口縁から頸部にかけて打ち欠き、それを下甕の肩部近くまで深く覆い被せている。下甕も口縁部のみを打ち欠いている。主軸はE-21°-S、埋置角度は38°である。掘り方は甕棺ぎりぎりで楕円形を呈する。その規模は88×80cmである。

上甕　肩部から口縁部にかけて打ち欠き底部は欠損する。上端径44.6cm、残存器高29.5cm、胴部最大径48cmを計る。焼成は良好で白灰褐色をなす。内外面とも摩耗が著しく調整は明らかではないが、外面は研磨、内面はナデを施すものであろう。

下甕　口縁部を打ち欠き上甕に肩部まで覆われている。安定感のある壺で最大径を胴部上半にとり59.5cmを計る。上端径31.6cm、器高56.8cm、底部径15.5cmである。上げ底気味の底部で、頸部と肩部の境に沈線を巡らし、口縁部に向かって直線的に内傾する。外面の頸部から胴部にかけて摩耗が著しいが横方向の研磨、胴部から底部にかけては横、斜め方向の研磨を施す。内面は口縁部近くが縦のナデを行う。胴部には焼成後の穿孔は見られない。

3号甕棺墓（Fig. 14, PL. 7, 23）

1、2号甕棺の間の南西部に接して位置し、主軸をやや南北方向にとる甕棺である。壷と鉢の組合

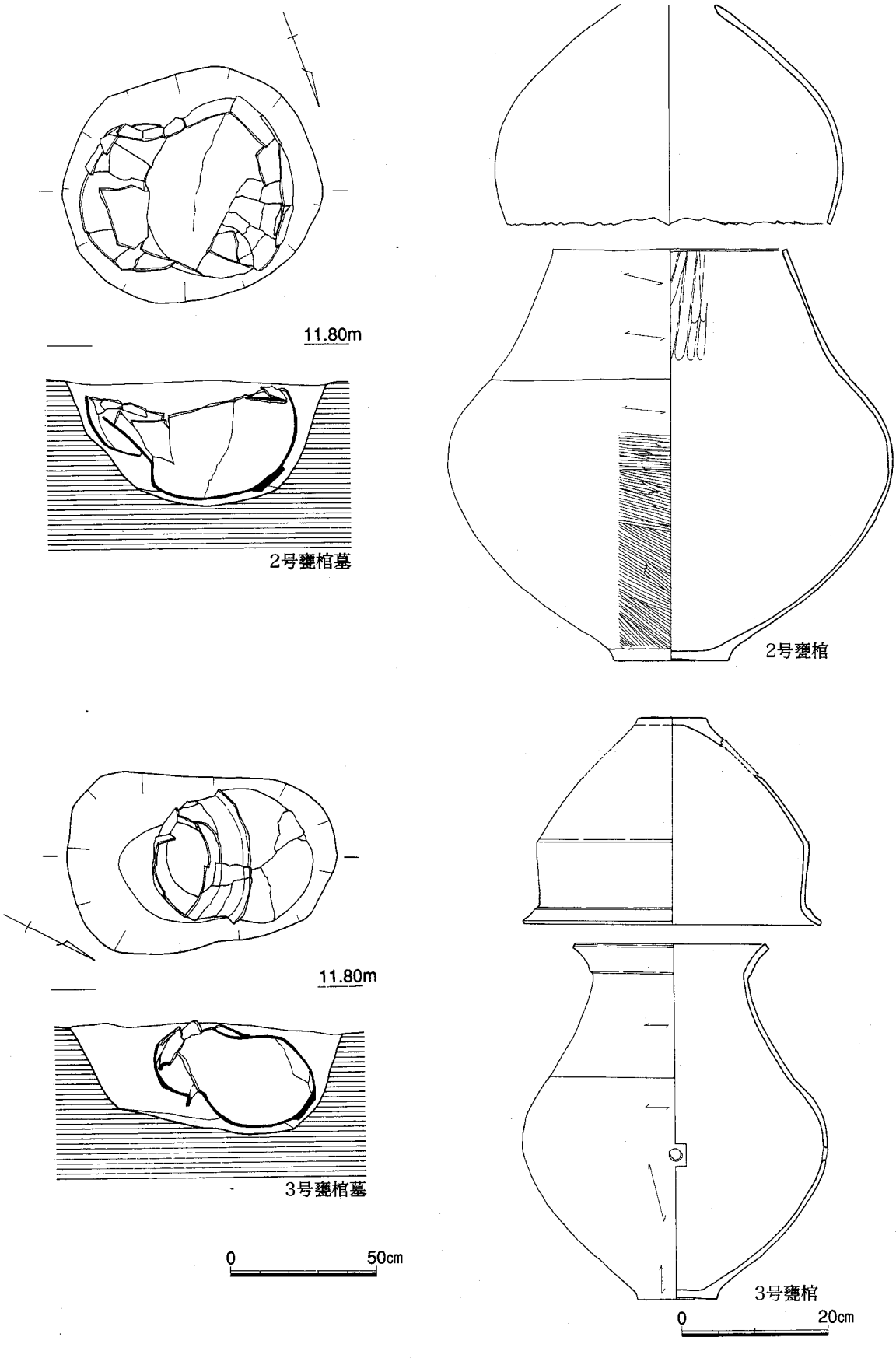


Fig. 14　2号、3号甕棺墓、甕棺実測図（1/20・1/8）

せで、下甕に壷を打ち欠くことも無く完形品をそのまま据え、上甕には鉢を用い壷の頸部まで覆っている。主軸はE-63°-S、埋置角度は32°である。掘り方は甕棺より少し大きく隅丸長方形に近く、長軸92cm、短軸60cmである。

上甕　胴部下半を欠失するがほぼ復元でき口径41.3cm、器高27.9cm、胴部最大径38.7cmを計る。平底で胴部に明瞭な段をもち、その段から直立して立上り肥厚する口縁部となる。口縁部と頸部との境

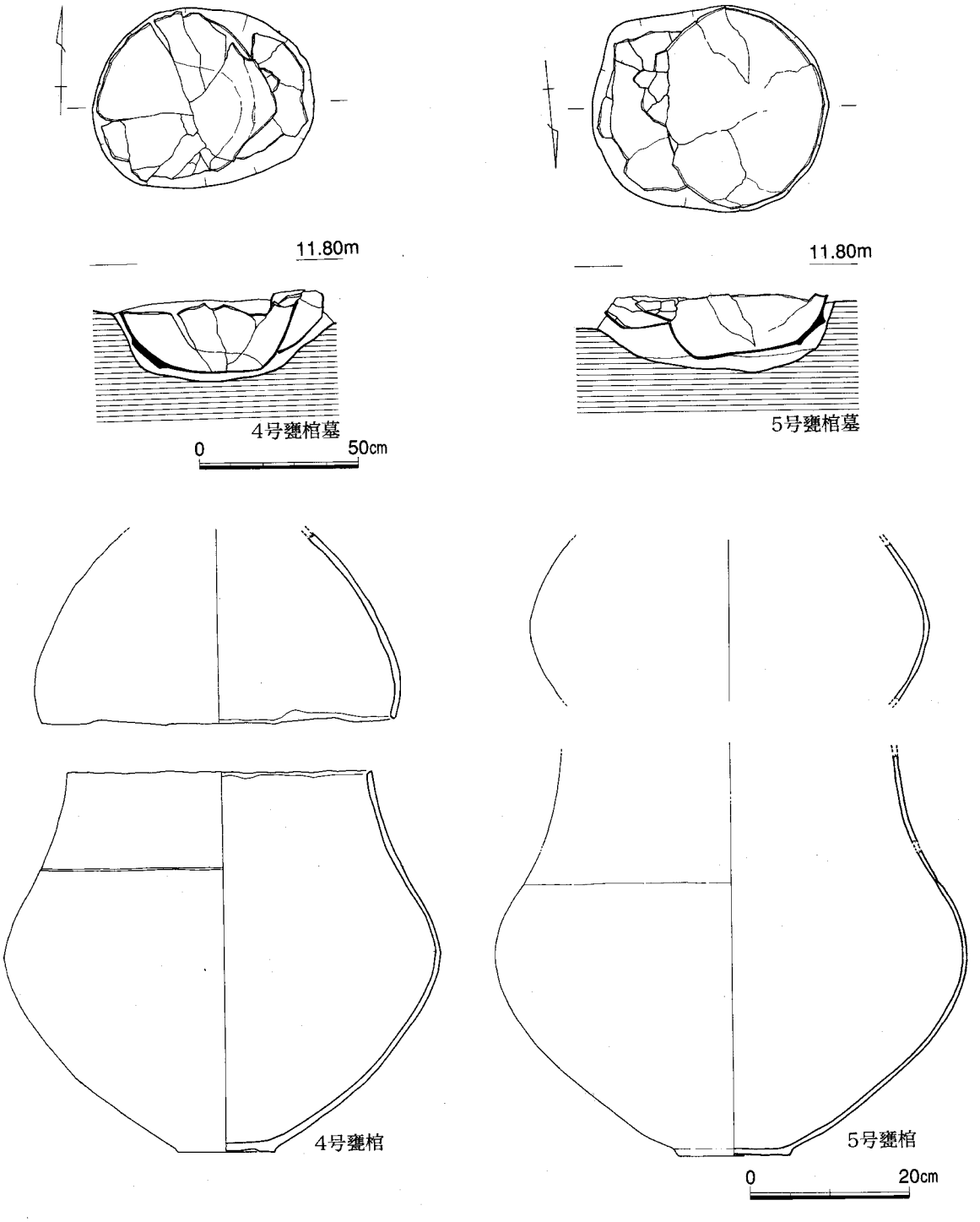


Fig. 15　4号、5号甕棺墓、甕棺実測図（1/20・1/8）

も明瞭な段をもつ。胎土には砂粒を多く含むが良好で焼成も良好で淡褐色ないし茶褐色をなす。内外面とも摩耗が著しく調整は明らかではない。

下甕　平底で最大径を胴部上半にとり、頸部と肩部の境に沈線状の段をもち内傾する頸部から外反し肥厚する口縁部となる。口径27cm、器高48.2cm、胴部最大径42.1cm、底径10.9cmを計る。胎土には

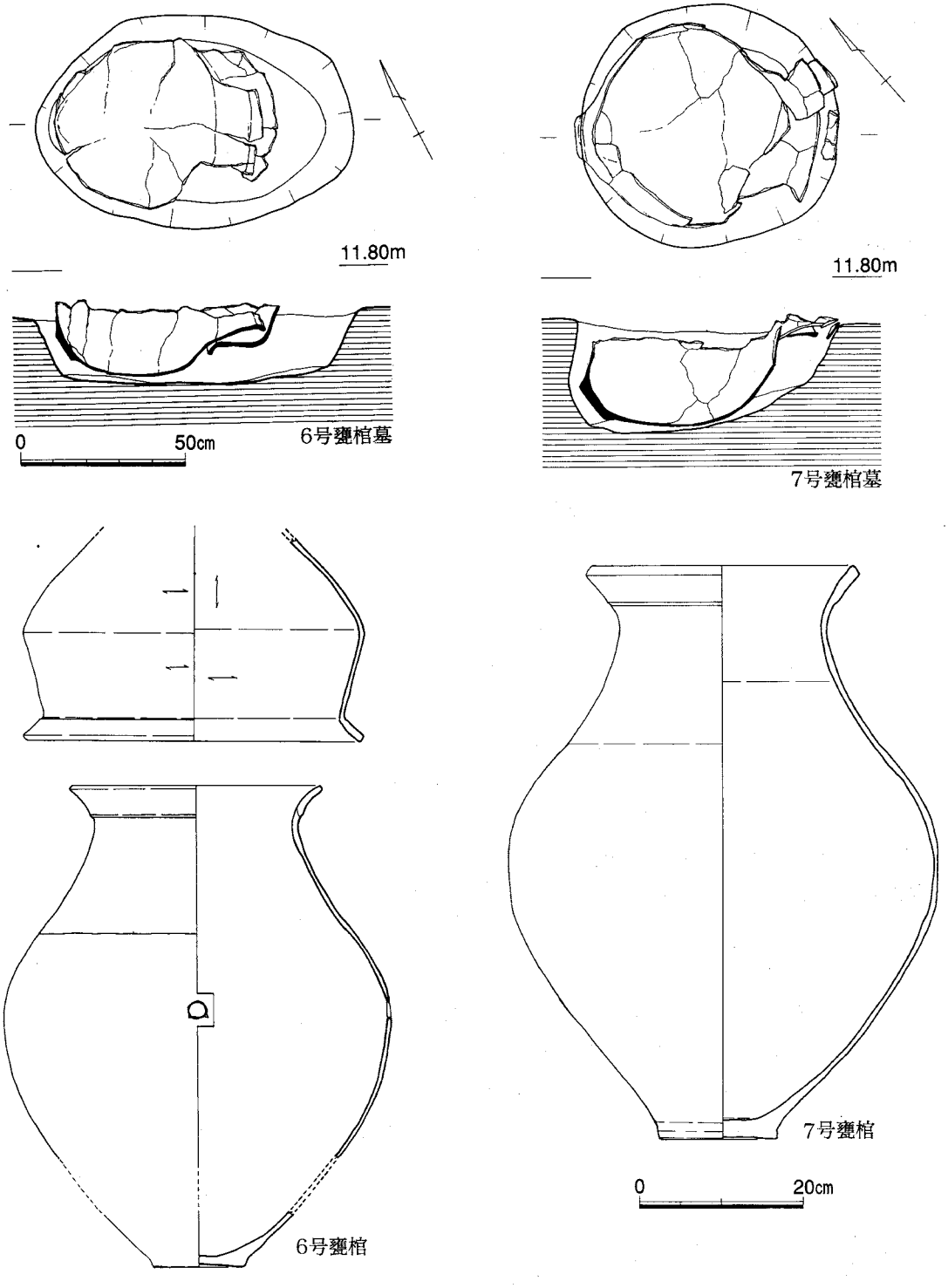


Fig. 16　6号、7号甕棺墓、甕棺実測図（1/20・1/8）

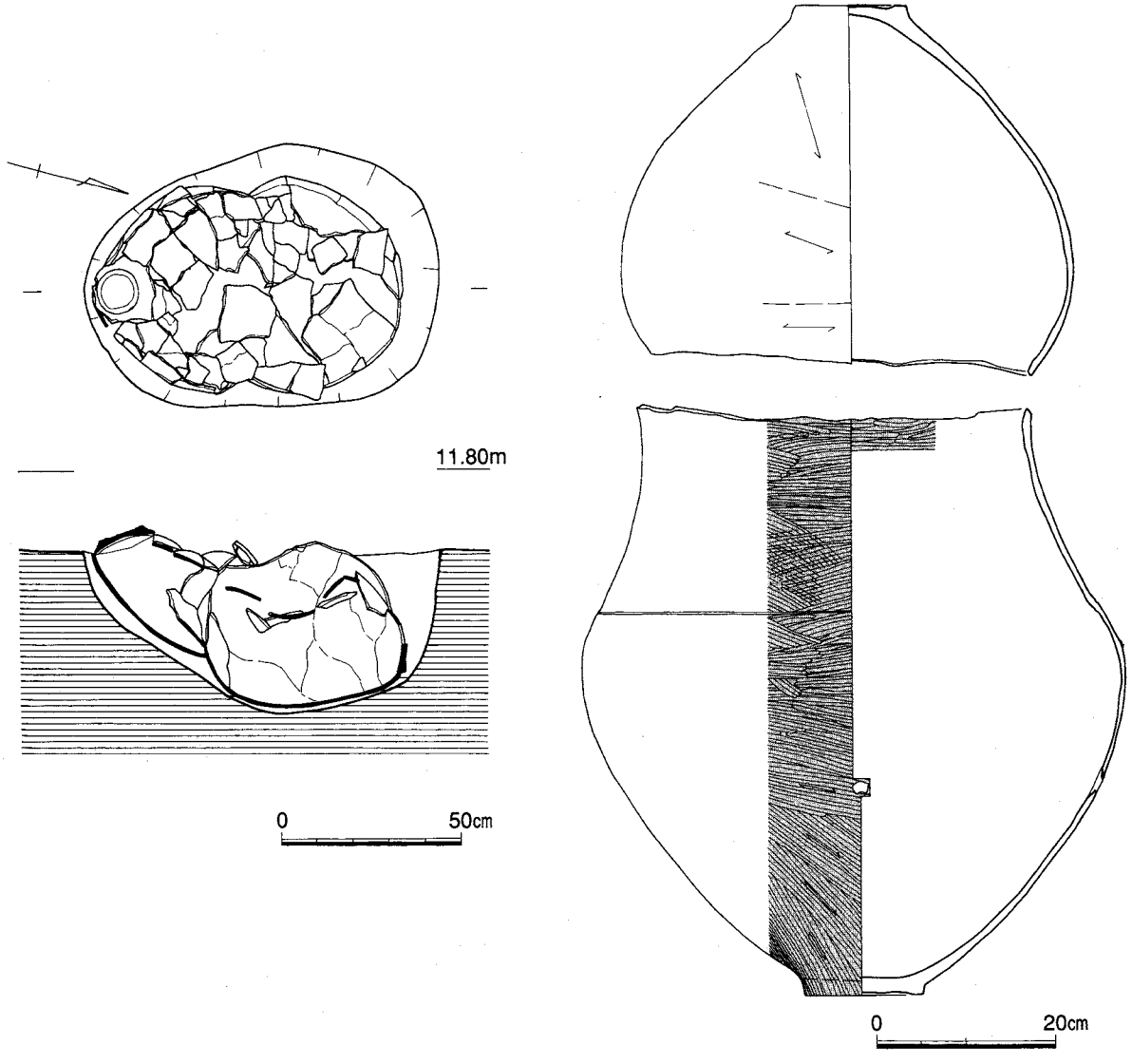


Fig. 17　8号甕棺墓、甕棺実測図（1/20・1/8）

砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。全体に磨滅が激しく調整は不明瞭であるが外面は研磨、内面はナデであろう。口縁部下から胴部下半にかけて広範囲に黒班が認められる。

4号甕棺墓（Fig. 15, PL. 8, 24）

3号甕棺の直ぐ南に位置し1号から4号甕棺で一群を構成している。主軸はやや東西近くをとり他の甕棺と異なる。壷と壷の組合せであるが上甕の大部分は削平を受けて胴部の一部しか遺存しない。上甕も半分以下しか残っていなく全体の状況は把握できない。1号甕棺と同様に上甕は口縁から頸部にかけて打ち欠き、それを下甕の肩部近くまで深く覆い被せているものであろう。下甕も口縁部のみを打ち欠いているもので現状のものが本来の姿であろう。主軸はN-81°-E、埋置角度は32°である。掘り方は甕棺ぎりぎりで楕円形を呈する。規模は70×57cmである。

上甕　肩部から口縁部にかけて打ち欠き上面を平らにしている。底部は欠損する。上端径44.4cm、残存器高23.8cm、胴部最大径45.8cmを計る。内外面とも摩耗が著しく調整は明らかではなく、焼成は良好で灰褐色をなす。

下甕　上げ底の底部で最大径を胴部中位にとり、下膨れの胴部、頸部と肩部の境に沈線を巡らし内傾する頸部となり、その上を打ち欠いて上端を平坦にする。上端径38.2cm、器高47.1cm、胴部最大径

55cm、底径12.1cmを計る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。全体に磨滅が激しく調整は不明瞭であるが外面は研磨後丹塗、内面はナデであろう。

5号甕棺墓（Fig. 15, PL. 8, 23）

1号から4号甕棺墓は互いに相接していたが5号甕棺墓からは少し間隔を置いて埋葬されている。4号甕棺の南西約1mに位置する。主軸をほぼ東西にとる甕棺で、壷と壷の組合せで、下甕には壷を用い口縁部～頸部を打ち欠き、上甕の壷も同様に口縁部から胴部上半にかけて打ち欠き下甕の頸部まで覆っている。主軸はE-5°-S、埋置角度は35°前後であろう。掘り方は甕棺ぎりぎりで楕円形を示しその規模は65×73cmである。

上甕　甕棺の遺存状態が悪く胴部だけの遺存である。おそらく肩部から口縁部にかけて打ち欠き上面を平端にしているものであろう。底部は欠損する。胴部最大径59.6cmを計る。内外面とも摩耗が著しく調整は明らかではなく、焼成は良好で淡橙色である。

下甕　上げ底の底部で最大径を胴部中位にとり、下膨れの胴部、頸部と肩部の境に沈線状の段を巡らし内傾する頸部となる。甕棺の遺存が悪く胴部と頸部は接合しないがおそらく口縁部から頸部にかけて打ち欠き上面を平らにしているものであろう。上端径38.2cm、器高47.1cm、胴部最大径59cm、底径12.1cmを計る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で淡黄褐色ないし暗褐色を呈し黒班が見られる。内外面ともに磨滅が激しく調整は不明瞭であるが外面は研磨、内面はナデであろう。

6号甕棺墓（Fig. 16, PL. 9）

5号甕棺墓の南約1.5mに位置する。主軸を南東にとる甕棺で、壷と鉢の組合せであるが上甕は底部を欠損する。下甕も上甕と同様に壷の口縁部を打ち欠くことも無く完形の壷をそのまま据え、上甕には鉢を用い壷の肩部まで深く覆っている。3号甕棺墓と同様に壷と鉢の組合せの時だけ完全な形態の土器を使用したものであろうか。主軸はE-29°-S、埋置角度は19°である。掘り方は甕棺よりも一回り大きく、平面形は楕円形で、その規模は95×66cmである。

上甕　底部を削平により欠失する。口径41.7cm、残存器高24.5cm、胴部最大径41.7cmを計る。平底と思われ、胴部で大きく屈曲し外側に稜をもち、その稜から内傾し肥厚する口縁部となる。口縁部の直下にも明瞭な段をもつ。胎土には砂粒を多く含み、焼成も良好で外面は淡褐色ないし白灰色をなす。内外面とも摩耗が著しく調整は明瞭ではないが内外面とも研磨が認められる。

下甕　平底で最大径を胴部中位にとる端正な壷である。頸部と肩部の境に沈線状の段をもち内傾する頸部から外反し肥厚する口縁部となる。肥厚する口縁部と頸部の段は鋭利さにかける。胴部には焼成後に径2cm前後の穿孔が認められる。底部と胴部が接合しないが図のような形態を示すものであろう。口径30.8cm、推定器高58cm、胴部最大径47cm、底径11cmを計る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で淡橙色を呈する。内外面とも器表面の剝離が著しく調整は不明である。

7号甕棺墓（Fig. 16, PL. 9, 24）

6号甕棺墓の西約1.5mに位置する。主軸を6号甕棺墓と同様に南東にとる甕棺である。上部の削平が著しく、上甕の大部分と下甕の約半分が遺存していない。下甕は壷を用いているが上甕は胴部だけの遺存で壷であるか鉢であるかの判別が出来ない。3号、6号甕棺では下甕の壷は口縁部まで残り打ち欠いていないのでこの甕棺も口縁部まで遺存しているので鉢との組合せである可能性もある。ただ遺存している上甕は胴部だけであるから壷と壷の組合せが可能性としては高い。主軸はE-42°-S、埋置角度は35°である。掘り方は甕棺よりも一回り大きく、平面は楕円形で、その規模は78×75cmである。

上甕　胴部のみの遺存で実測は不可能であった。

下甕　平底で最大径を胴部中位にとる大型の壷である。最大径を胴部中位にとり、頸部と肩部の境に沈線状で痕跡的な段をもち内傾する頸部から外反し肥厚する口縁部となる。肥厚する口縁部と頸部の段は鋭利さにかける。口径32.7㎝、器高70.2㎝、胴部最大径51.4㎝、底径14.1㎝を計る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色を呈する。内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。

8号甕棺墓（Fig. 17, PL. 10, 24）

2号甕棺墓の北約1.5ｍに位置する。主軸を南北方向にとる甕棺で、壷と壷の組合せである。調査区の北端に甕棺の一部が検出されたのでその北側に拡張して調査を実施した。上、下甕もほぼ全部が遺存していたが、内側へ押しつぶされた状況で出土している。上甕は口縁部から胴部上半にかけて打ち欠き下甕の肩部まで深く覆っている。下甕も上甕と同様に壷の口縁部を打ち欠き、胴部に焼成後に穿孔している。

上甕　肩部から口縁部にかけて打ち欠き上面をほぼ平坦にする。底部は上げ底で最大径を胴部中位にとる。上端径41.7㎝、器高41㎝、胴部最大径50.5㎝を計る。胎土には砂粒を多く含み、焼成も良好で外面は淡褐色ないし淡灰色をなし黒班が認められる。胴部上半は横、それ以下は斜めのヘラ研磨を行う。

下甕　上げ底の底部で最大径を胴部中位にとる大型の壷である。下膨れの胴部、頸部と肩部の境に沈線を巡らし内傾する頸部となり、その上を打ち欠いて上端をほぼ平坦にする。上端径43㎝、器高66.6㎝、胴部最大径55㎝、底径59㎝を計る。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色～暗茶褐色を呈する。胴部には黒班がみられ、焼成後の径２㎝前後の穿孔がある。全体に磨滅が激しく調整は不明瞭であるが外面は研磨後底部を除き丹塗、内面は口縁部のヘラ研磨部に丹塗を施し、それ以下はナデである。

4．土壙の調査

今回の調査で検出した土壙は30基と少ない。Ⅰ区の西からⅡ区にかけて多く見られ、Ⅲ区でも１基検出された。弥生時代の中期を中心とする土壙であるが、遺構の遺存状態が悪いことなどもあり、20号土壙の祭祀遺構以外はその性格は明らかではない。おそらく集落に伴う廃棄用の土壙かそれに類するものであろう。土壙の平面形は楕円形や溝状に細長いものなど一定しなく、深さも全体に浅く当時の地表面が著しく削平されているものであろう。

２号土壙（Fig. 18, PL. 10）

Ⅰ区の西北部の北端に位置する不整形の土壙である。主軸は南北より少し西に振れ、南北2.63m、東西1.8mの大型で断面皿状を示す浅い掘り込みである。南、北側は二段に掘り込まれ床面はなだらかである。出土遺物は甕、壷、器台、高坏などで器台を除き破損し、床面よりも少し浮いた状態で出土している。また中心部に集中し壁面近くの出土は少ない。

出土土器（Fig. 19, 20, PL. 25）

出土した遺物は土器だけで、壷、甕、鉢形土器などの弥生式土器である。１から10は甕形土器で、10を除き中期中頃の土器である。10は上げ底の底部で中期初頭の甕で時期が異なる。内面はナデ、外面は縦方向の刷毛目調整である。１は口縁部上面を平坦にし内側への張出しが比較的大きく、その下に三角突帯を貼付ける。口径42cmを計る大型品であるが胴部下半を欠失する。２から７は口縁部上端を平坦にし、内側への張出しがない形態の甕形土器で口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部端を尖らすものや丸味をもたせたり、また上面を窪ませ、あるいは口縁の内側を内傾させたりと変化に富む。８は胴部で上下が接合しないが図のように復元される。口径29.6cm、推定器高32cmを計る。平坦な口縁部は上面に丸味をもたせ端部を内側へつまみ出す。胴部は丸くふくらみ、上げ底の底部と

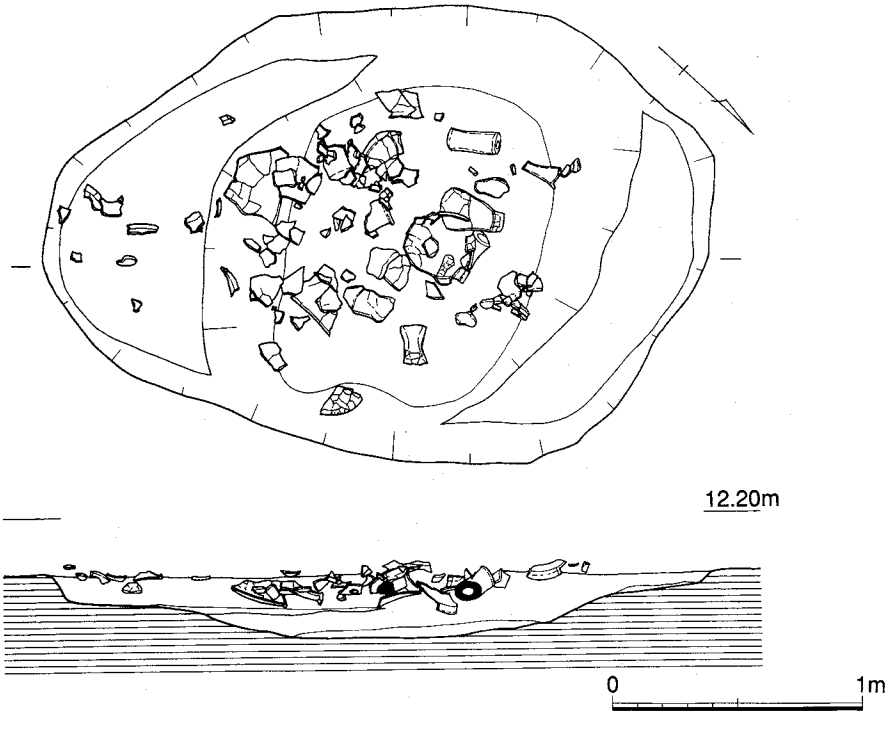


Fig. 18　２号土壙実測図（1/30）

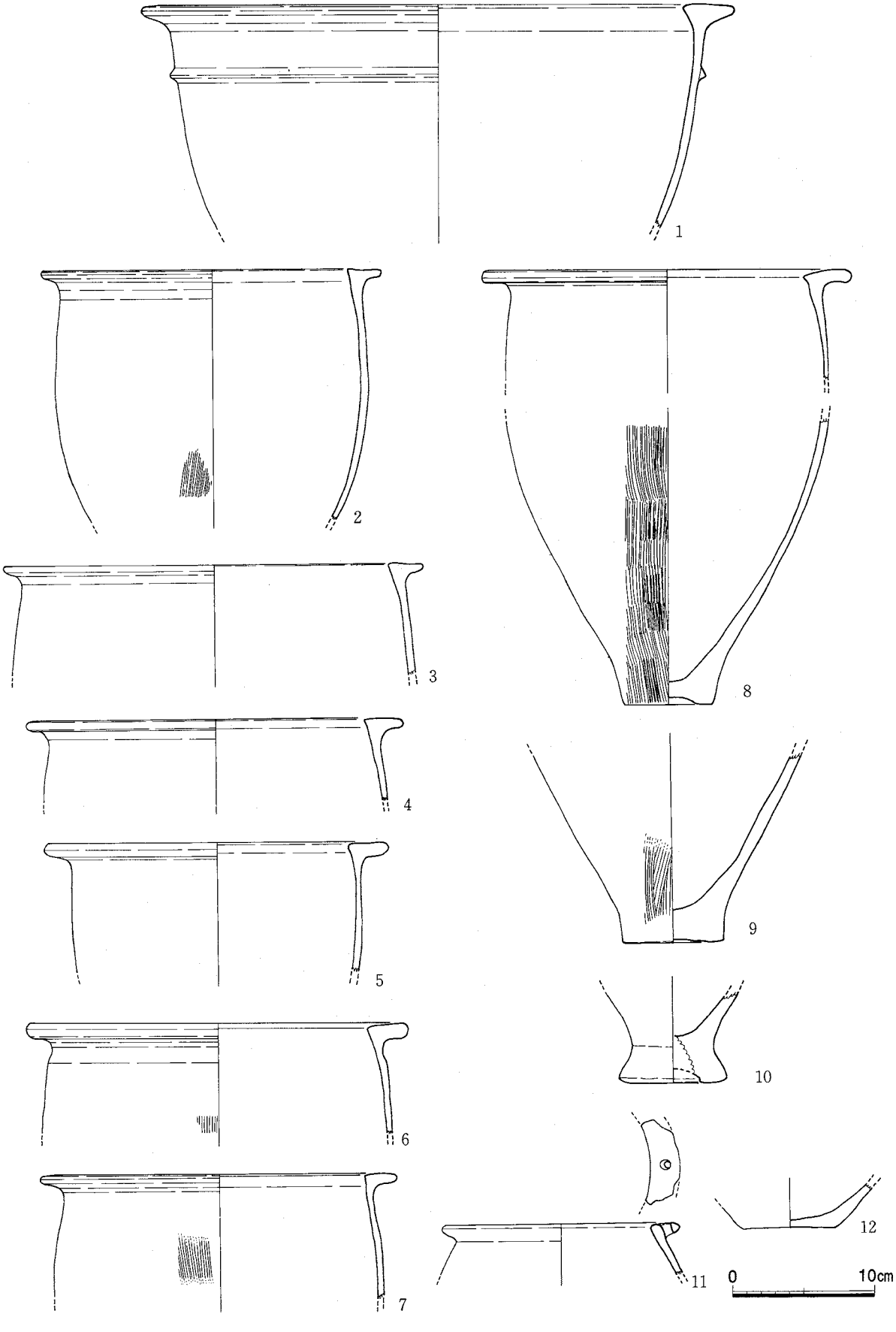


Fig. 19　2号土壙出土土器実測図(1) (1/4)

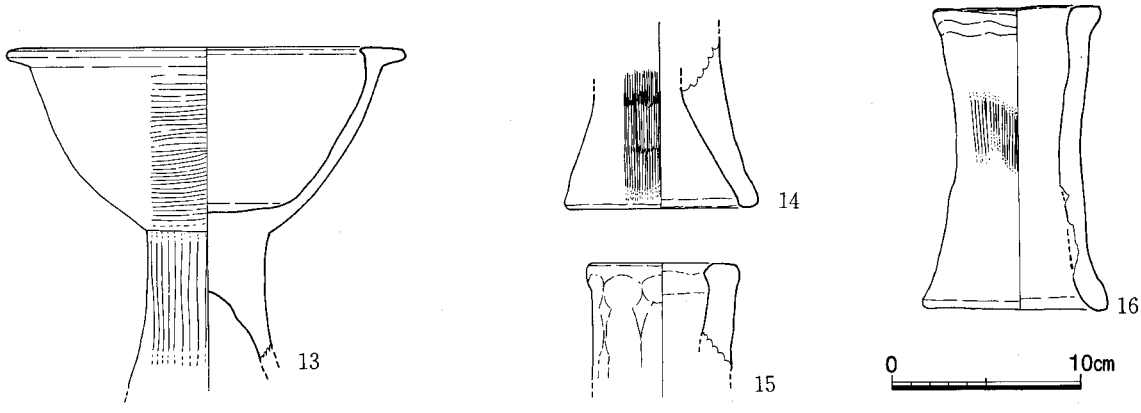


Fig. 20　2号土壙出土土器実測図(2) (1/4)

なる。胎土には砂粒を少量含み、焼成良好で淡茶褐色を呈する。11、12は小型の壺形土器の口縁部と底部破片である。11の口縁部には焼成前の穿孔が観察される。13は高坏形土器で口縁部から脚部にかけての破片である。口縁部は平坦であるが幅は狭く坏部は丸く深い。外面は坏部が横方向、脚部が縦のヘラ研磨を施す。14から16は器台である。上、下の発達が少ない筒形で外面に刷毛目が見られる。15の外面には指の整形痕が認められる。16は完形品で上端径9㎝、下端径9.9㎝、器高16.1㎝を計る。外面は刷毛目調整、内面は指ナデである。

3号土壙 (Fig. 21, PL. 11)

Ⅰ区の西北部、2号土壙の南西4mに位置する。当初溝状の土壙と楕円形の2基の土壙の切り合いと考えたが切り合いが不明であり一つの土壙としたが、幾つかの土壙の切り合いの可能性もある。東西に細長い掘り方で床面はほぼ平らで西から東へ傾斜を示す。西側は溝状で幅35㎝前後、深さ15㎝弱である。中央部は幅が拡がり膨らみをもち二段に掘り込まれ、別の土壙との切り合いの可能性が強い。東端も南側に出っ張りをもつ。遺物はこの部分からの出土である。

出土土器 (Fig. 22-1～3)

1、2は甕形土器の口縁部と底部の破片である。1は口縁部上面が平坦で外端が少し垂下する。胴部の膨らみはほとんどない。胴部外面は刷毛目調整で口縁部はヨコナデ調整を行う。3は壷の底部で外面にヘラナデがみられる。

4号土壙 (Fig. 21, PL. 12)

Ⅰ区の西側の中央部に位置し東側で5号土壙と切り合う大型の小判形の土壙である。深さは15㎝前後、壁面はなだらかである。遺物は少なく破片が少量出土しているだけである。

出土土器 (Fig. 22-4～9)

4，5は縄文時代晩期の深鉢形土器の口縁部破片で、外面に荒い条痕が見られ、内面はナデ調整を行う。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で灰褐色ないし茶褐色を示す。7は弥生時代前期後半の甕形土器の口縁部で端部に刻み目を施す。8も中期初頭の甕形土器の口縁部で刻み目の三角突帯である。

5号土壙 (Fig. 21, PL. 12)

南西部を4号土壙に切られるがほぼ全体の様相は窺える。狭長な溝状遺構で弧状を描き、幅35㎝、長さ1.6m、深さ17㎝を計る。床面は中央部が少し窪み深くなり、壁面はなだらかな傾斜を示す。遺物はほとんどなく図示した弥生時代初頭の土器の他には破片が少量出土しているに過ぎないが時期としては弥生時代の中ごろであろう。

出土土器（Fig. 22-10, 11）

甕の底部と口縁部である。いずれも小破片で調整は明らかではない。焼成は良く胎土には砂粒を多く含み、黄褐色ないし暗褐色を呈する。

6号土壙（Fig. 23, PL. 13）

4号土壙の南東約7mに位置する細長い土壙である。南北に長く7号、8号土壙とほぼ並行にならぶ。幅約0.65m、長さ約2.27mを計り、北側は浅く10cm強の深さであるが、南端を土壙の幅一杯に二段に掘り窪め、一段目が35cm、二段目が62cmの深さとなる。床面は中央部が深く丸味ををもち壁面はなだらかな傾斜を示す。出土遺物は少なく縄文晩期の土器を図示したが覆土は他の土壙と同一で弥生時代と思われる。

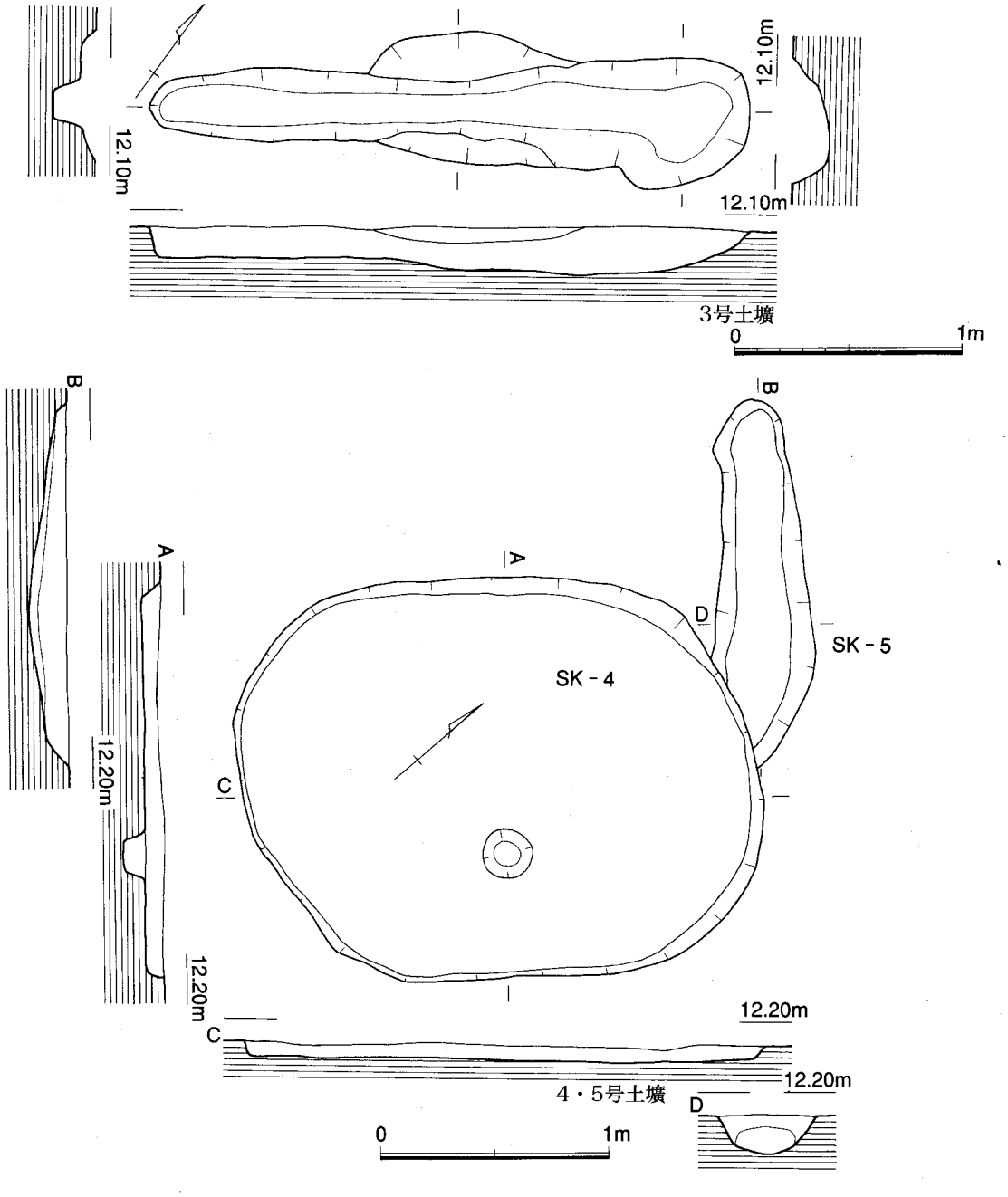


Fig. 21　3～5号土壙実測図（1/30）

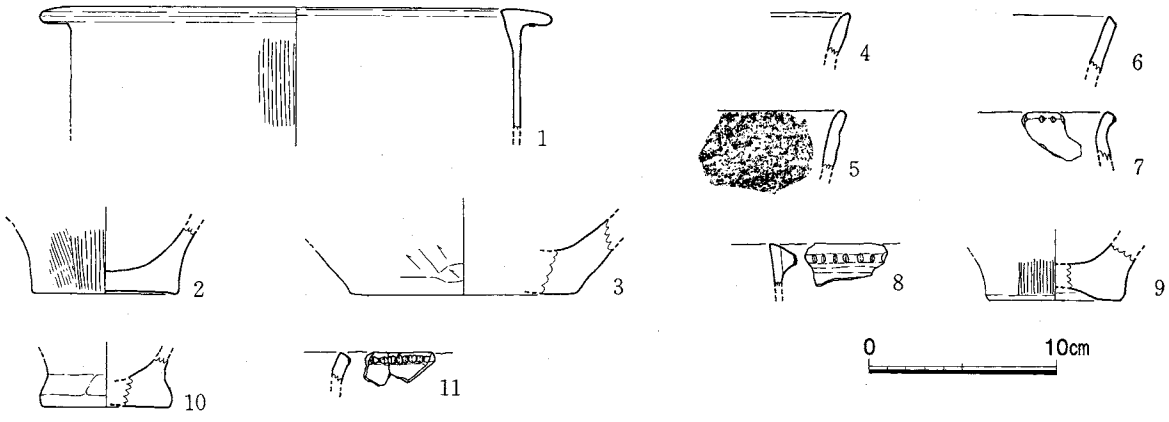


Fig. 22　3～5号土壙出土土器実測図（1/4）

出土土器（Fig. 24-1, 2）

縄文時代晩期の鉢形土器の口縁部破片である。1は外反する口縁部で粘土の接合跡が残る。2は口縁部直下で屈曲しその上は直立し内外面に稜をもつ。

7号土壙（Fig. 23, PL. 13）

6号土壙と8号土壙の間に位置する。それらの土壙と平行する土壙で細長い溝状で、南端に不整形の土壙がくっつくものである。当初2基の土壙と考え切り合いを考えたが覆土が暗褐色で区別出来なかったので同一の土壙として取扱う。土壙の北側は最大幅40cm、深さ30cm弱で断面U字状を呈する。南端は不整形で北側よりも一段浅く、床面はほぼ平坦で西側に小ピットがある。遺物は土壙の上層からの出土である。

出土土器（Fig. 24-3～8）

3は南端からの出土である。甕形土器の口縁部で中期中頃の土器で口縁部上面を平坦にし内側への張出しは少なく胴部は膨らみがなくほぼ垂直である。胎土には砂粒が多く焼成良好で白橙色を呈する。胴部外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデである。4も3と同じである。5から7は口縁部直下に小さく低い三角突帯をもつ甕形土器である。平坦な口縁部は上面が窪み内側への発達が少ない。胎土、焼成は3とほぼ同じで色調は白橙色ないし灰橙色を呈する。8は器台で上半部の破片である。外面は刷毛目、内面はヨコナデを行うが指跡が残り、凹凸が激しい。胎土には砂粒を少し含み焼成も良く白橙色を示す。

8号土壙（Fig. 23, PL. 12, 13）

7号土壙の直ぐ東に位置する小判状に近い形態で不整形の土壙である。東西62cm、南北119cm、深さ15cmを計る小規模のものである。南西隅はさらに70×40cmほどに一段掘り窪めている。断面は皿状の浅い掘り込みで、出土土器はほとんどが破片で床面より少し浮いた状態で出土している。

出土土器（Fig. 24-9～12）

9、10は甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は平坦で胴部の張りも少ない。外面は刷毛目調整、内面はナデ調整である。11は底部から胴部にかけての破片で若干上げ底である。12は蓋である。焼成は良く濃茶褐色を呈し外面に刷毛目が残る。

9号土壙（Fig. 25, PL. 13, 14）

3基並んだ6号から8号土壙の東3mに位置する楕円形の土壙である。主軸を南北よりやや西に振り、東西1.12m、南北1.35m、深さ0.4mを計り南東部に張出し二段になる。また中央部には径35cm

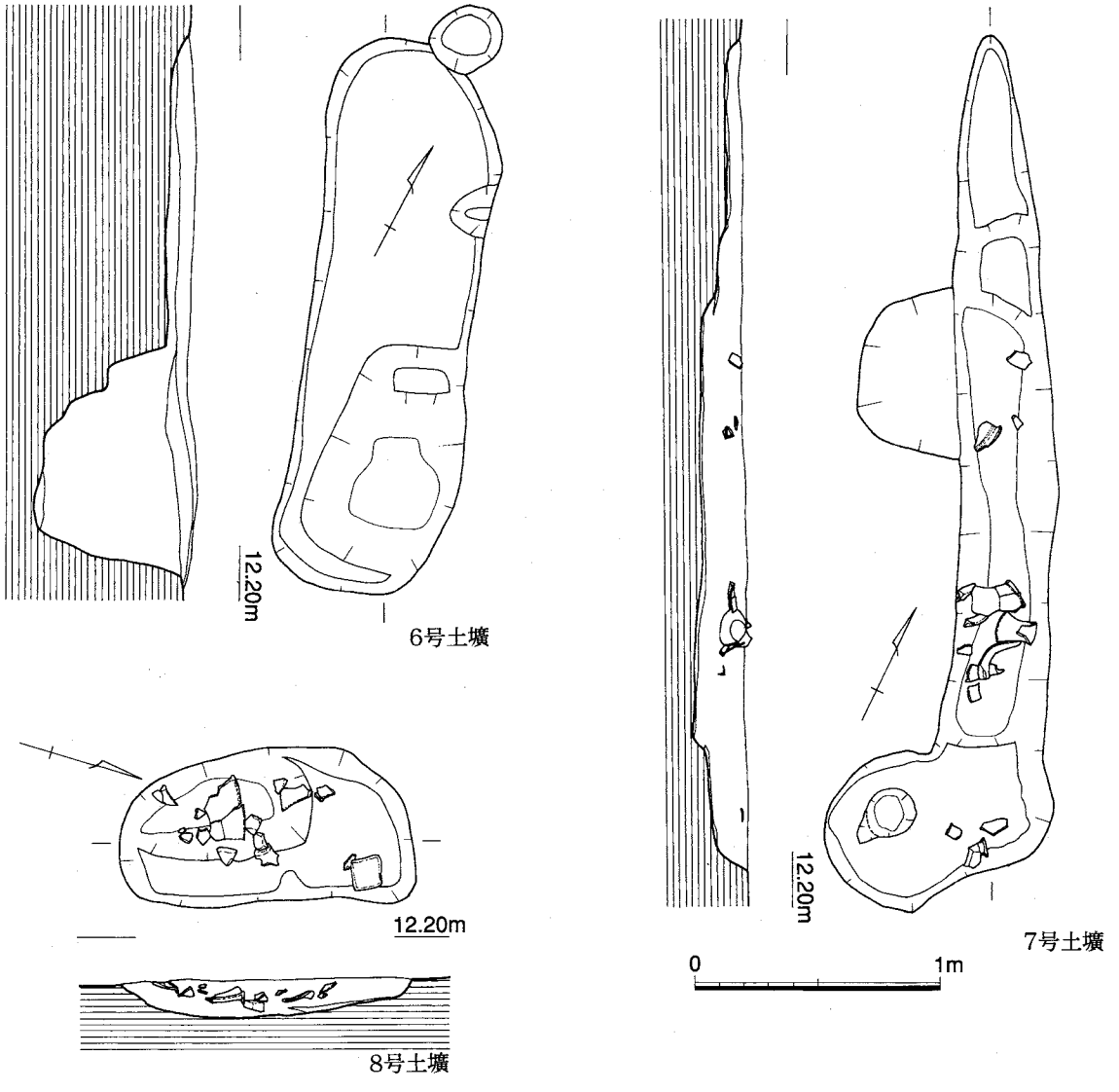


Fig. 23　6～8号土壙実測図（1/30）

くらいのピットを掘り込んでいる。壁面はなだらか、床面は丸みをもつ。出土土器は弥生時代中期中葉のもので、甕、壷、高坏、器台の破片のみで中央部に集中し床面より浮いた状態で多く見られる。

出土土器（Fig. 24-13～17）

13、14は甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片で胴部は少し膨らみを持ち、口縁部にかけて内傾する。口縁部はヨコナデ、外面は刷毛目調整で、胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で淡茶褐色を呈する。16は高坏形土器の坏部で脚は欠失する。深い坏部で口径20.4cmを計る。内外面とも摩耗が激しく調整は不明。17は器台で2/3ほどの遺存で復元完形品である。上縁径8.2cm、下縁径9.3cm、器高14.9cmを計る。外面は縦の刷毛目、上縁部は刷毛目状のナデを行う。

11号土壙（Fig. 25, PL. 14, 15）

Ⅰ区の南西端に位置する楕円形の土壙で試掘トレンチにその一部が検出された。主軸は南北より少し東に片寄り、その規模は南北1.67m、東西1.3m、深さ0.4mを測る。壁面はなだらかであるが北側がやや傾斜がきつい。床面はほぼ平らで北側で床面より少し上で甕、西側の壁際で二個の完形が、また甕の下で押し潰された状態で2個の完形の器台が出土している。また2の甕と接合する破片が7号

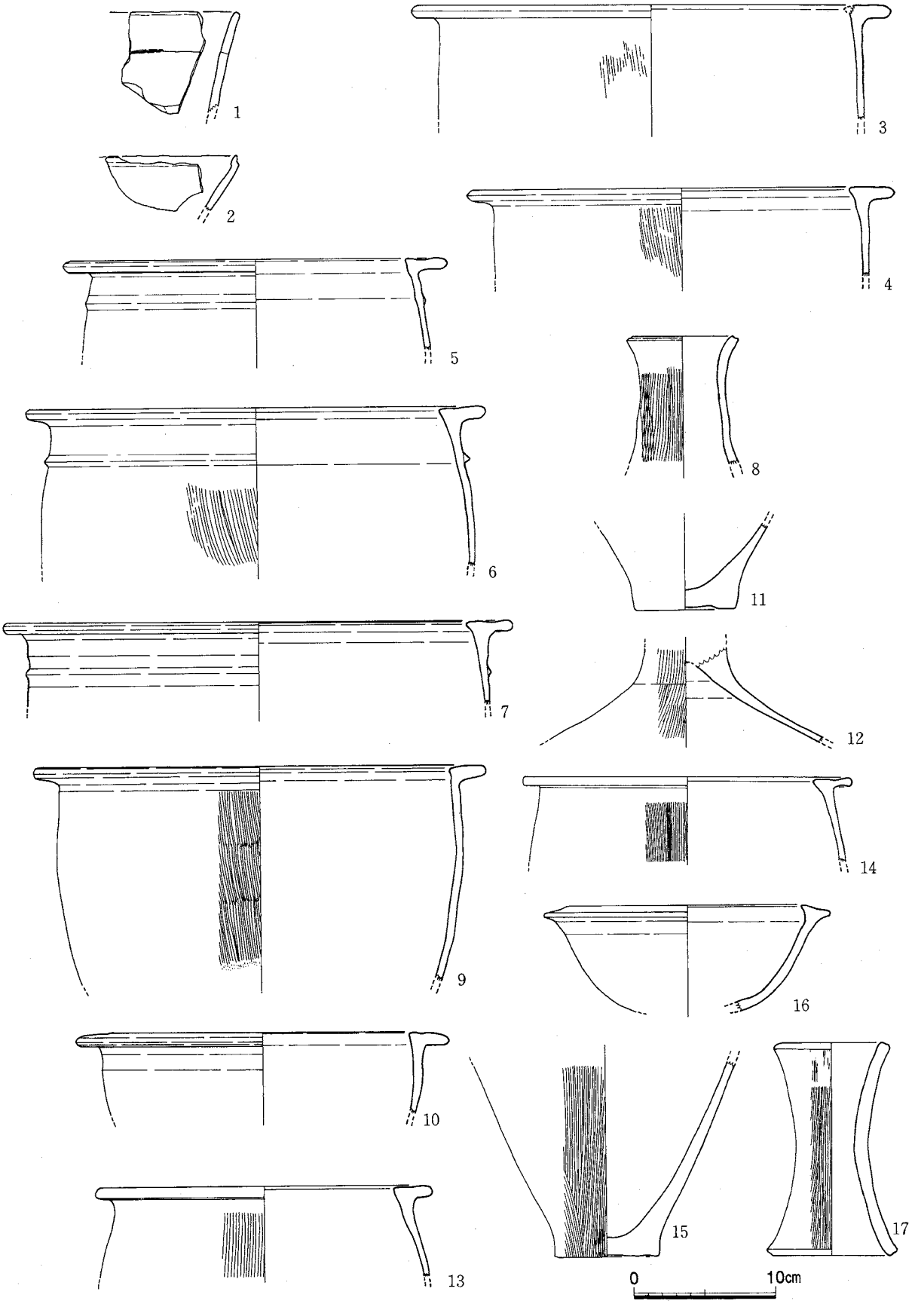


Fig. 24　6～9号土壙出土土器実測図（1/4）

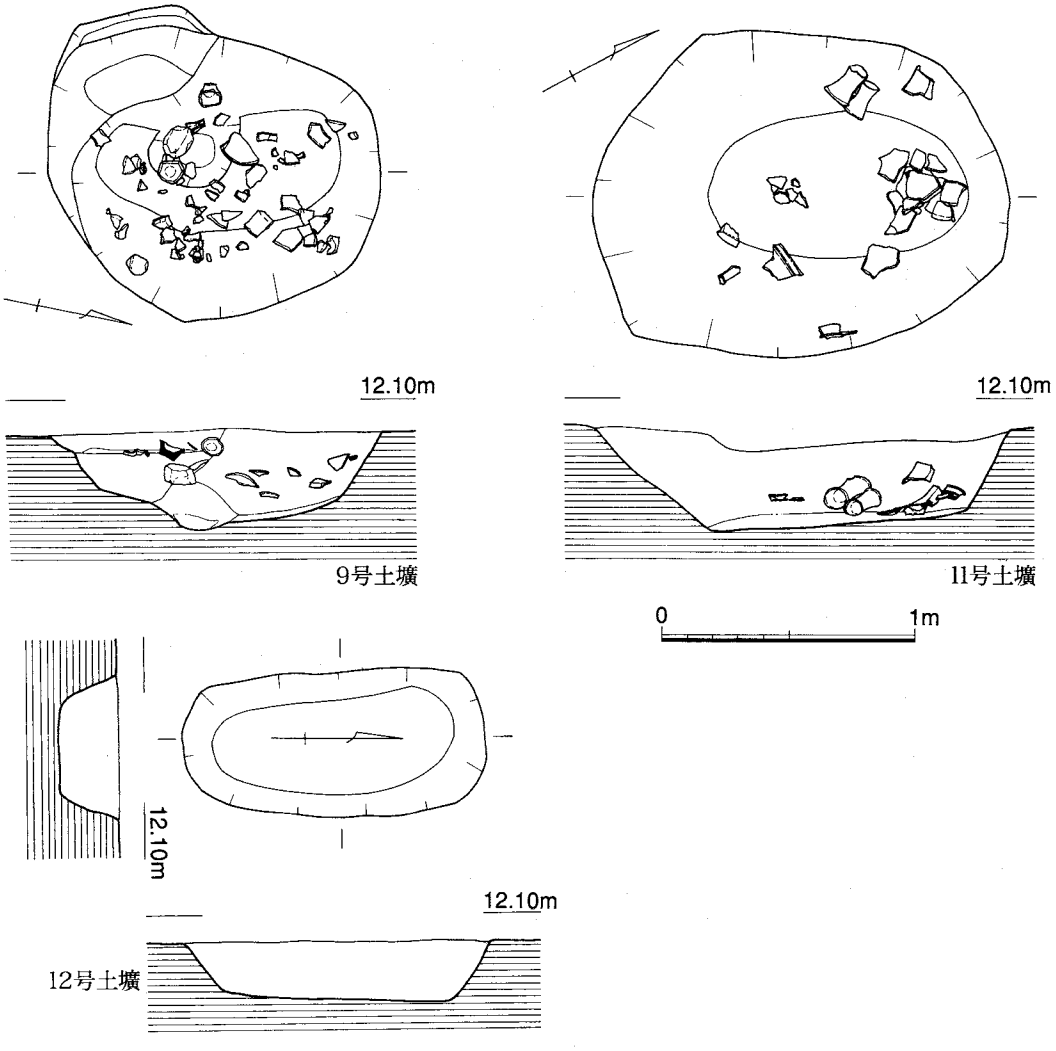


Fig. 25　9、11、12号土壙実測図（1/30）

土壙から出土している。

出土土器（Fig. 26, PL. 25）

1は甕形土器の口縁部で薄手の造りである。口縁部が内側へ少し張出し外端が垂下する。2は鉢で口縁部から胴部の一部を欠失するがほぼ完形品で口径28.6㎝、器高23.9㎝を計る。底部は平底で胴部に向かって開き、口縁下に三角突帯を巡らす。平坦な口縁部は内傾させ内側への張出しを持つ。胎土には砂粒を多く含み焼成も良く明黄褐色を呈する。器表面が磨滅しているため外面の調整は不明、口縁部の内面はナデ調整を行う。口縁部上面及びその対称の位置の胴部から底部に黒班が認められる。3から6は器台である。3、4は西壁近くから並んで出土したもので口縁部の一部を欠失するがほぼ完形品である。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は内面にはしぼり跡や指の押圧痕が残るのもある。

12号土壙（Fig. 25）

Ⅰ区の南西部、11号土壙の北4.5mに位置する。主軸をほぼ南北にとり、東西0.58m、南北1.20m、深さ0.25mを測る小規模な長楕円形の土壙である。壁面はなだらかで床面はほぼ平坦、出土遺物は小破片だけで実測可能なものはほとんど無いが他の土壙と同時期の所産であろう。

13号土壙（Fig. 27）

Ⅰ区の南西部、11号土壙の北東3.0mに位置する小規模な長楕円形の土壙である。主軸を北東－南西にとり、その規模は長軸1.38m、短軸0.73m、深さ0.3mを測る。西北部は二段に掘り込まれ平坦

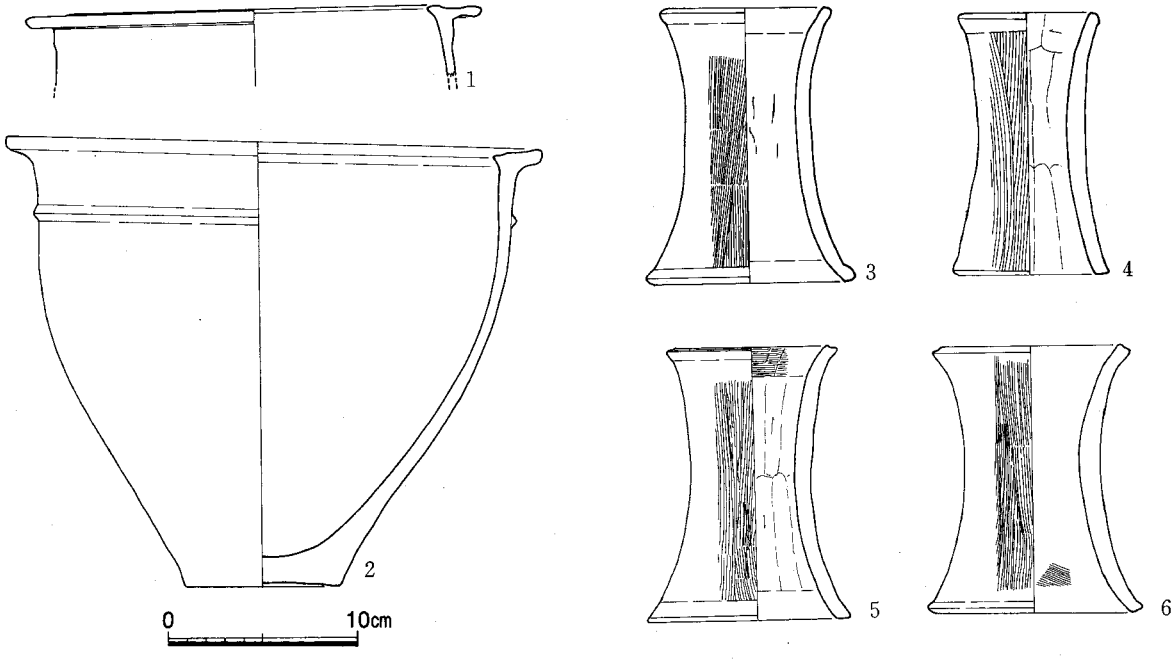


Fig. 26　11号土壙出土遺物実測図（1/4）

な段をなす。壁面はなだらかな傾斜を示し床面はほぼ平坦で南西部に深さ0.1mの浅いピットを穿つ。出土遺物は少なく図示した他には弥生式土器の破片が少量出土しているだけである。

出土土器（Fig. 28-1, 2）

器台の裾部の破片である。外面は刷毛目調整、内面はナデ調整を行う。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で黄褐色ないし淡橙色を呈する。

16号土壙（Fig. 27, PL. 15）

Ⅰ区の土壙群の東端に位置する不整楕円形の土壙である。他の土壙と比較して深く掘り込まれているので浅い素掘りの井戸とも考えられるが一応土壙として報告する。主軸をほぼ南北にとり南、北側に各々深さ0.5m、幅0.1mの平坦部を設け、全体の規模は東西1.22m、南北1.61m、深さ1.51mを測り床面は砂層まで達している。床面はほぼ平らで平面形は押し潰された菱形を示す。覆土は上層は暗褐色から茶褐色で下層にいくに従い青灰色から暗灰色、黒灰色粘質土となる。現状でも自然湧水が見られ1mほど水が溜り井戸の可能性が高い。

出土土器（Fig. 28-3）

甕形土器の底部から胴部にかけての破片である。厚手に造られた上げ底で胎土には砂粒を多く含み、焼成も良く外面は淡橙色、内面は黒褐色を呈し、炭化物が付着していたものと思われる。内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。

17号土壙（Fig. 27, PL. 16）

Ⅰ区の南東部、9号土壙と16号土壙の中間に位置する小判形の土壙である。主軸を東西にとり、その規模は東西1.2m、南北0.68m、深さ0.43mを測る小規模のものである。壁面は緩やかな傾斜を示し、床面も中央部が最も深く丸みを持つ。出土土器は床面密着のものは無く、浮いた状態での出土である。東側から出土している甕の破片はほぼ接合し底部を欠失するのみである。

出土土器（Fig. 28-4～6, PL. 25）

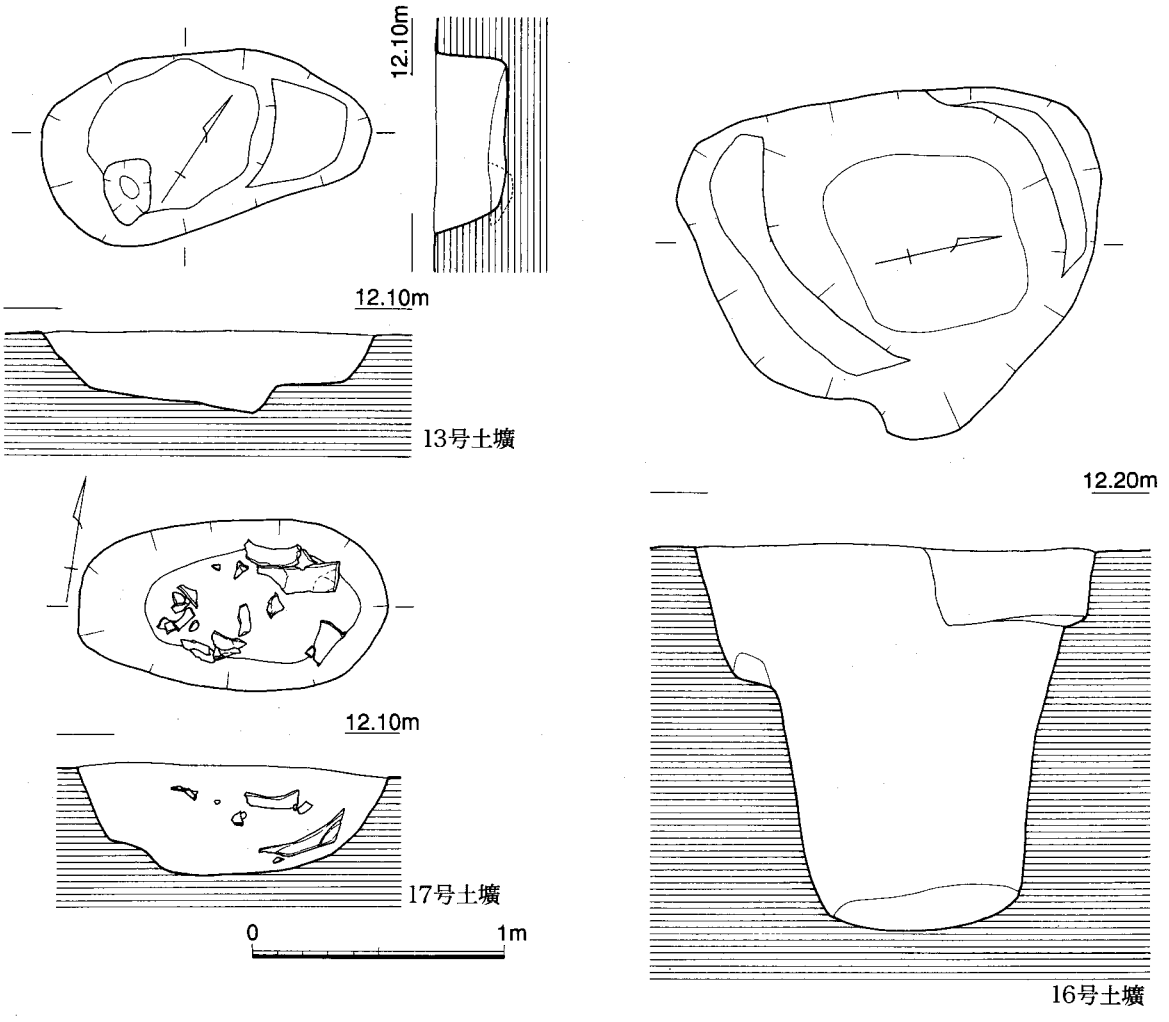


Fig. 27　13、16、17号土壙実測図（1/30）

4、5は口縁径55cm前後を測る中型の甕棺の口縁部～胴部にかけての破片である。汲田式甕棺で内側への張出しが大きい。4の口縁部は上面は平坦であるが内側から外側へ傾斜する。5もわずかに外傾し端部の外側への張出しは少ない。胎土には砂粒を多く含み焼成良好で淡い茶褐色を呈する。6は逆「L」字状をなす甕で底部を欠損する。口縁部上面は平坦で内側への張出しは少ない。口径27.6cm、残存器高30.2cmを測り最大径を口縁部にとる。胎土には砂粒を多く含み焼成良好で淡い茶褐色を呈する。

20号土壙（Fig. 29, PL. 16, 17）

20号土壙から31号土壙まではⅡ区検出の土壙である。Ⅱ区の土壙、ピット、掘立柱建物など遺構が集中する部分の西端、2号掘立柱建物の2m北に主軸に平行な状態で位置する。主軸は東西より少し振れ北東－南西にとり南側へ僅かな弧状を描く。最大幅0.9m、長さ2.91m、深さ0.4mを測る細長い溝状の土壙で遺構検出時に上面全体が覆土の入る余地も無いほど土器で覆われていた。出土土器には壷を初めとして完形品が多くなおかつ丹塗を施すものが半数近くになり他の土壙と性格が異なり祭祀用の土壙と言えよう。ただ南にある掘立柱建物に伴うのか否か遺構の残りが悪いため明確ではない。

出土土器（Fig. 30～34, PL. 25～28）

1から7、17は逆「L」字状の口縁部でその直下に三角突帯をもつ甕形土器の一群である。1から

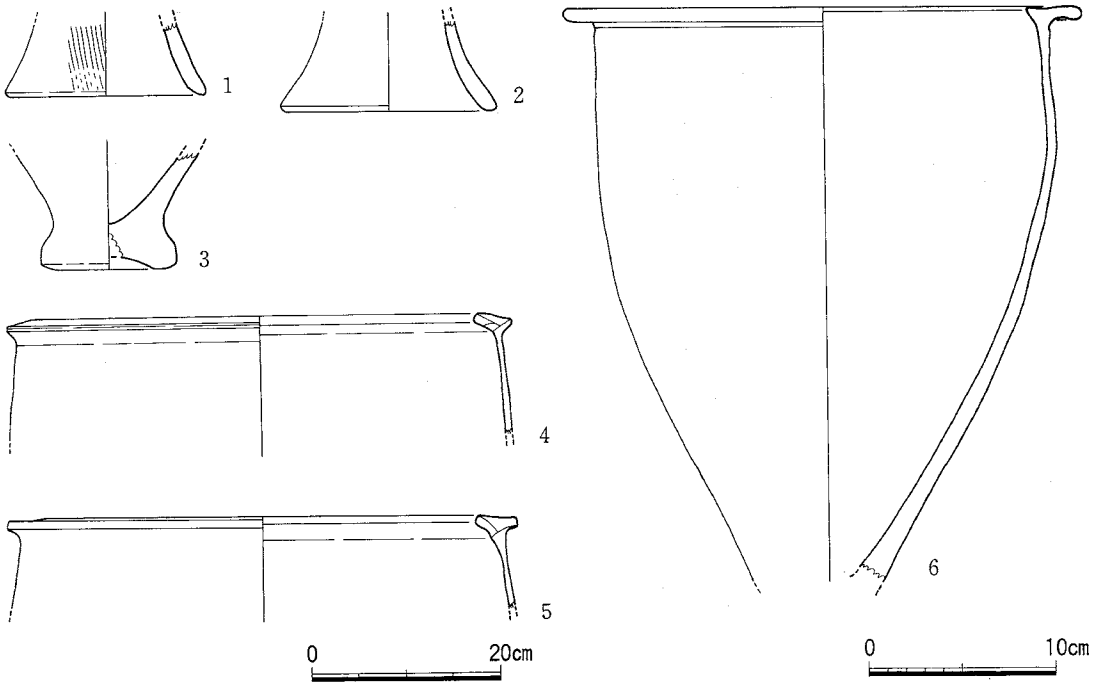


Fig. 28　13、16、17号土壙出土土器実測図（1/4・1/8）

5は口縁部上面を平坦にし、最大径は口縁部であるが、胴部の最大径は口縁部直下ではなく上半部にもち丸く膨らんだ器形となる。1は復元完形品で口径26.4cm、器高31.9cmを測る。平底で膨らみを持つ胴部で平坦な口縁部となる。外面は縦方向の刷毛目調整であるが底部近くと上半部で工具が異なる。内面はナデ調整である。2もほぼ1と同様な器形を示すが底部が上げ底気味となる。口径22cm、器高31.6cmを測る。8から15は口縁部下に三角突帯をもたない甕形土器の一群である。8は約1/2の遺存で復元口径28.2cm、器高31cmを測り、胴部は膨らみを有し、胴部最大径は上半部にとる。口縁上面は平坦で中央部が少し窪みさらに内側への張出しも比較的大きい。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。内外面とも磨滅が激しく調整は不明。9、10、13も同様な形態を示すもので10の胴部外面には縦方向の細い刷毛目調整をおこなう。13の口縁部上面は丸味をもち内側への張出しは少ない。12は小型品で内外面とも丹塗研磨を行う。口縁部も断面が三角形に近く古い様相を示す。14は胴部の一部を欠損するがほぼ完形品で、焼成後底部に両面から穿孔し甑として転用している。口径26.4cm、器高29.4cmを測り、胴部は膨らみをもち、胴部最大径を上半部にとる。平坦な口縁部上面は丸みをもち、外端が垂下する。胴部外面は刷毛目調整、内面はナデ調整を行う。16は底部径が大きく甕と鉢の中間形態を示す。小型品で口径18.8cm、器高19.8cm、底径8.6cmを測る。口縁部は平坦で外傾し、胴部は丸味をもち安定した底部となる。外面全体に丹塗研磨をおこない一部内面にも観察され、垂れて付着していたものであろう。18、19は鉢形土器である。平坦な口縁部は外傾しその直下に三角突帯を巡らし、安定した底部となる。18は深めの胴部で膨らみをもつ。口径30.2cm、器高23cmを測り、胎土には砂粒を少し含み焼成も良く橙黄褐色を示す。口縁部はヨコナデ、胴部は内外ともナデ調整を行う。20から25、32は壷形土器である。20、21は無頸壷である。20は外面から口縁部内面にかけて丹塗研磨し、胴部内面には指跡が残る。胴部中位に最大径をもち頸部に向かってすぼまり短く外反する口縁部となる。21は平坦口縁で、対称の位置に2個ずつ焼成前の穿孔が認められる。22から24、32はほぼ同型で外面全体から口縁部内面にかけて丹塗研磨を施す壷で外反する口縁部外面に暗文を施す。

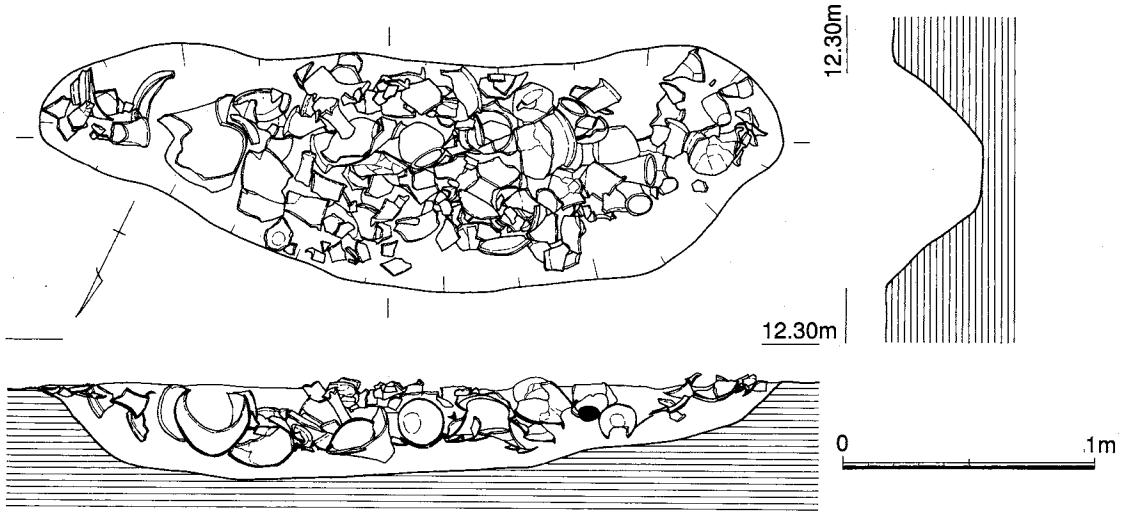


Fig. 29　20号土壙実測図（1/30）

最大径は22を除き胴部上半の胴部最大部にとり小さな底部で不安定な器形である。22は最大径を口縁にとり、算盤形の胴部最大部にM字突帯を一条巡らし丹塗部分は横から斜め方向の研磨を施している。口縁部の端部は肥厚して丸く収まる。23の胴部上半に15×13cmの楕円形の窓を焼成後に打ち欠いて設ける。口縁部外面には十数条単位の暗紋を巡らす。胴部最大径は中位より上にあり腰高の壷となる。肥厚する口縁部端は中央部を窪ませている。口縁部内面から外面の底部近くまで横方向の、その下は縦方向の箆研磨を行う。口径33.1cm、器高35.3cm、胴部最大径34.2cmを測る。24は23とほぼ同形であるが器高が32.7cmと少し低く押し潰された感じである。胴部最大部に焼成後の穿孔を行う。肥厚する口縁端部は丸く収まる。32は23と同様な器形、調整を行うもので、口縁部に歪みをもつ。底部の内面には指跡が残り一部丹の垂れが観察できる。25は鋤先口縁の短頸の壷形土器であろうか。胴部上半に４条のM字突帯を巡らしている。胎土には砂粒を少し含み焼成良好で淡褐色を呈する。26、27は高坏である。26は坏部内面から外面にかけて丹塗を施す丹塗土器である。口縁部上面は幅広く平坦で外傾し端部を面とりする。内面は横方向の研磨で、脚の内面にはしぼり痕が残る。27は小型で丸い椀状の坏部をもつ丹塗研磨土器である。28、29は小型の鉢である。平底で体部が開き屈曲して口縁部となる。摩耗が著しく調整は明らかではないが28の外面は研磨している。30、33から36は筒型の器台である。外面は縦方向の刷毛目、内面は指ナデによりしぼり痕を消している。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で淡橙色ないし黄褐色である。

21号土壙（Fig. 35）

Ⅱ区の北東部、８号土壙の北側に位置する。東側では21号土壙と重複する。主軸を北西－南東にとる不整形の土壙で東側は幅広の長楕円形でその西側に一回り大きい円形の土壙が結合している状況を示す。規模は東側で0.85m、深さ５cm、西側では径1.15m、深さ15cmを測る浅い土壙である。遺物は西側の中央部に集中して出土している。

出土遺物（Fig. 36-１～９，PL. 29）

１は甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。平坦な口縁上面は中央部が少し窪み、内側への張出しも大きい。器表面は磨滅が著しく調整は不明である。２は20号土壙で出土したものとほぼ同形の甕形土器と鉢形土器の中間形態をとる甕である。内外面とも磨滅が激しく器表面が剥離しているが外面の一部には丹が一部観察され、外面は丹塗であろう。口縁部は上面が平坦で内面への張出し

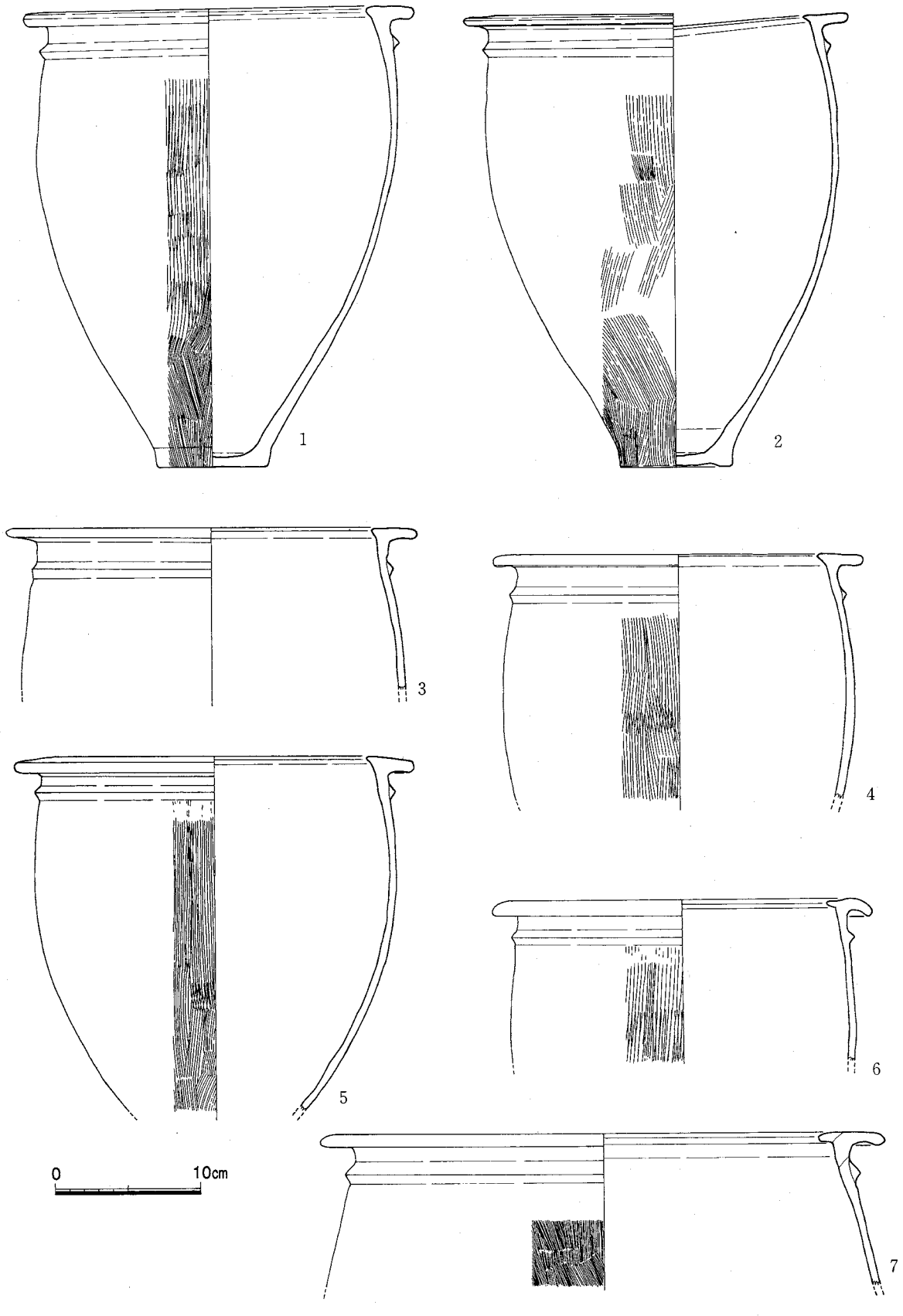


Fig. 30　20号土壙出土土器実測図(1) (1/4)

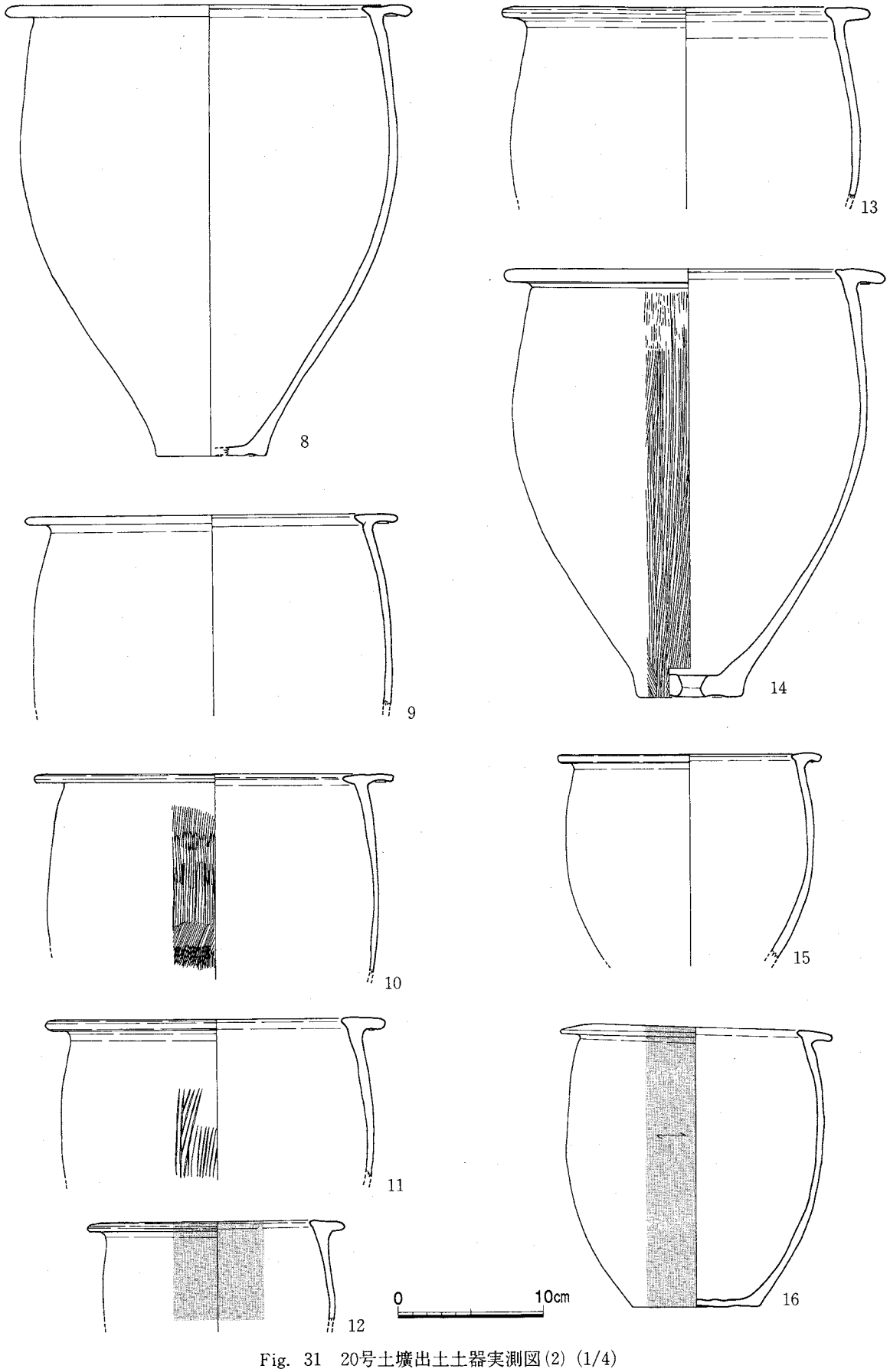


Fig. 31　20号土壙出土土器実測図(2) (1/4)

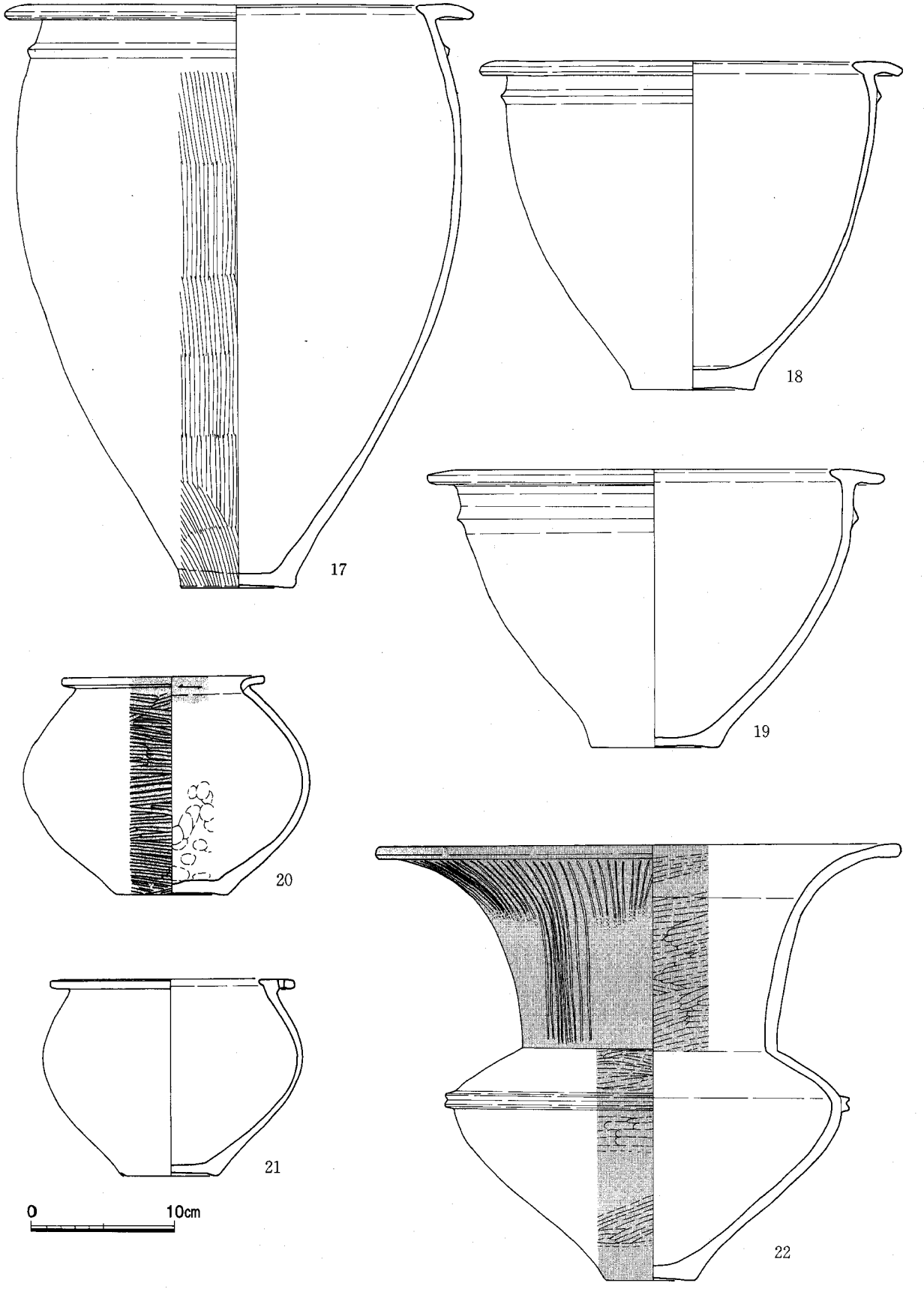


Fig. 32　20号土壙出土土器実測図(3) (1/4)

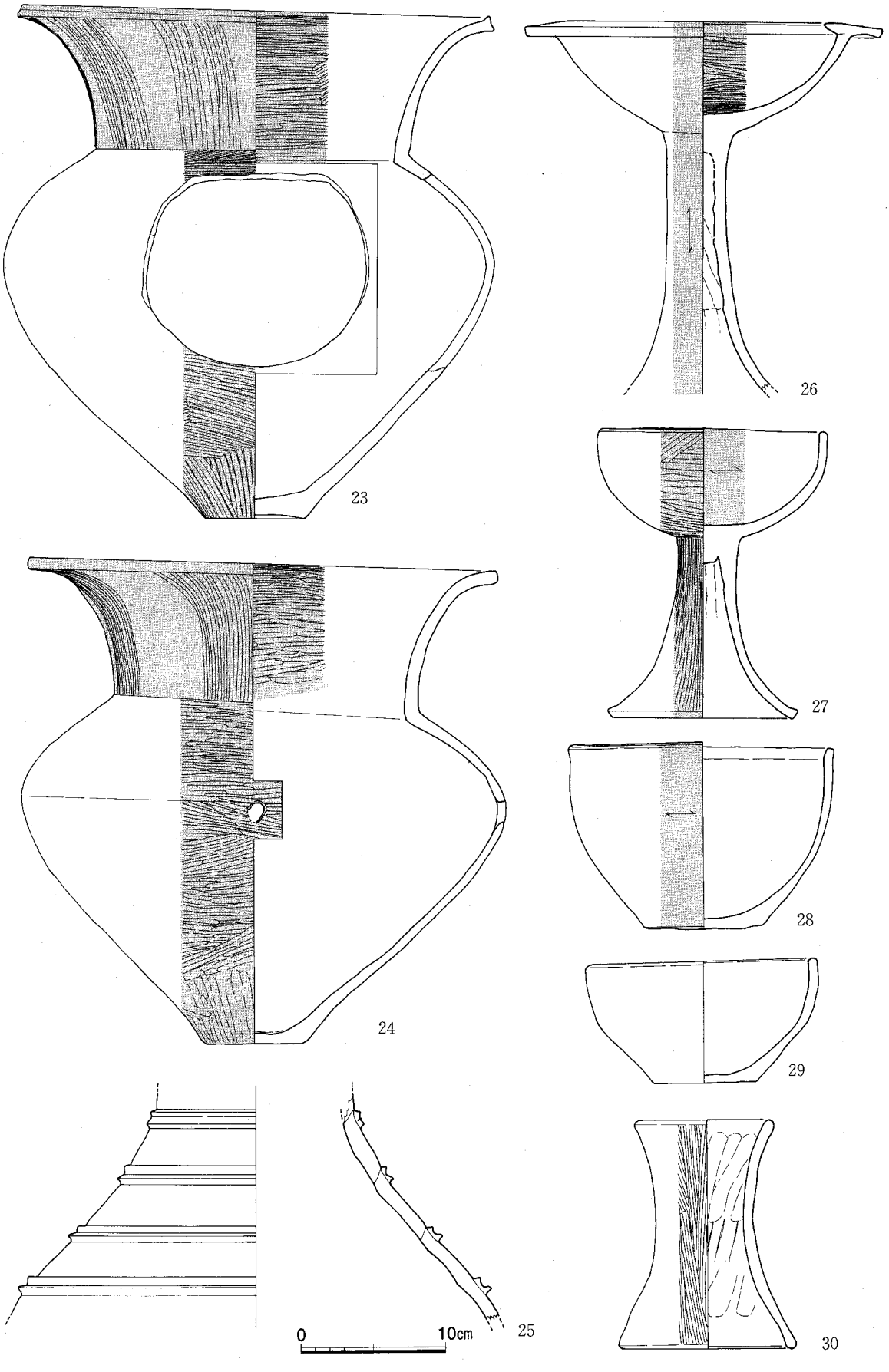


Fig. 33　20号土壙出土土器実測図(4)（1/4）

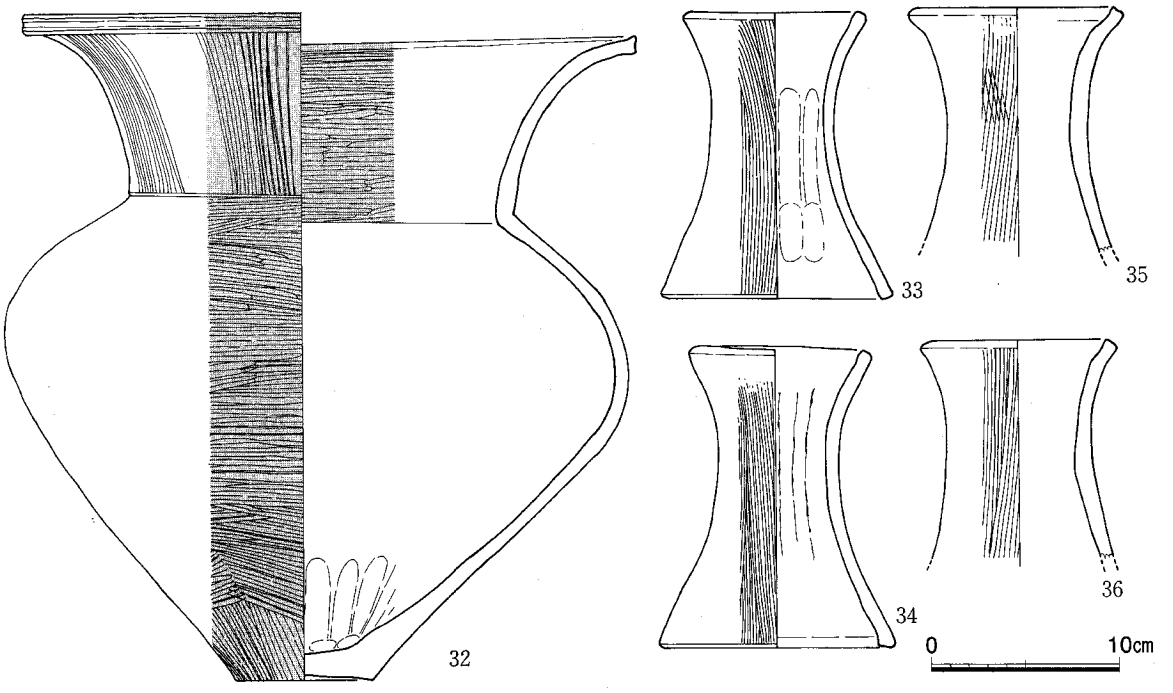


Fig. 34　20号土壙出土土器実測図(5)（1/4）

が大きい。胴部は膨らみをもち中位に最大径をもち、底部は安定した平底となる。口径19cm、器高19.3cm、底径８cmを測り、胎土には砂粒を多く含み焼成良好である。３から５は甕形土器の底部から胴部にかけての破片である。わずかに上げ底気味で３、４は外面に刷毛目調整が認められる。６、７は壷形土器である。６は胴部から底部にかけての破片で胴部最大部にM字突帯をめぐらす。８は高坏で口縁部と脚部が接合しないが同一個体と考えられる。各々の径からすると図のようになるが坏部はもっと浅くなるものであろう。９は蓋形土器で裾径17.2cm、器高9.1cmを測る。摘部の内面は空洞となる。裾端は面とりし中央部を窪ませる。

22号土壙（Fig. 35）

東側を21号土壙に切られる不整形の土壙で、東側が尖り二等辺三角形を呈する。主軸は21号土壙とほぼ同じで北西－南東をとり北西部が深くなる。規模は幅１ｍ前後、長さ2.1ｍ、深さ５～10cmを測る浅い土壙である。

出土土器（Fig. 36-10～13）

10、11は甕形土器の口縁部破片である。10は平坦な口縁の上面中央を窪ませ内側への張出しも大きく、口縁直下に一条の突帯を巡らし胴部が膨らみをもつ。11は上面に丸みをもたせ胴部最大径は口縁直下にとる。12は蓋形土器である。摘部の上面を窪ませ裾部が大きく開く形態である。

23号土壙（Fig. 37, PL. 17）

21号、22号土壙の南側、8号溝の北端で重複する大型の不整形土壙である。主軸をほぼ南北にとり、東西2.1ｍ、南北3.8ｍ、深さ20cm前後を測る。南東の縁から西側中央部にかけて二段に掘り込まれている。壁面はなだらかで床面はほぼ平坦である。土器は北側と南側にいくぶん集中しているがいずれも甕形土器を初めとする破片で、完形品はない。

出土土器（Fig. 38, PL. 29）

１～８は甕形土器である。１は口縁の内側が少し内傾し、口縁直下に胴部最大径をもつ。口縁部はヨコナデ、胴部外面は荒い刷毛目調整を施す。２、３は口縁外端を外傾させ、口縁部直下に三角突帯

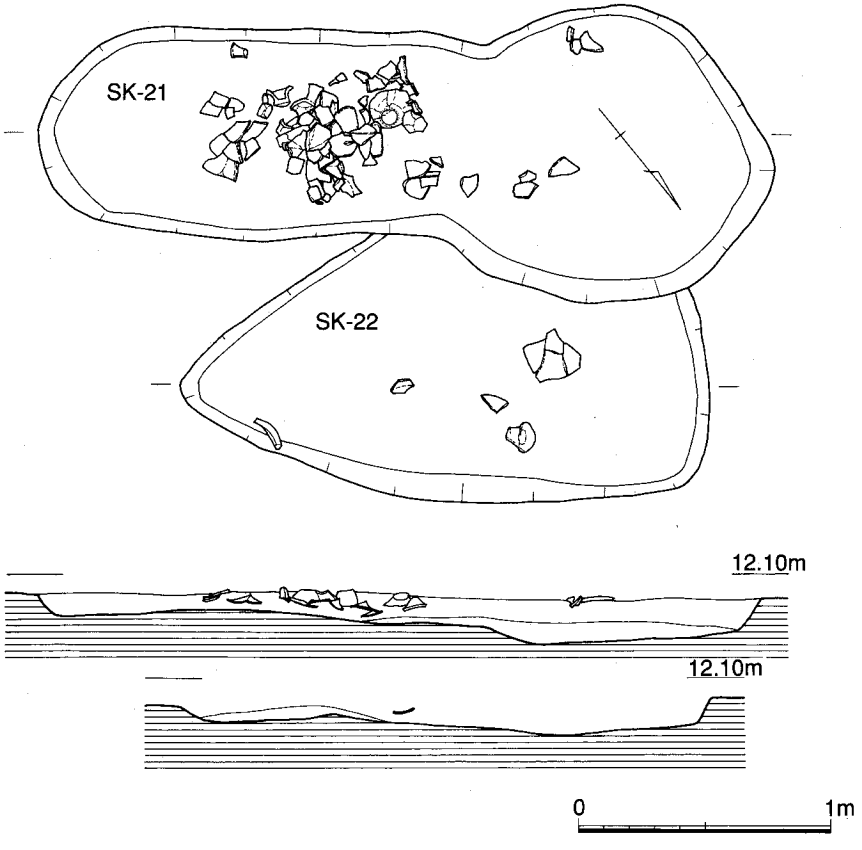


Fig. 35　21、22号土壙実測図（1/30）

を貼り付け、胴部を丸くする形態である。4は上面に丸みをもたせ内側への張出しが大きく2、3と同様に胴部を膨らませている。外面から口縁部内側にかけて丹塗している。6～8は甕形土器の底部から胴部にかけての破片で、外面には縦方向の刷毛目調整を施す。9、10は丹塗研磨の高坏形土器である。口縁部は平坦で外傾し内面への張出しも大きい。11、12は器台である。上縁径9.3cm、器高16.8cmを測る。外面は刷毛目調整と思われるが器表面が摩耗しているので調整不明。胎土には砂粒が多く含み、焼成良好で淡褐色を呈する。

24号土壙（Fig. 39, PL. 18）

Ⅱ区の中央南側、8号溝と2号掘立柱建物の間に位置する。主軸を南北方向近くにとり、南北1.42m、東西0.91m、深さ0.25mを測る小規模の南北に長い長楕円形土壙である。南側の壁面はなだらかであるが、東、西から北にかけては立上りが急である。出土遺物は少なく、覆土中より甕形土器の破片が出土しているだけである。出土遺物から中期後半の土壙である。

出土土器（Fig. 40-1、2）

甕形土器の口縁部と底部である。口縁部上面は平坦で、内側への張出しも大きく口縁部直下に一条の三角突帯を巡らし胴部の張りも大きく、最大径を胴部にもつようである。2は底部で外面に細かな刷毛目調整を施す。

25号土壙（Fig. 39, PL. 18）

25号土壙の南西2.5mに位置する土壙で25号から27号土壙3基が重複している中の西端にあたる。

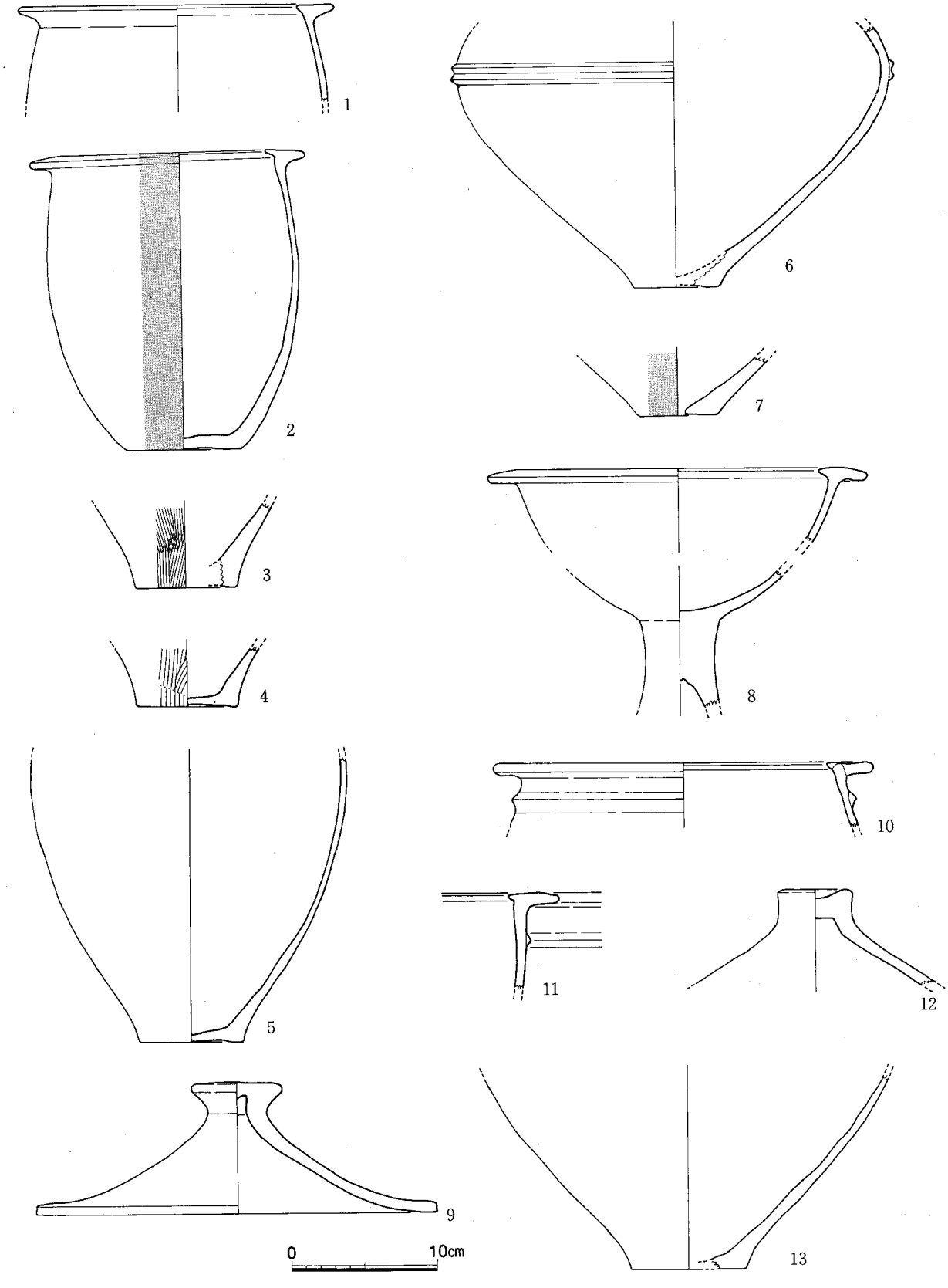


Fig. 36　21、22号土壙出土土器実測図（1/4）

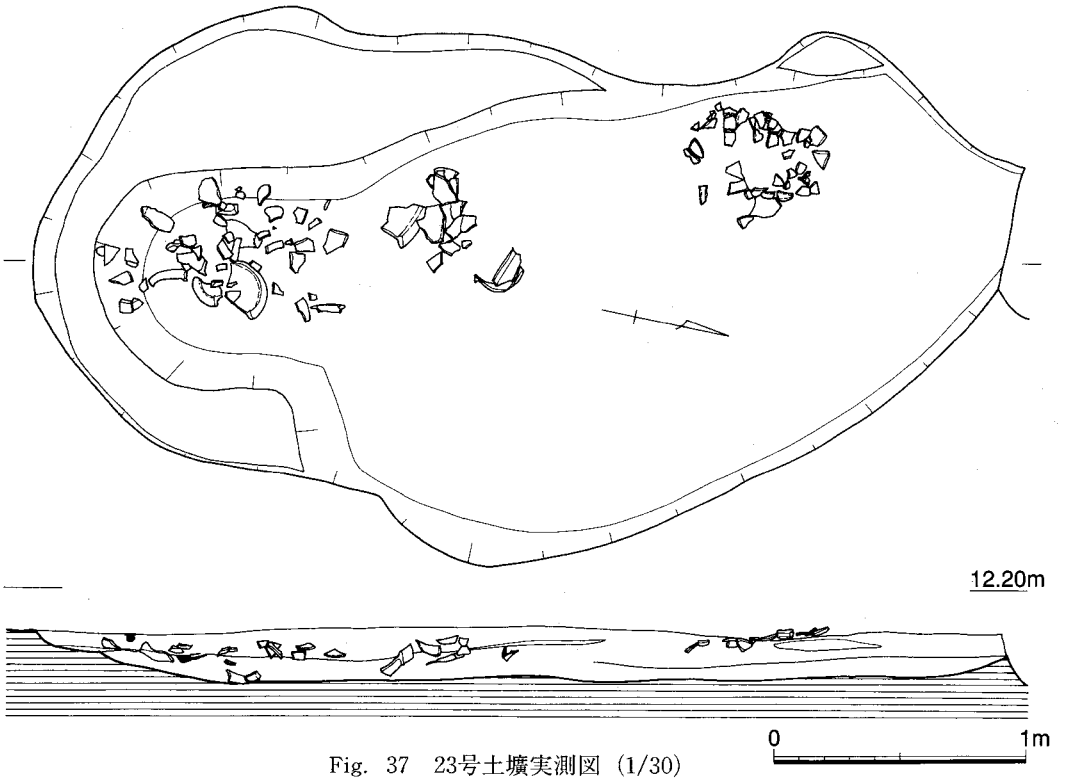


Fig. 37　23号土壙実測図（1/30）

南北に主軸をとる楕円形で、その中央に土器が集中して出土している箇所がある。南北0.8m、東西0.73m、深さ10cm弱を測り、壁面はなだらか、床面は平坦で北側の壁際に小ピットを掘り込む。出土土器はほとんど遺構検出面で確認され、床面よりかなり浮いた状態である。

出土土器（Fig. 40-3～8）

3～5は壷形土器の底部から胴部にかけての破片である。4は丹塗の壷形土器で胴部上位に最大部をもつ短頸壷で、胴部外面を横、底部近くを縦方向の篦研磨を施す。6、7は高坏形土器の坏部と脚裾の破片である。6は内外面とも丹塗研磨を施す。口縁部上面を外傾させ内側への張出しも大きい。外端は面取りし中央部を窪ませ、端部を僅かに跳ね上げる。8は外面に指おさえの指跡が残る器台の下半部で胎土に砂粒を含み、焼成は良くなく粉っぽく軟質である。

26号土壙（Fig. 39）

三基並んだ土壙の中央部に位置する不整形の土壙である。規模は東西、南北とも径約1m前後、深さ10cmを測る。壁面の立上りは急で床面はほぼ平坦である。出土遺物は弥生式土器の小片が出土しているだけである。

27号土壙（Fig. 39）

26号土壙の西側に位置する長楕円形の土壙である。規模は南北0.9m、東西1.6m以上、深さは中央部で15cmで北側は深くなり25cmを測る。26号土壙と同様弥生式土器の小片が出土しているだけで実測可能なものはない。

28号土壙（Fig. 39, PL. 19）

Ⅱ区の中央北側に位置する不整形の土壙である。南東部は直線的で他の部分は丸みをもちおむすび状を呈する。Ⅱ区の他の土壙と比べて掘り込みが深く、出土土器も床面近くからの検出が多い。ただ他の土壙は浅い掘り込みであったため遺構の大部分が削平を受け、床面近くだけが遺存したためそのような感じを受けるだけであろうか。規模は中央部で1.0×1.34m、深さ32cmを測る。

29号土壙（Fig. 41, PL. 19）

２号掘立柱建物の北東２ｍに位置する不正円形の土壙である。主軸を北西－南東にとり中央部に径約50㎝のピットを有する。長軸1.35ｍ、短軸1.05ｍ、深さ10㎝弱の小規模な土壙である。壁面は急で床面はほぼ平坦である。出土土器は遺構検出面の高さから纏まって出土したがそれ以外からは小破片が少量出土している。

出土土器（Fig. 42-１、２）

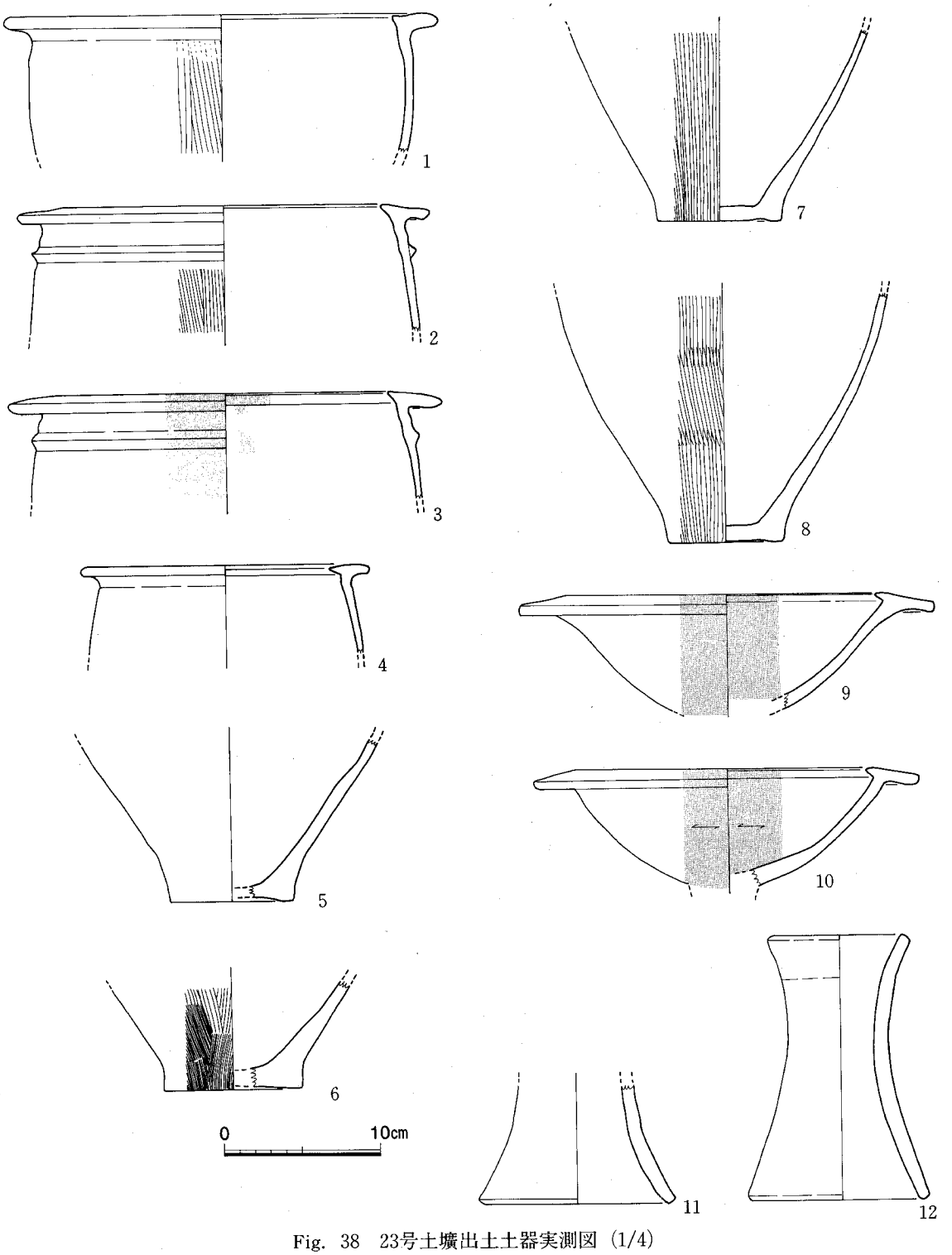


Fig. 38　23号土壙出土土器実測図（1/4）

甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。1は口径31cmを測る大型品で、平坦な口縁部上面は丸味をもちその直下に三角突帯を巡らす。胴部には膨らみをもたせ口縁部径とほぼ同じである。口縁部はヨコナデ、胴部は磨滅が激しく調整不明。

30号土壙（Fig. 41）

20号土壙の南、2号掘立柱建物の桁行中央に位置する不整形の土壙である。東西に細長く、西辺は直線的となり、二段に掘り込まれ、東側は尖り気味、南、北側の中央部はややすぼまり瓢箪形をなす。規模は長さが1.95m、中央部の幅が0.8m、西側の深さが25cm、中央部で45cmを測る。遺物は極めて少なく図示した他には破片少量が出土しているだけである。

出土土器（Fig. 42-3、4）

甕、壷形土器の底部である。3は甕形土器で上げ底の底部である。胎土には小石を多く含み、焼成は悪く淡褐色を呈する。4の外面には細かい刷毛目が残る。

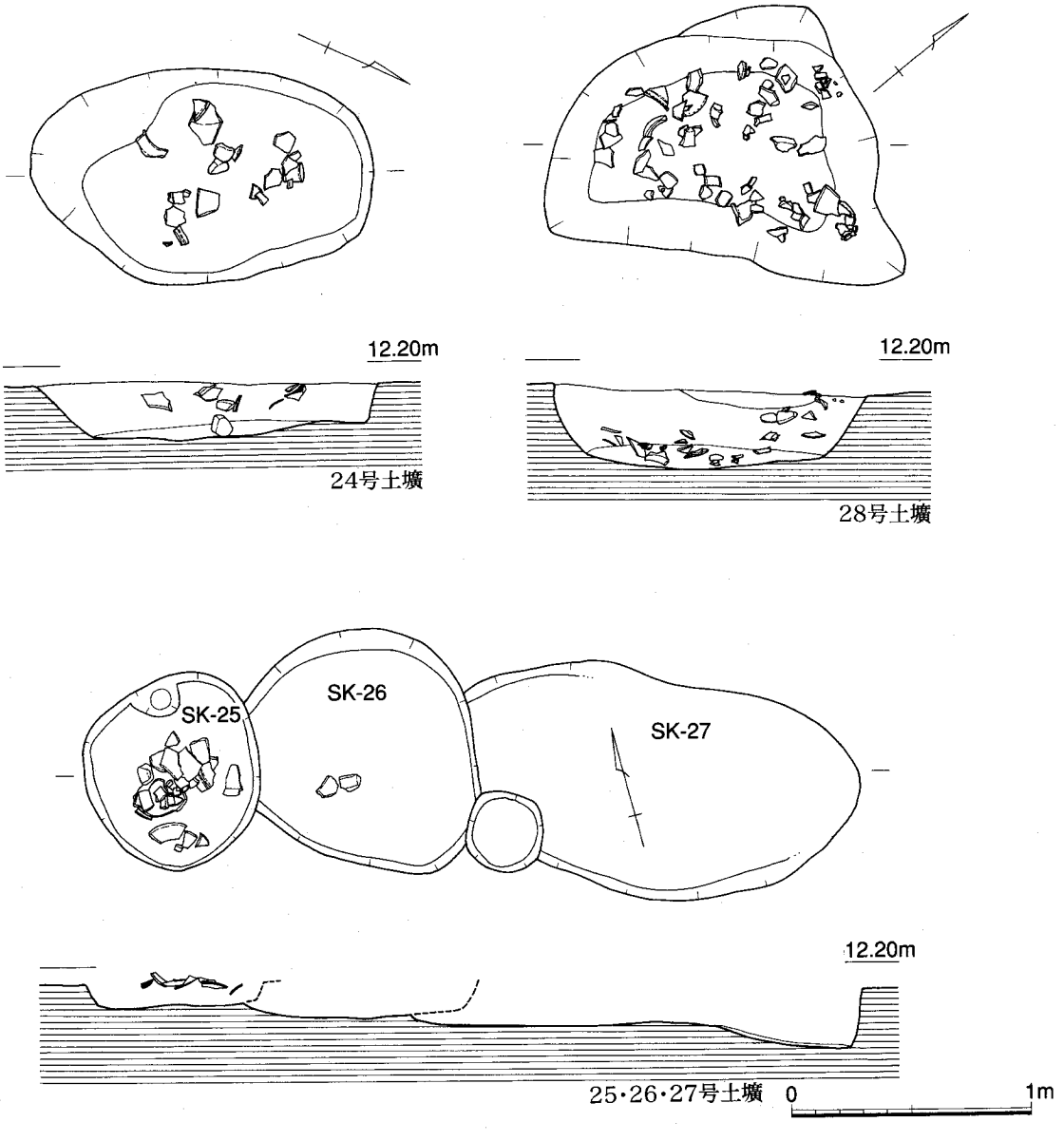


Fig. 39　24～28号土壙実測図（1/30）

31号土壙（Fig. 41）

Ⅱ区の北西部、28号土壙の西８ｍに位置する。この土壙の周辺だけはピット等他の遺構が見当らない。集落の縁辺部にあたるものであろう。比較的大型の土壙で規模は南北2.5ｍ、東西1.8ｍ、深さ10cm弱の浅い不整楕円形を呈する。

出土土器（Fig. 42-５～10）

５、６は甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。５は口縁部上面が平坦で僅かに内傾さ

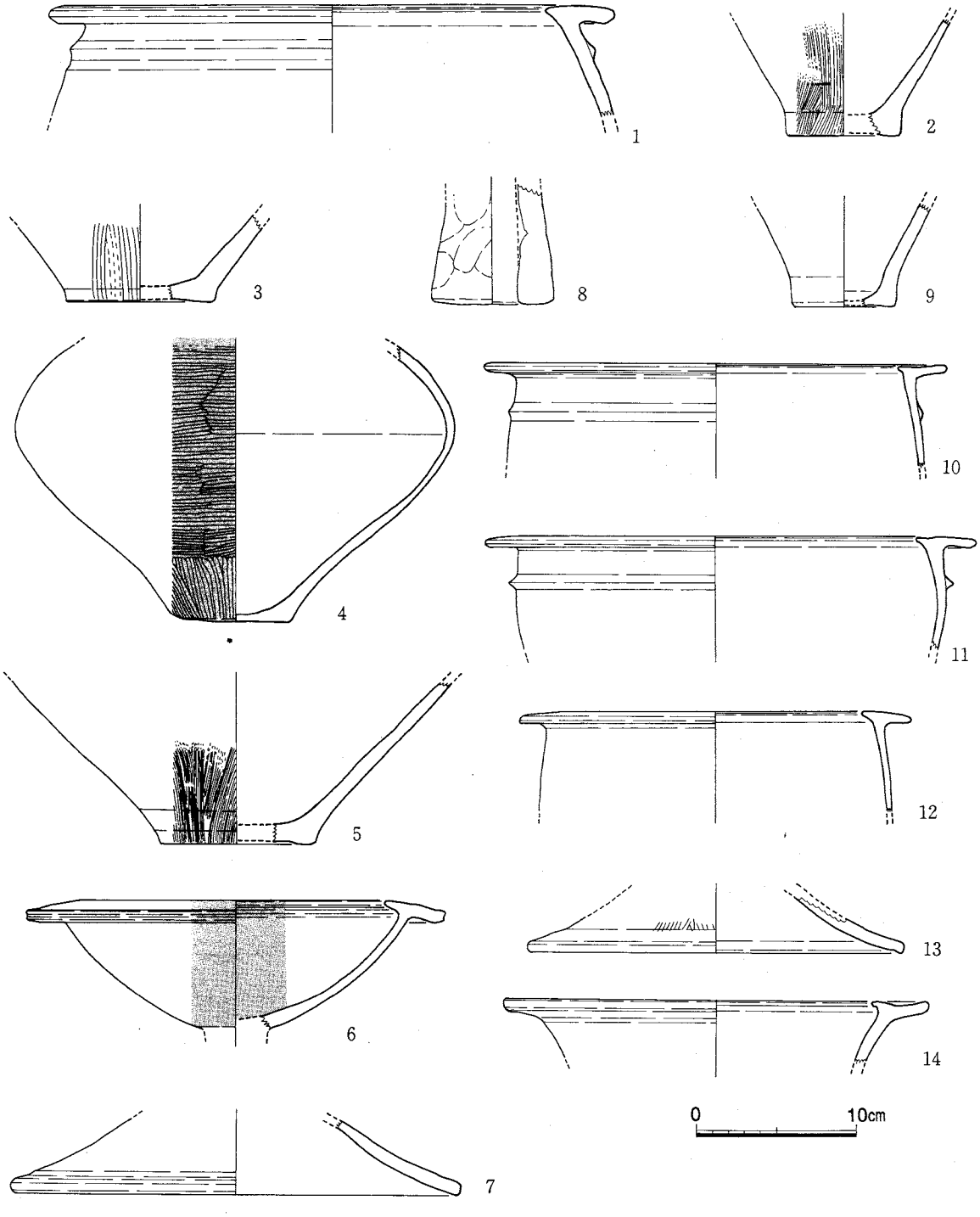


Fig. 40　24～27号土壙出土土器実測図（1/4）

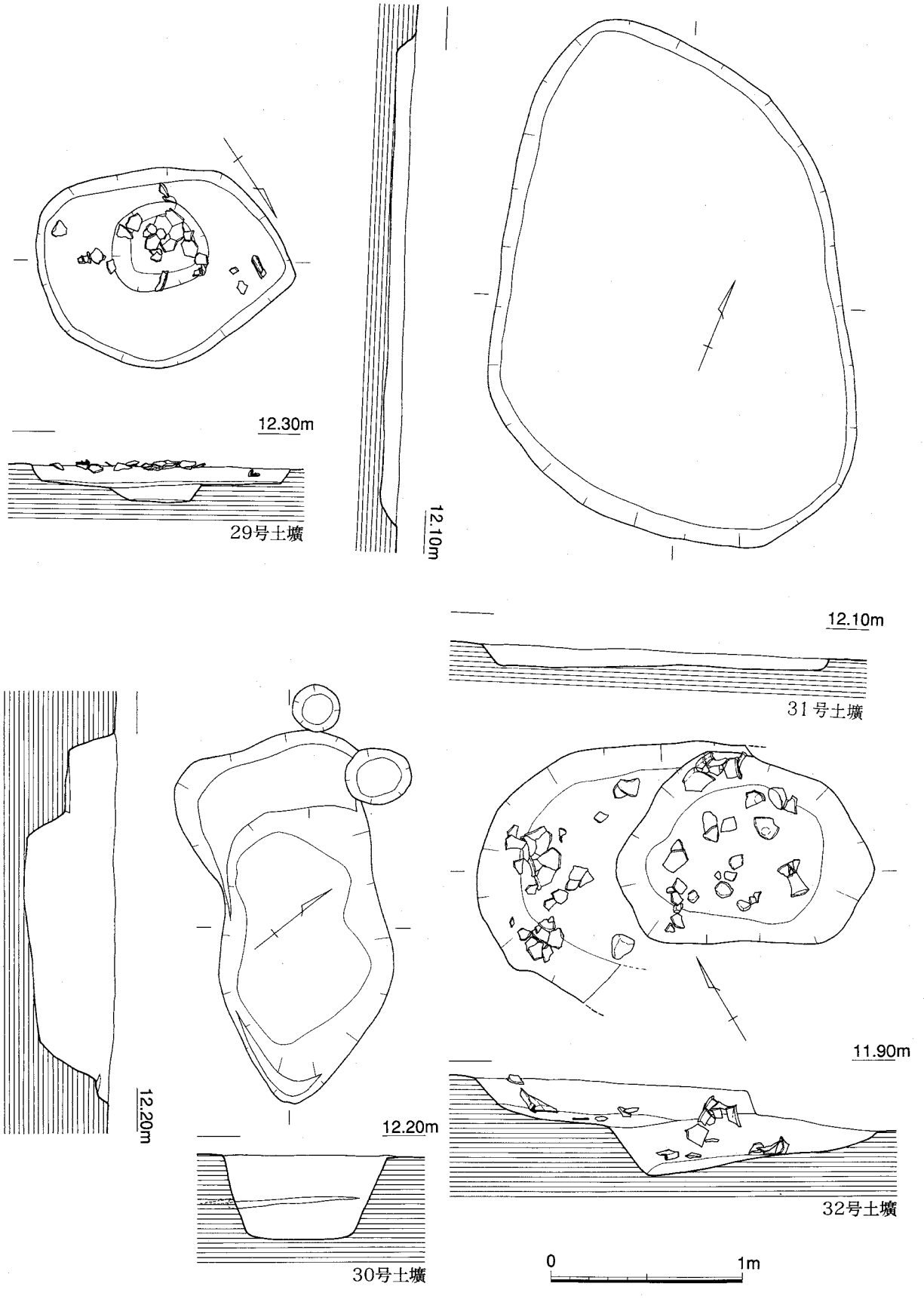


Fig. 41　29～32号土壙実測図（1/30）

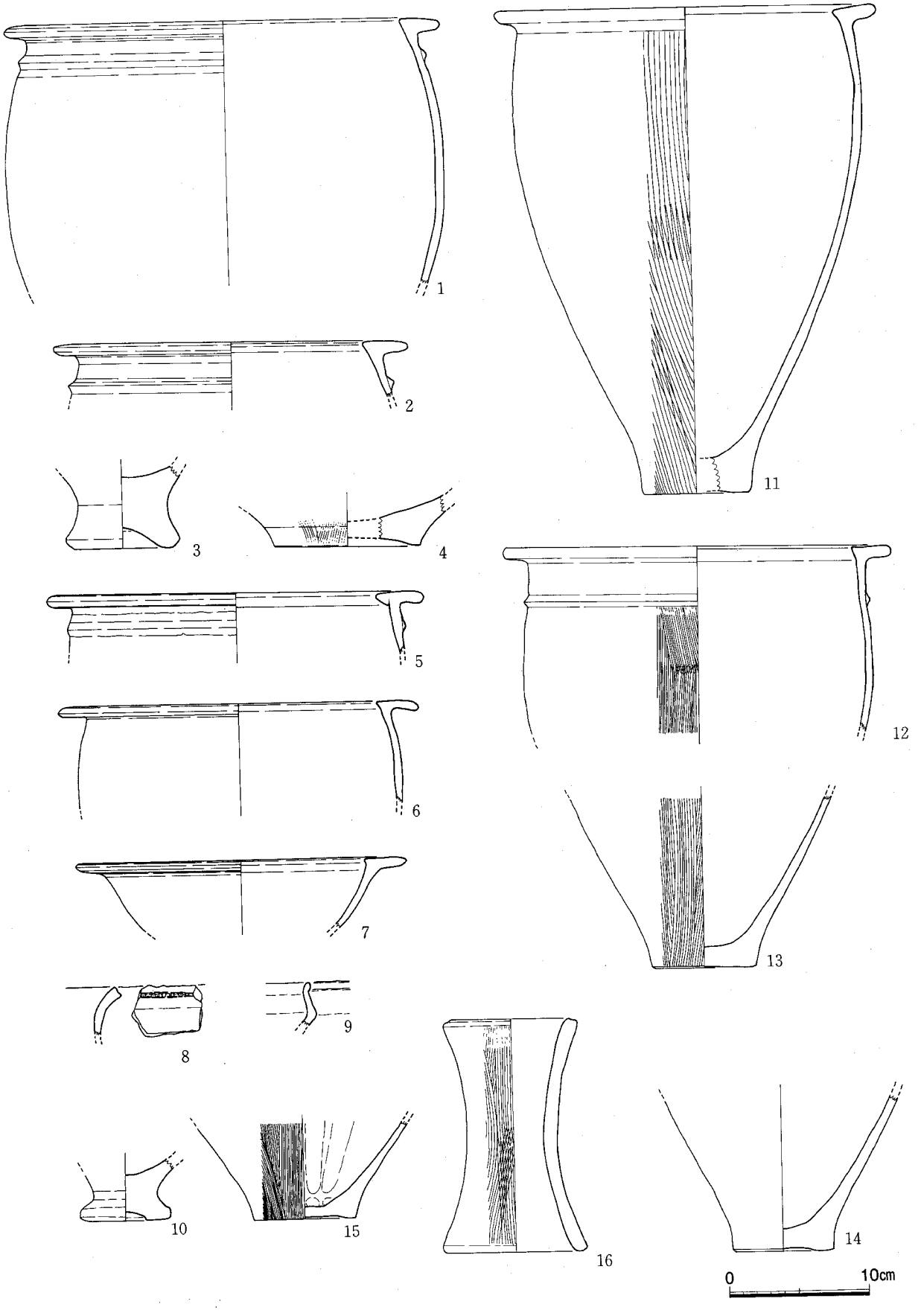


Fig. 42　29～32号土壙出土土器実測図（1/4）

せ、内側への張り出しも大きい。また、口縁部直下には扁平な三角突帯を巡らす。6は口縁部の上面は水平で外端部が少し下がる。7は高坏形土器の破片。8、9は時期の異なる甕、鉢形土器の口縁部の小破片である。

32号土壙 (Fig. 41, PL. 20)

Ⅲ区調査区の北端に単独で検出した土壙で全体の半分ほどの調査に留まり、北側は調査区外へと拡がっている。平面形は長楕円形ないし小判形で中央部にさらに不整形の掘り込みがあ。一段目の規模は幅1.3m、長さ2m以上、深さ22cmを測る。床面は平坦で中央部が少し深くなる。二段目の規模は長軸1.33m、短軸0.97m、深さ26cmを測り、壁面はなだらか、床面は南東端が最も深く北西部が浅くなる。出土土器はほぼ床面近くから甕形土器を初め多く出土している。

出土土器 (Fig. 42-11～16, PL. 29)

11から15は甕形土器である。11は復元完形品で口径27cm、器高35.2cmを測る。口縁部は平坦で内傾し厚みがある。胴部最大部は口縁直下にあり、すぼまりながら上げ底気味のぶ厚い底部となる。口縁部はヨコナデ、胴部外面は荒い縦方向の刷毛目調整、内面は斜め方向のナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。胴部には黒班があり、内底には炭化物の様な物が付着している。12は逆L字口縁で胴部直下が胴部最大部となり、その下に小さな突帯を巡らす。13から15は底部から胴部の破片で外面には刷毛目調整を施す。15は内面に指ナデの跡が残る。16は器台で一部を欠損するがほぼ完形品である。上縁径9.6cm、下縁径10.3cm、器高16.6cmを測る。上、下縁ともヨコナデ、外面は荒い縦方向の刷毛目調整である。

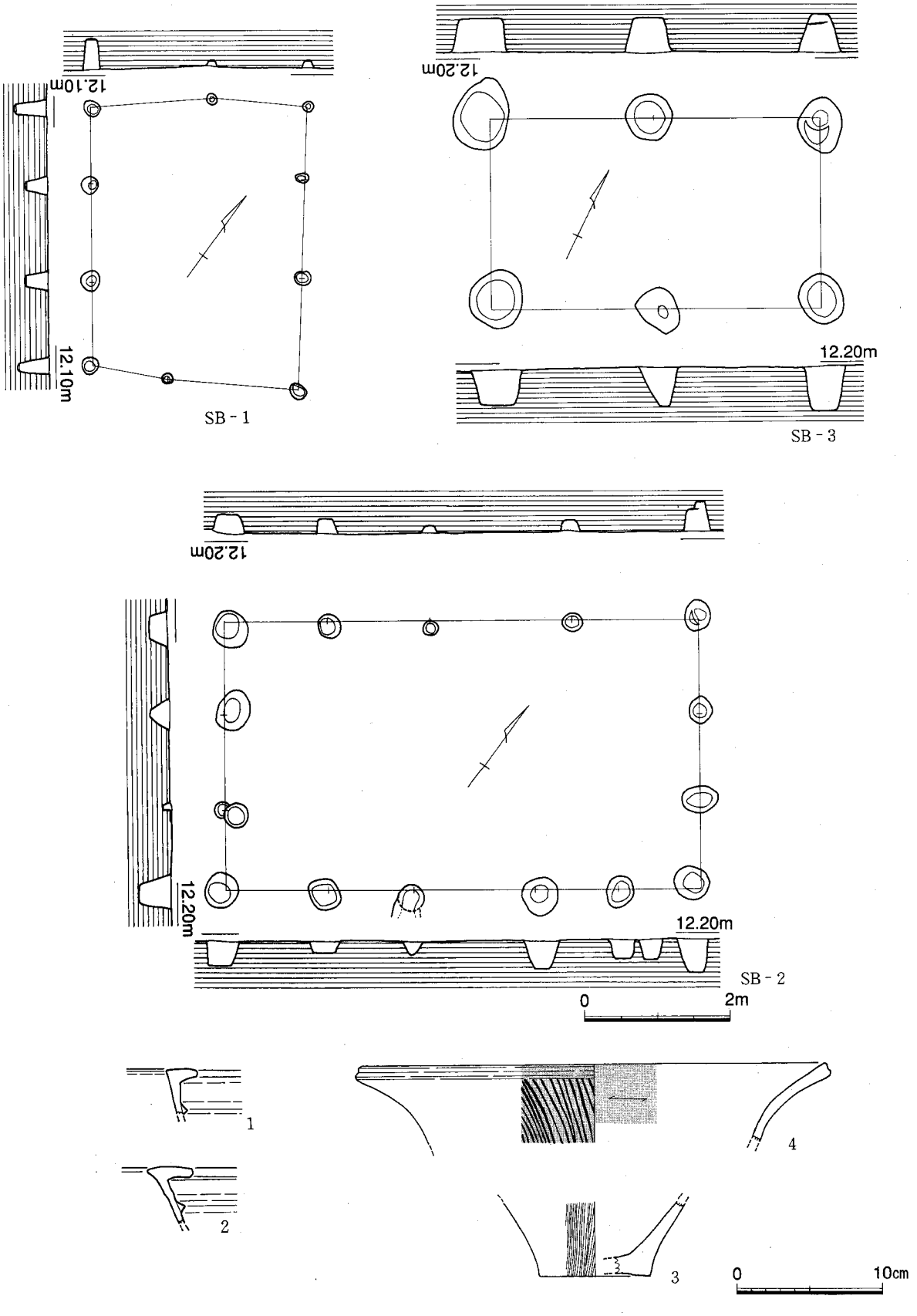


Fig. 43　掘立柱建物及び出土土器実測図（1/80・1/4）

5．掘立柱建物の調査

掘立柱建物はⅠ区で1棟（1号）、Ⅱ区で2棟（2、3号）計3棟を検出した。1号掘立柱建物の柱穴からは遺物が出土していなく、その時期は明らかではないが、柱穴の覆土が灰褐色の砂質土であることから中世以降の建物の可能性が強い。Ⅱ区の掘立柱建物は土壙と同時期で弥生時代中期後半の建物であろう。

1号掘立柱建物（Fig. 43, PL. 20）

Ⅰ区の南東端に検出した2間×3間の小規模な建物である。梁の北西部と南東部の柱穴が軸線より外に張出しているが、梁行2.95m、桁行3.56mを測る建物であろう。柱間距離には統一性が無く桁行は10cm～20cmの小さい掘り込みで、深さは40cm以上のもある。前述したように覆土は灰褐色の砂質土である。出土遺物は無い。

2号掘立柱建物（Fig. 43, PL. 21）

Ⅱ区の南寄り、3号掘立柱建物の北側に位置する。3間×4間の建物で、主軸は3号掘立柱建物より南に振れW-35°-Sをとり梁行3.68m、桁行6.49mを測る。柱穴は円、楕円形で径40～60cmを測るものが多いが、北西部には径20cm弱のもある。四隅の柱穴は比較的大きく深さも40～50cmである。また東端の桁行の間に中間柱を設けている。覆土は3号掘立柱建物と同様に暗褐色土と黄褐色土の混じり合ったもので、柱跡痕は検出出来なかった。柱穴からは弥生時代中期の土器が出土しており、その時期の建物であろう。

出土遺物（Fig. 43-1）

逆L字状口縁部の破片で、口縁部直下に三角突帯を巡らしている。器表面の磨滅が激しく調整は不明である。

3号掘立柱建物（Fig. 43, PL. 21）

Ⅱ区の南端に検出した1間×2間の小規模な建物である。主軸はW-26°-Sをとり梁行2.62m、桁行4.54mを測る建物である。柱穴は円、楕円形で短軸径60～70cm、長軸径60cm～100cm、深さ50cm～60cmを測る。暗褐色土と黄褐色土の混じり合った覆土で、柱跡痕は検出出来なかった。柱穴からの出土土器は弥生時代中期に属するものだけであり、その時期の建物であろう。

出土遺物（Fig. 43-2～4）

2、3は甕形土器の口縁部と底部の破片である。2は口縁部上面は平坦で内側への張出しが大きく、

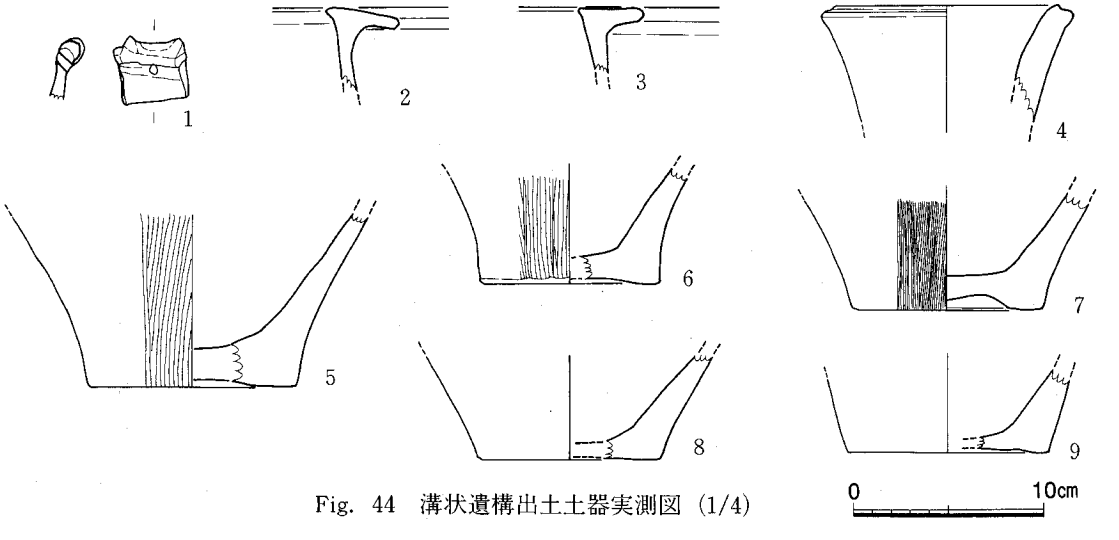


Fig. 44　溝状遺構出土土器実測図（1/4）

外端は面取りしている。口縁直下には突帯を巡らし、胴部は大きく膨らむ。4は内外面とも丹塗研磨の壷形土器の口縁部である。外面には暗紋を施す。

6．溝状遺構の調査

Ⅰ区で検出した溝は近世以降の溝である。1号溝は幅10～20cm、断面皿状の浅い掘り込みで灰褐色の砂質土で覆われていた。出土遺物は無い。2、3号溝は直線的に延び調査区で交差するが切り合いは認められなかった。覆土は灰褐色土のやや粘質土で覆われて、幅2.5m前後を測るところもある。交差部分は不整形で幅が拡がり4、5mの溜りとなっている。出土遺物には近世以降の肥前陶磁器が少量含まれており近世から現代にかけての溝であろう。

Ⅱ区、Ⅲ区では弥生時代以降の土器が出土し、集落に伴う遺構と考えられるので以下各溝毎に述べていく。

8号溝

Ⅱ区の東端を南北方向に走る溝状遺構で調査区内で収まる。北北西から南南東に蛇行しながら延びる。幅が1m前後、長さ22m、深さ5cm～10cmを測る断面皿状の浅い溝状遺構である。覆土は暗い黄褐色土で、少量の弥生式土器を出土しているが実測出来たのは縄文時代晩期の1点だけである。

出土土器（Fig. 44-1）

浅鉢の口縁部小破片で波状口縁で山形の突起を造りだすものであろう。

9号溝

2、3号掘立柱建物の西に位置する小規模の溝状遺構である。南北方向をとり、わずかに弧状を描く。幅30cmから40cm、深さ10cm、長さ6mを測る。覆土は暗褐色土である。。

出土土器（Fig. 44-2）

甕形土器の破片で内側が最高所を示し外傾する逆L字状口縁である。

10号溝

Ⅲ区の東寄りを調査区を南北に横断する溝である。幅50cmから70cmを測り、中央部は幅広くなり南側と北側のピットが重複したような感じで幅1.7m、深さ35cmほどを測る。長さは現状で40m以上である。断面はUからV字状の掘り込みで覆土は大部分が砂と暗褐色土で覆われている。

出土土器（Fig. 44-3～8）

3は甕形土器で逆L字状口縁で平坦な上面は中央部が窪む。4は器台の破片で口縁部はヨコナデ、体部は刷毛目調整と思われるが磨滅して調整不明。5から8は甕形土器の底部で外面には刷毛目調整、内面はナデを行う。

11号溝

Ⅲ区の東端に位置する浅い溝で10号溝とほぼ平行している。南側は長さ9m弱で消滅して、規模は幅2m、深さ10cmから15cmを測り、南側が徐々に浅くなる。覆土は暗褐色土で出土遺物は少なく、実測可能なのは図示した土器だけである。

出土土器（Fig. 44-9）

弥生式土器の甕形土器の底部破片である。器表面は磨滅し調整不明。胎土には砂粒を多く含み焼成良好、色調は淡橙色を呈する。

7．その他の出土遺物

遺構検出時あるいはピット等などから出土した遺物を記載する。調査時の基盤層が縄文時代晩期の包含層であったため、その時期の遺物、とくに黒耀石製品が多く石器類を中心に述べる。

(1)　ピット出土土器（Fig. 45）

1は縄文時代晩期の甕形土器の口縁部破片である。器表面は磨滅しており明らかではないが、外面は条痕、内面はナデであろう。2から7は弥生時代中期後半の甕形土器で逆L字状口縁である。2は胴部外面に荒い刷毛目調整で、口縁部はヨコナデ、内面はナデである。3の口縁部は外傾し、胴部が

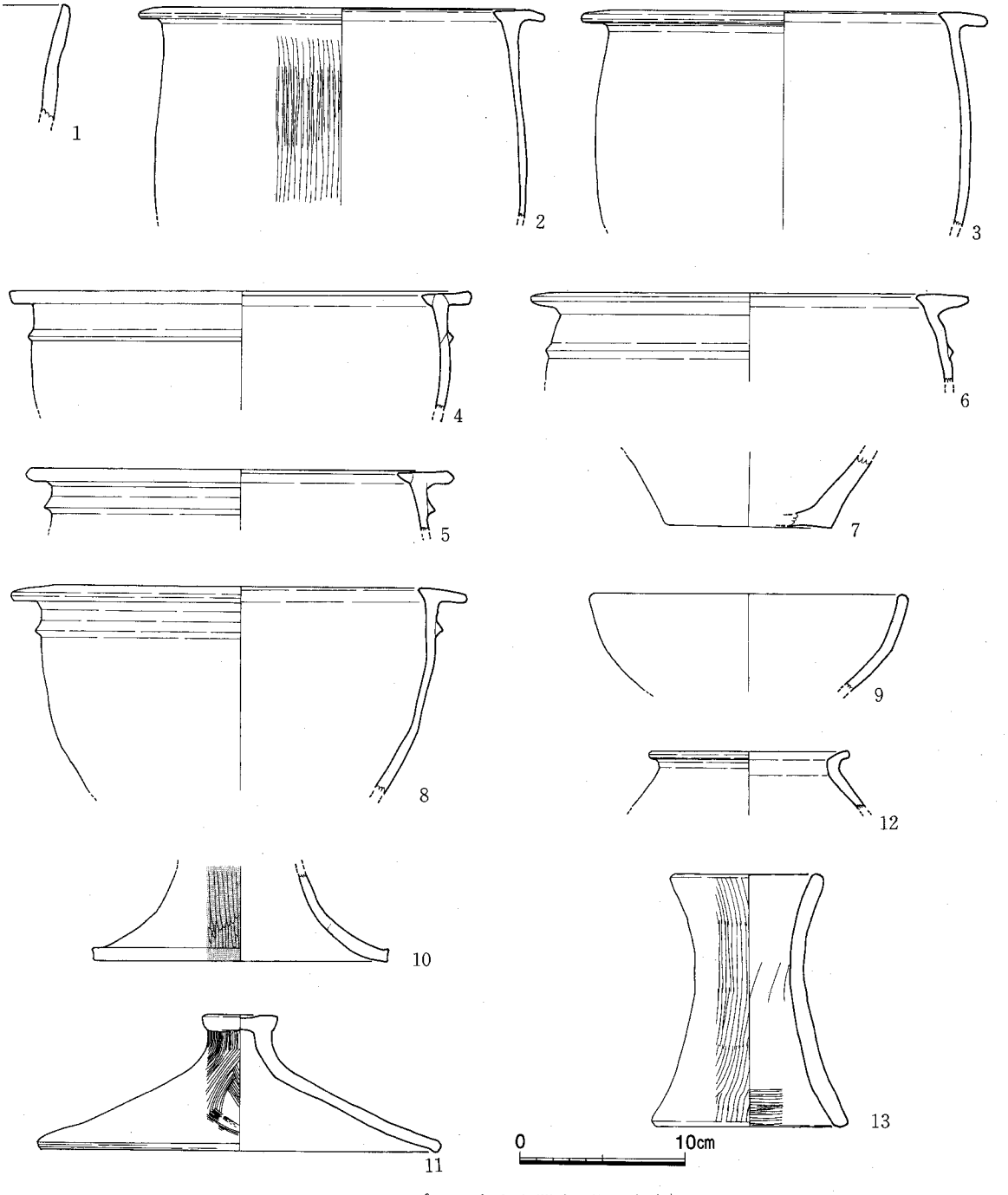


Fig. 45　ピット出土土器実測図（1/4）

少し膨らんでいる。4から6は口縁部直下に三角突帯を貼り付け、口縁部内側への張出しは大きい。8は鉢形土器であろう。口縁部は外傾しその直下に突帯を巡らす。10は丹塗研磨の高坏形土器で、外面は縦方向の研磨を行う。13は器台でほぼ完形品である。口縁部径9.7m、底部径11.9cm、器高15.5cmを計る。外面は荒い刷毛目調整で口縁部は軽くヨコナデを行う。内面中央には箆跡が残る。11は蓋形土器で復元口径24.5cm、器高8.3cmを計る。外面は刷毛目調整で摘部の中央で刷毛目工具の段が突く。内面はナデ、裾部縁は強いナデで端部中央が窪む。

(2) 出土石器

遺構検出面より出土した石器は1,265点出土した。このうち97点を図示しいた。

石鏃 (Fig. 46-36～43, PL. 33-36～43)

36 基部の抉りの深い細身・長身の二等辺三角形を呈する剝片鏃である。剝片の打撃方向は二方向で、打面に二次加工を加え先端部としている。側辺には若干の刃こぼれが認められるものの二次加工は施していない。基部は剝片中央部を表面からの押圧による剝取方法を用い、抉入部を形成している。若干の不純物が混じる黒耀石である。 **37** 透明感のある黒耀石を使用した二等辺三角形を呈する三角鏃で、全体に二次加工を施し、やや肉厚である。裏面右上方からの大きな剝離面は素材によるものである。Ⅰ区遺構検出面より出土した。 **38** 素材となった剝片の剝離面を両面に残す三角鏃で、打面を基部に設定している。素材の打撃方向は下位からの一方向である。全周辺に二次加工を施し、基部の抉りは浅い。裏面先端部付近に擦痕が認められる。Ⅱ区SK-31からの出土である。 **39** 不純物の多く混じる黒耀石を素材としたやや大型の三角鏃で、先端部を欠損している。基部は平坦で、表面は素材の剝離面をそのまま残し、裏面のみを加工して形を整えている。Ⅰ区遺構検出面より出土した。 **40** 不純物の多く混じるやや透明感のある黒耀石を素材にした大型の石鏃で片脚を欠損し、脚部が大きく開き抉りも深い。全周に二次加工を施す。Ⅲ区遺構検出面より出土した。 **41** サヌカイトの石鏃で、先端部及び脚部を欠損する。素材となった剝片の打面側を基部とし、表面は二次加工を施すが、裏面は片縁だけの加工でとどまっており、製作過程の未製品と思われる。SK-01出土。

42 小型の黒耀石製石鏃で先端部の一部及び片脚を欠損する。基部の抉りは深く脚部の下端は内側に内湾する形態をもつ。全体に剝離調整を行なう。Ⅱ区遺構検出面より出土。 **43** 凝灰岩製の石鏃で、脚部の抉りが深く、全体に二次加工を施す。先端部が凹んでいるのは、使用時によるものと思われる。Ⅲ区遺構検出面より出土した。

掻器・削器 (Fig. 46・47-44～50, 52～54, 56～58,, PL. 33-44～50, 52～54, 56, 34-57, 58)

44 表面に自然面を有する剝片の側辺部を表面からの加撃によって切断している。上端・下端に二次加工を施す掻器（コンケーブスクレーパー）である。特に下端は連続する大まかな剝離により、中央部に凹みを作り出している。Ⅱ区SD-10出土。 **45** 不純物の多く混じる黒耀石の剝片で、表面の大半は自然面を有する掻器である。特に下端部には使用時による刃こぼれが認められる。Ⅱ区遺構検出面より出土。 **46** 打面は自然面で、右側辺に裏面からの片面・片縁調整を行なう。左側辺は細かな刃こぼれが認められる削器である。Ⅰ区遺構検出面より出土。 **47** 打面は調整打面で、表面及び左下側面に自然面が残るナイフ型をした削器である。打撃方向は5方向からで、右下側面は表面からの剝離が認められる。先端部に上からの6個の剝離面がある。やや風化の進んだ黒耀石で、Ⅲ区SD-08からの出土。

48 大粒（1～2㎜大）の長石が数粒混じる光沢のある黒耀石で、表面左側辺に連続する剝離調整を行なう削器である。Ⅱ区SK-24出土。 **49** 不純物の多く混じるやや風化した黒耀石の縦長剝片で、打撃面及び下端部に自然面を残す。右側辺は表面から、左側辺は裏面からの連続する押圧剝離を行な

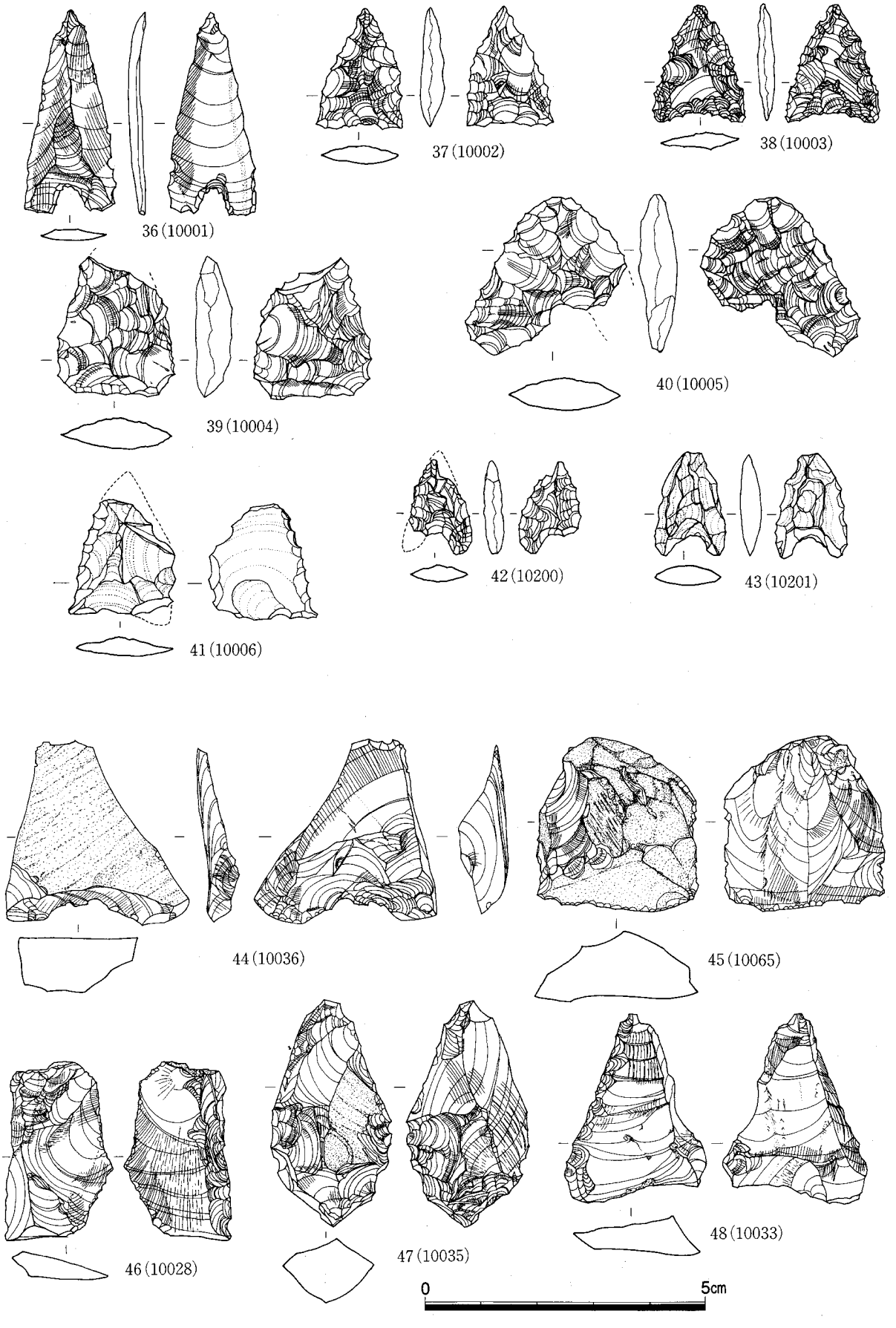


Fig. 46　遺構外出土石器実測図(1)(縮尺1/1)

う。側辺の規則的な剥離からサイド・スクレーパーである。打面は平坦面で剥離は上方向から行なう。Ⅲ区遺構検出面より出土。　**50**　縞状に不純物の混じるやや風化の進んだ黒耀石の縦長剥片で、表面に縦方向への二本の稜を持つ。両側辺に細かな連続的なリタッチを施すサイド・スクレーパーである。打撃面は切断されている。　**52**　石鏃の未製品とも考えられるが、ここでは一応スクレーパーとした。階段状剥離等が表・裏面に認められるが、一方で打面・第一次剥離面が観察される。光沢のある漆黒色の黒耀石を使用している。Ⅱ区SK-31出土。　**53**　新旧二回の剥離が認められる剥片で、片縁に連続する剥離調整が施されていることからサイド・スクレーパーとした。Ⅰ区遺構検出面より出土。

54　気泡・不純物の多く混じる黒耀石製のサイド・スクレーパーで、四方向からの剥取を行なう。打面は調整打面で側辺に階段状の剥離が認められる。SD-03からの出土である。　**56**　風化の著しい黒耀石を素材とするもので、エンド・スクレーパーもしくはグレーバーと考えられる。打面は調整打面で、二方向からの剥離を行なう。側辺部に連続的なリタッチが認められる。Ⅱ区SK-31からの出土。**57**　小型のサイド・スクレーパーで打面及びその周辺に細かな二次加工を施す。左側辺及び右の上部は裏面、右側辺は表面からの片面剥離調整を行なう。やや風化した黒耀石でⅠ区遺構検出面からの出土である。　**58**　不純物の多く混じる黒耀石製のサイド・スクレーパーで、末端部を表面からの加撃によって折断している。両側辺には細かな剥離が認められる。Ⅲ区SD-10からの出土。

彫器・ドリル状石器・楔形石器（Fig. 47-51, 55, 59～62, PL. 33-51, 55, 34-59～62）

51　黒耀石製のドリル状石器で、素材の打面は自然面で平坦をなす。全体の2/3以上が自然面であり、剥離面の左下端に連続的な剥離を行ない、ドリル状の先端部を作り出している。Ⅰ区遺構検出面より出土。　**55**　風化の著しい黒耀石で上下に細かな剥離が認められる楔形石器である。打撃痕は下位に多く見られる。側辺には階段状の剥離が認められる。Ⅱ区遺構検出面からの出土。

62　三辺に打撃痕を残す楔形石器である。打面は調整打面で細かな連続的な剥離を行なう。打撃方向は三方向から行なっている。上端部に剥離が認められる。Ⅱ区SP-51から出土。

59　素材の打面は平坦面で、上方向からの数回の剥離を行なった後、打面を横方向（右）からの剥離を行ないグレイバー・ファクトを形成している。右側面に自然面を残す。SD-02出土。　**60**　縞状の透明感のある黒耀石を使用したグレイバーで、形状は木の葉状を呈する。剥離は上方向からで打面の周辺に細かな連続する剥離を行ないグレイバー・ファクトを作り出している。Ⅰ区遺構検出面より出土。　**61**　縦長剥片の端部を３条のグレイバー・ファクトをもつもので彫器の形状に近い。剥離方向は上方向からである。下端部に二次加工を施す。Ⅰ区遺構検出面より出土。

使用痕のある剥片（Fig. 48・49-63～91, PL. 34-63～77, 35-91）

63　縞状に不純物の混じる黒耀石を素材とした縦長剥片で側辺に若干の刃こぼれが認められる。打面は平坦面で二方向からの剥離を行なう。Ⅱ区遺構検出面より出土。　**64**　風化が著しく不純物の混じる黒耀石を素材とした縦長剥片で、側辺に刃こぼれが認められる。打面は平坦面で二方向からの剥取を行なう。表面に自然面を多く残す。64と同じⅡ区遺構検出面より出土。　**65**　不純物の混じる黒耀石を素材とした縦長剥片で両側辺に刃こぼれが認められる。打面は自然面で平坦をなす。剥離方向は二方向から行なっている。Ⅲ区SD-10から出土。　**66**　不純物の混じるやや風化の進んだ黒耀石を素材とした縦長剥片で、打面及び下端に自然面を残す。打面は平坦をなし、断面は三角形を呈する。両側辺に刃こぼれが認められる。剥離方向は上下二方向からで表面の稜（下位）に摩擦痕が観察できる。Ⅱ区SP-97出土。　**67**　不純物が多く混じる透明度のある黒耀石製縦長剥片で、両側辺に刃こぼれが認められる。打面は調整打面で、その周辺に両面からの二次加工を施す。打撃方向は上下二方向から行なっている。SP-114からの出土。　**68**　風化の進んだ光沢のない黒耀石製縦長剥片で、上面

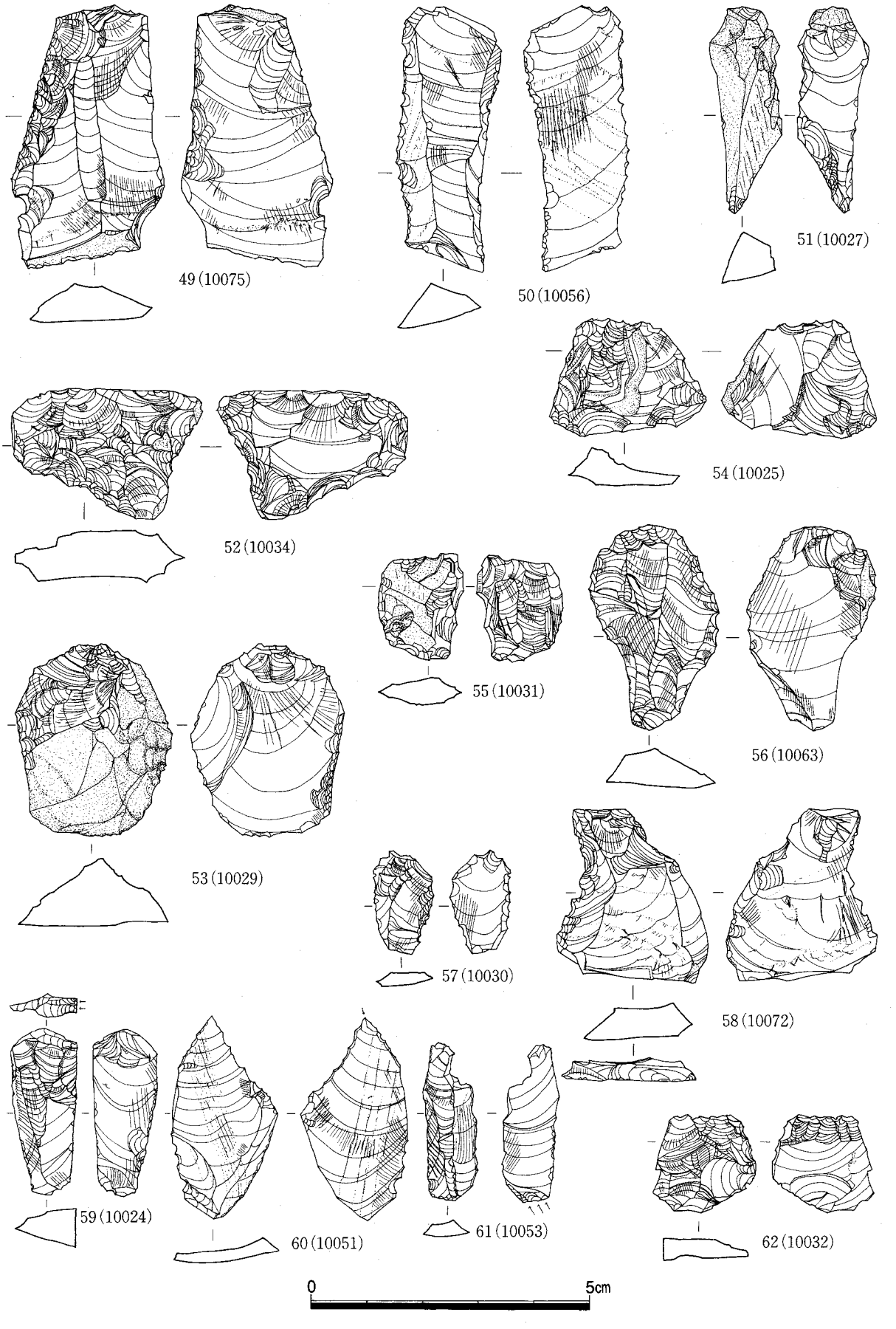


Fig. 47　遺構外出土石器実測図(2)(縮尺1/1)

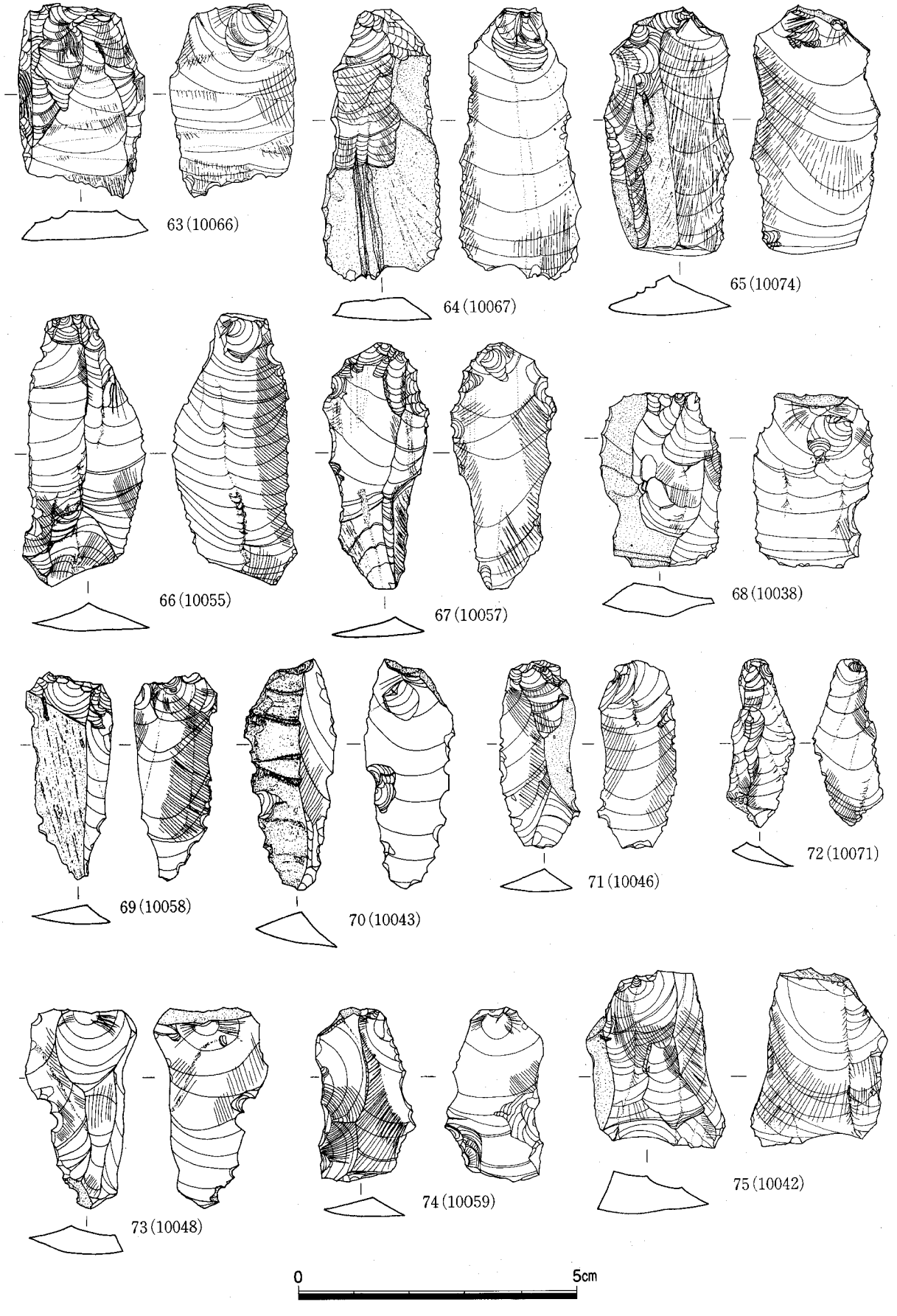


Fig. 48　遺構外出土石器実測図 (3) (縮尺1/1)

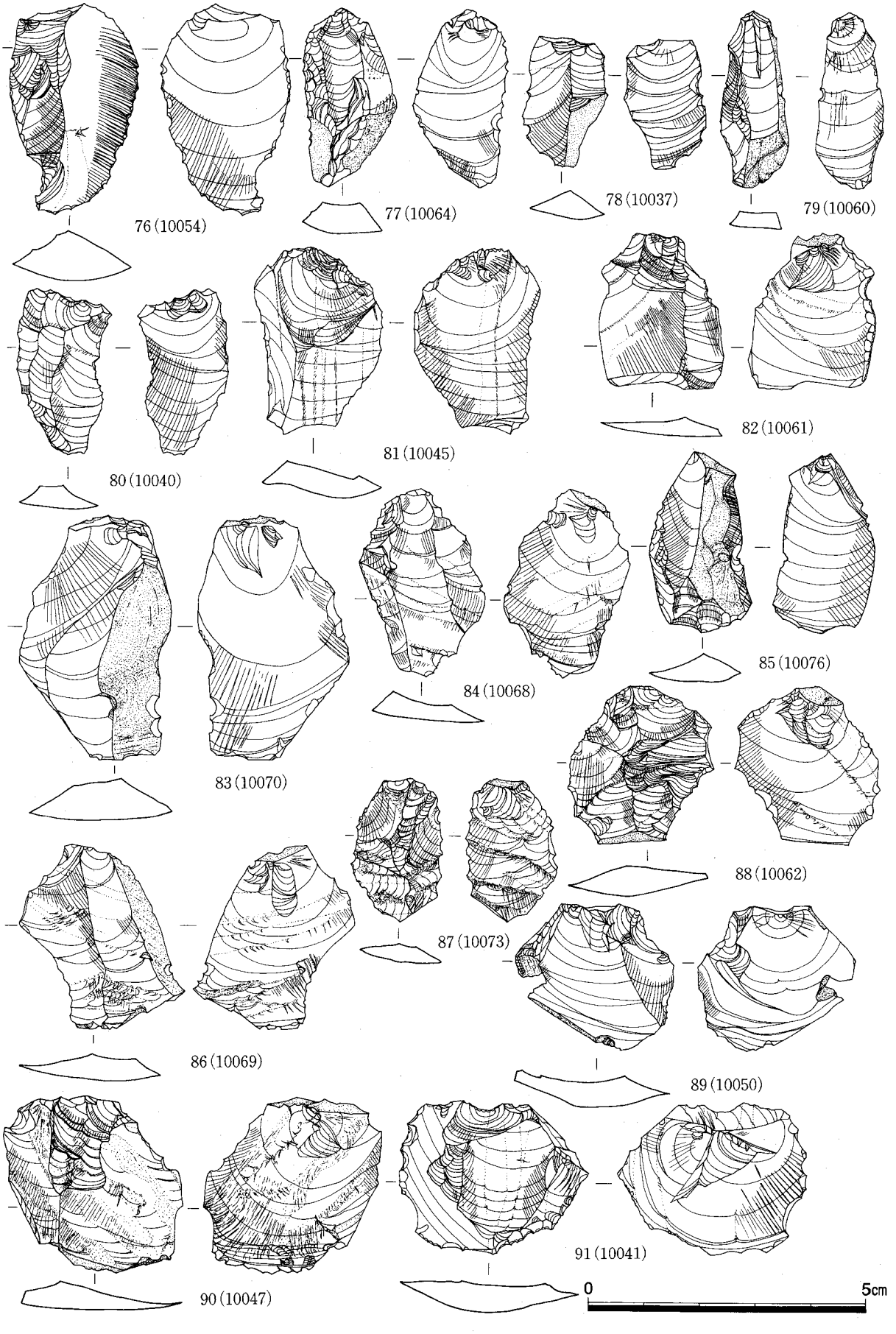


Fig. 49　遺構外出土石器実測図 (4) (縮尺1/1)

の一部・打面及び下端に自然面を残す。打面は平坦面で、側辺に二次加工を施す。SD-02からの出土である。

69 縞状に透明感のある黒耀石製縦長剥片で、側辺に若干の刃こぼれが認められる。打面は調整打面で、剥離は上方から行なう。表面に自然面を残す。Ⅱ区SK-26出土。 **70** 風化の著しい光沢がない黒耀石製縦長剥片で、両側辺に細かなリタッチが認められる。また新しい段階での剥離痕も観察できる。打面及び表面の半分は自然面が残る。剥離は上方向から行なう。SK-04出土。 **71** 透明度の高い黒耀石の縦長剥片で、表面の一部に自然面を残す。打面は調整打面で、側辺には使用痕が観察できる。剥離は上下二方向から行なわれている。遺構上面からの出土。 **72** 透明感のある細身の縦長剥片で、下端部に自然面が残る。両側辺には使用した痕跡が窺える。打面は調整打面で上方向からの剥離を行なう。Ⅲ区SD-10出土。 **73** 不純物の混じる風化の著しい縦長剥片で、打面及び下端に自然面を残す。打面は平坦で剥離は上方向から行なう。側辺に古い段階での使用痕と新しい段階での剥離が観察できる。透明感はあるが光沢のない黒耀石で、遺構検出面からの出土である。 **74** 打面及び下端部に自然面が残る縦長剥片である。打面は平坦で側辺に二次加工を施す。Ⅱ区SK-29出土。

75 光沢のある漆黒色の黒耀石を素材とする幅広の縦長剥片で、打面から左側上にかけて自然面を残す。打面は平坦をなし、剥離は上下二方向から行なわれている。側辺への二次加工は行なわれて入ない。SD-03出土。 **76** 透明感の高い光沢のある黒耀石製縦長剥片で、側辺に使用痕が認められる。打面は平坦で、剥離は二方向から行なわれている。上位が肥厚で末端部で薄くなる。オタマジャクシに似た形態を呈する。Ⅰ区遺構検出面より出土。 **77** 打面及び表面の一部に自然面を残す黒耀石製縦長剥片で、表面左側辺に二次加工を施す。打面は平坦で、剥離は上方向から行なう。Ⅱ区遺構検出面より出土。 **78** 表面の一部に自然面を残す縦長剥片で、側辺には使用痕が認められる。打面は平坦で剥離は上からの一方向である。SD-02出土。 **79** 自然面を有する細身の縦長剥片で、断面は台形を呈する。側辺にわずかな刃こぼれが認められるやや風化の進んだ黒耀石である。Ⅱ区SK-31出土。 **80** 透明度の高い光沢のある黒耀石の縦長剥片で、末端部に二次加工を施す。打面は平坦で打撃の際の剥離が認められる。剥離は上からの一方向である。SD-02出土。 **81** 透明度の高い黒耀石製縦長剥片で、末端部は表面からの加撃により折断されている。打面は自然面で細かな剥離調整を施す。剥離は上下からの二方向から行なわれている。遺構上面より出土。 **82** 幅広の剥片に左側辺の裏面から連続的に剥離調整を施し、刃部を作り出している。打面は自然面である。剥離方向は上方向から行なっている。Ⅱ区SK-31出土。 **83** 風化の著しい光沢のない黒耀石の縦長剥片で、両側辺に使用痕が認められる。打面は自然面で平坦を成す。剥離は上方向と斜め方向からの二方向である。Ⅲ区SD-08出土。 **84** 不純物の混じる黒耀石の縦長剥片で、側辺には使用痕が認められる。打面は自然面で平坦をなす。表面左上方に階段状剥離がみられる。剥離方向は上からの一方向である。Ⅱ区遺構検出面より出土。 **85** 打面及び表面に自然面を残す黒耀石の縦長剥片で、側辺に使用した痕跡が観察できる。打面は平坦で、剥離は上・下・横からの三方向から行なう。Ⅲ区遺構検出面より出土。

86 表面に二本の稜をもつ黒耀石の縦長剥片で、打面から右側面・末端部にかけて自然面を残し、二次加工は行なわれないものの剥片自体の鋭利さを側面部にもつ。剥離は上方向から行なっている。不純物が多く混じる剥片である。Ⅲ区SP-151出土。 **87** 不純物の多く混じる黒耀石の縦長剥片で、側辺部に使用痕が認められる。打面は自然面で平坦をなし、末端部は折断されている。剥離方向は上横の二方向から行なう。Ⅲ区SD-10出土。 **88** 打面・上端部に自然面を有する不純物の混じる黒耀石の剥片で、側辺部に使用痕が認められる。打面は平坦で、剥離は上・斜め上の二方向から行なう。Ⅱ区SK-31出土。 **89** 光沢のある黒耀石の横長剥片で側辺に使用痕が認められる。打面は平坦

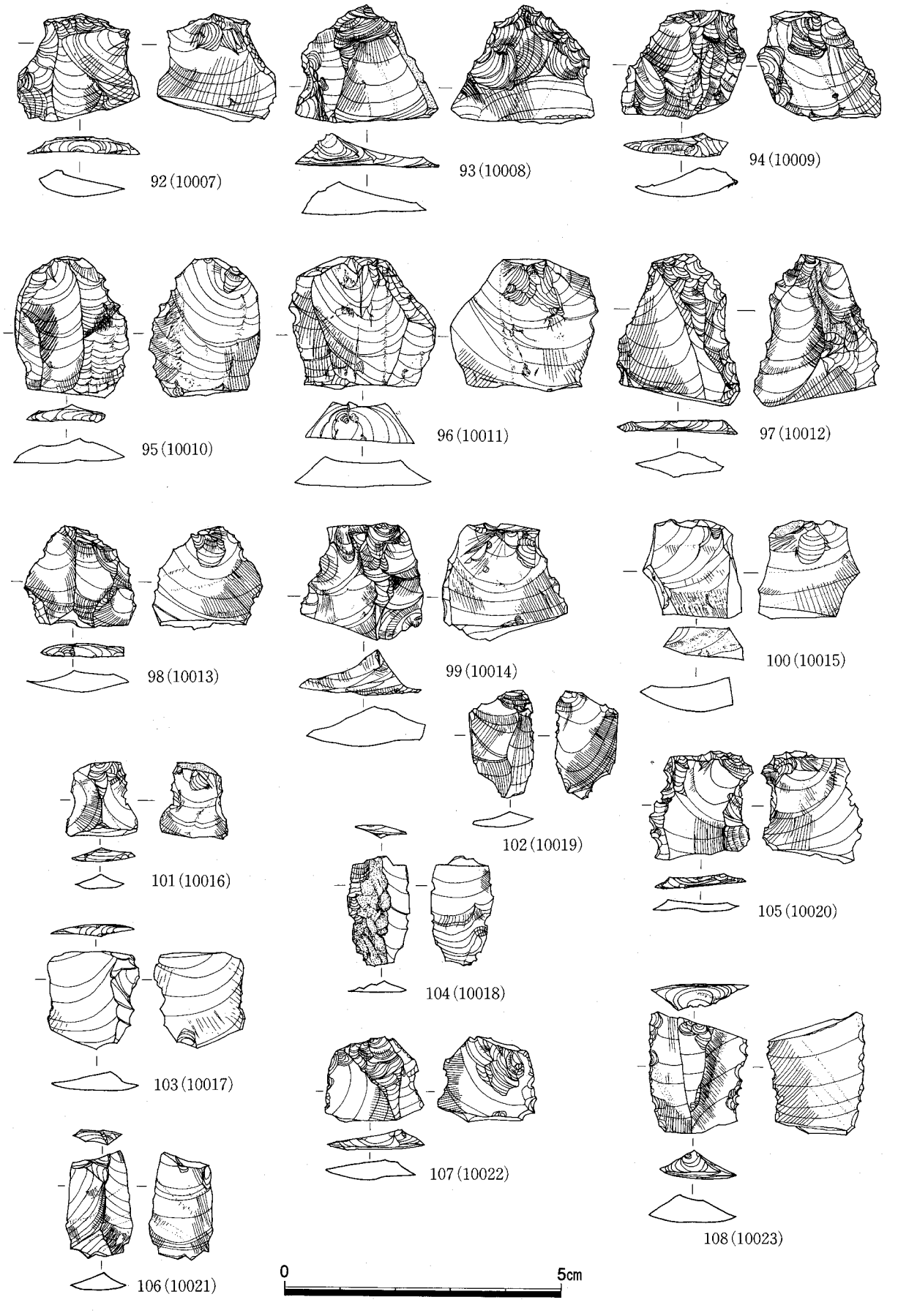


Fig. 50　遺構外出土石器実測図(5)(縮尺1/1)

で剝離は上・斜め上の二方向から行なう。Ⅰ区遺構検出面より出土。 **90** 打面及び末端部に自然面を有す剝片で、側辺に使用痕が観察できる。打面は平坦で、剝離は上方向から行なう。気泡・不純物の多く混じる黒耀石で、遺構検出面より出土。 **91** 光沢のある黒耀石の横長剝片で、下端右側に連続する細かな片面剝離を施す。打面は平坦で、剝離は上方向からが主である。SD-02からの出土である。

切断剝片・折断剝片 (Fig. 50-92～108, PL. 35-92-101, 36-102～108)

切断剝片の定義として素材の側辺部の両端か一部にノッチ状の剝離を加えて折取る方法を切断技法と称しているが、この技法により剝ぎ取られた剝片を切断剝片と呼び、ノッチ状の剝離を加えないで折取る方法を折断剝片として取り扱っている。切断剝片は92, 93, 94, 97, 98, 101, 105～107の9点である。 **92** 裏面の下部右側面に片面からの連続的な細かな剝離を行ない、表面からの加撃により折取る切断剝片である。打面は細かな剝離を持つ調整打面である。表裏面ともフィッシャーとは別のヒビ状の線が観察出来る。SD-02からの出土。 **93** 下部を裏面からの加撃により折断する剝片で側辺に二次加工が認められる。打面は調整打面で、やや風化した黒耀石である。区遺構検出面より出土。 **94** 右側面に二次加工を加え下部を表面からの加撃により折取った切断剝片である。打面は平坦で上方向からの剝離を行なう。やや風化した黒耀石で若干の不純物を含む。SD-02出土。 **97** 下部側面に片方からの二次加工を加え下端部を裏面からの加撃により折取られた切断剝片である。打面は平坦で剝離後細かな剝離を行なっている。裏面の一部に自然面が残る。Ⅱ区遺構検出面より出土。 **98** 風化がかなり進んだ黒耀石で、右側辺部に二次加工を加え下端部を表面からの加撃により折取った切断剝片である。打面は階段状の剝離面を持つ調整打面で、剝離方向は上からである。Ⅰ区SP-23から出土した。 **101** 下端部の両側面から二次加工を加え裏面からの加撃により折取った切断剝片で、打面は自然面である。剝離方向は三方向からなる。Ⅰ区遺構検出面より出土。 **105** 101と同じく下端部の両側面から二次加工を加え裏面からの加撃により折取った切断剝片で、表面の両側辺部に稜を持つ剝片で、サイド・ブレイドの可能性もある。打面は平坦で、剝離は上方向からの一方向からなる。やや風化した黒耀石である。 **106** 上部に裏面から二次加工を加えた後、表面からの加撃により折取った切断剝片である。 **107** 素材の中央部に両側辺に二次加工を加え、裏面からの加撃により折取った切断剝片である。打面は平坦で、SD-02から出土した。

折断剝片は95, 96, 99, 100, 102, 103, 104, 108の8点である。 **95** 下部を表面からの加撃により折取った折断剝片で、側辺の使用痕が残る。打面は平坦で、不純物の混じる黒耀石で遺構検出面より出土。 **96** 不純物の多く混じるやや風化した黒耀石で、下端部を表面からの加撃により折取った折断剝片である。側辺に若干の刃こぼれが認められる。打面は平坦で、剝離方向は一方向からである。SK-04出土した。 **99** 下端部を裏面からの加撃により折取った折断剝片で、裏面左側辺に急角度の調整を行なっている。打面は平坦で、上方向からの剝離のみである。断面は三角形を呈する。やや風化の進んだ黒耀石である。Ⅱ区遺構検出面より出土。 **100** 不純物の多く混じる黒耀石で、下端部を裏面からの加撃により折取った折断剝片である。打面は調整打面である。Ⅱ区遺構検出面より出土した。

102 縦長の剝片で、側辺部への二次加工は認められない。下端部を折取っている。打面は小さく調整打面であり、表面に階段状剝離が認められる。やや風化の進んだ黒耀石で、Ⅲ区SD-10からの出土である。 **103** 剝片の打面側を裏面からの加撃により折取った折断剝片で、風化の著しい黒耀石で、側辺への二次加工は認められない。剝離方向は一方向からである。Ⅱ区遺構検出面より出土。

104 剝片の打面側を折断する。表面に自然面を残す。側辺への二次加工は認められない。サイド・

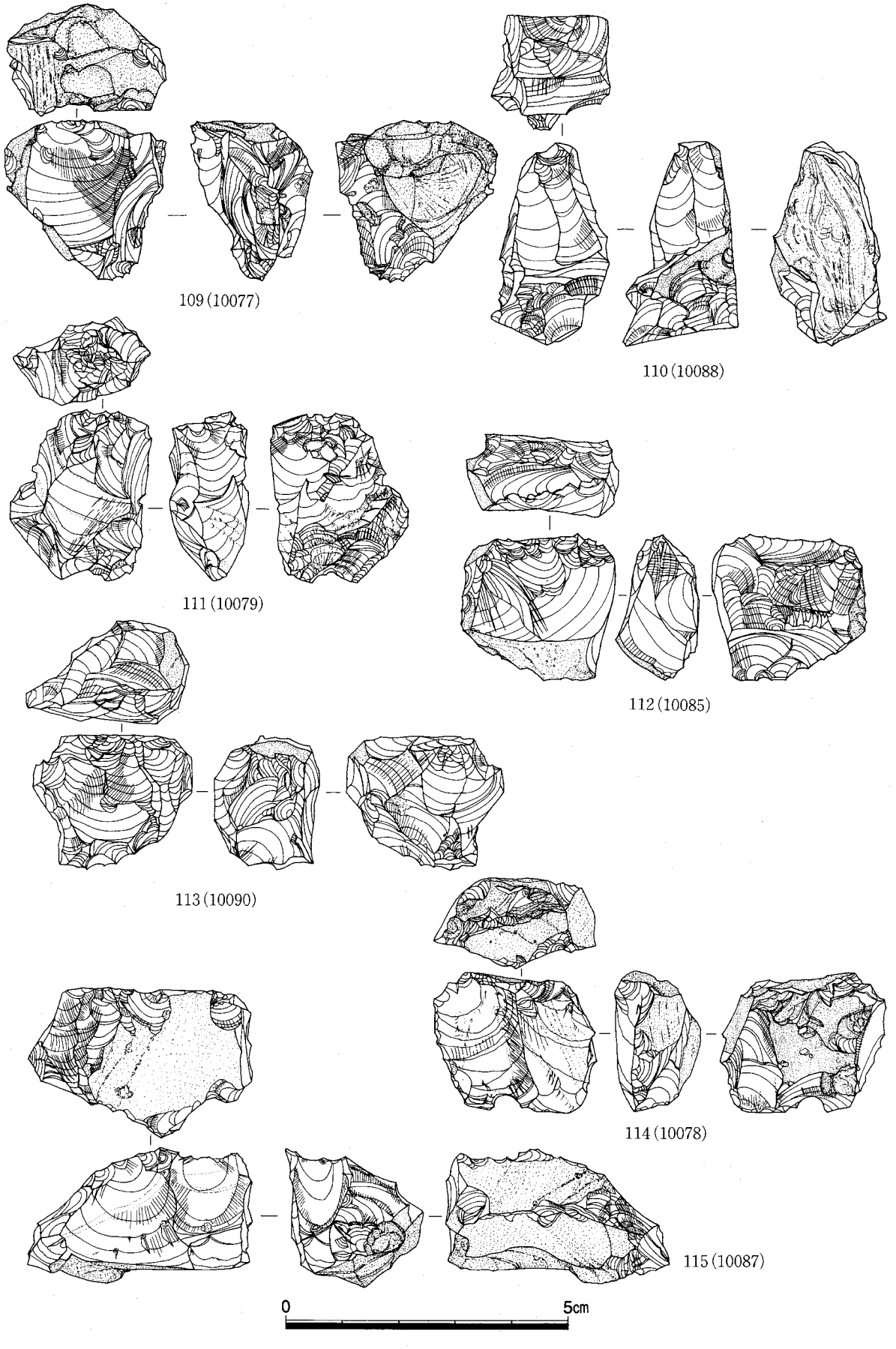


Fig. 51　遺構外出土石器実測図(6)(縮尺1/1)

ブレイドの可能性が高い剝片で、SK-12から出土した。 **108** 上下端を裏面からの加撃により折取った折断剝片で、両側辺部に二次加工を加えていることからサイド・ブレイドの可能性が高い剝片で、やや風化が進んでいる黒耀石である。Ⅲ区SD-10より出土した。

石核 (Fig. 51・52-116～121, PL. 36-116～121)

黒耀石製石核14点を図示した。形態的に四つに区分できる。1．打面は自然面とし上・横からの剝離方向を持つ109タイプ。2．打面は調整打面で、上下二方向の剝離方向を持ち、素材の縦長方向を剝離する110タイプ。3．2のタイプと同様の特徴を持つが、横方向の剝離（側面調整の剝離）を持つ111, 117, 118, 119, 121のタイプ。4．2のタイプと同様な剝離技術を持つが、素材を横長に使用し、剝離する剝片も横長の剝片が主体となる112. 113. 116. 120のタイプがある。この中で縦長剝片を剝取できる石核は110. 117. 118. 121の4点で、120の裏面にも一部縦長剝片を剝取した痕跡をもつが、これが側面調整によるものか連続的に剝離する方法によるものかは不明である。他の石核は、横長剝片を剝取する石核であり、115のように縦長からの剝離方向ではなく、横方向に利用した石核109. 112. 113. 114. 116. 120と最も多い。

109 打面は自然面で、大まかな剝離で側面を調整した段階で終了している。側面は横・下位からの剝離が認められる。 **110** 打面は平坦で二方向の剝離面によって形成され、剝取の際の調整は認められない。裏面は自然面で、下方からの剝離が認められる。表面の剝取は主に上からのものであるが、側面観でも明らかなように階段状剝離がみとめられることから下位からの剝離によってこの階段状剝離を排除しようとする意図が窺える。この石核は形態的には鈴桶技法に近い形状をしめすが、基本的にはまったく異なるものである。 **111** 打面は細かな剝離を主体とする調整打面である。表・裏面の剝取方向は上・下・横位の三方向を有する。自然面をまったく排除した石核であり、裏面の下位には細かな剝離が認められることから上下両方からの剝離を行なう形態を示し類似鈴桶技法である。 **112** 上記の3点とは異なり素材の原石を横長にした石核である。下位と側面に自然面を有し、側面調整により折断している。打面は二条の剝離面をもつ平坦打面で表面に剝取の為の剝離を行なっている。 **113** 打面は一方向からの四条からなる剝離面による調整打面で、調整のため細かな剝離が認められる。自然面が打面右側辺に残っているだけですべて剝離されている。表・裏面観の観察では上・下二方向による剝離が認められる。とくに表面の大まかな剝離は上からの剝離が主体であるのに対し、裏面は上・下二方向の剝離が主体と成っている。側面の剝離は下位・横位からの剝離である。

114 打面は自然面であるが、調整のために細かな剝離がある。表面は上方向からの二条の剝離面が認められ、裏面では下位からの剝離をもつ。 **115** 素材の原石を横長に使用し、側面と表面の二個所から剝取している。打面は自然面であるが、一部裏面方向からの剝離が見られるがこれ自体は打面調整ではない。表面の剝離面は自然面で剝取する段階で細かな調整を行ない剝取する方法をとる。裏面は自然面である。この横形にセットする石核は石の剝離（石の目とよばれるもの）からくるのか、剝離しやすい形態から原因が発生しているのかは明らかにできないが、110のように原石を縦に利用するものもあることから原石の目によるものかもしれない。 **116** 打面は二条の大きな剝離によって平坦面を形成するが剝取の際に細かな調整を行なう。側面は横位からの剝離が認められ、裏面は自然面である。表面は上・横位の二方向から剝取しているが原石を横形に使用していることから縦長の剝片は取れにくく横長の剝片が主体を占めている。 **117** 原石を縦長に使用したもので、打面は僅かしか残っていない。裏面は大きな剝離が認められることから面を再生するため剝離された石核側面再生剝片と考えられる。打面は細かな剝離を加えた調整打面である。表面は縦長剝片が剝離された痕跡を残し、打撃方向は上方向である。側面には横・下位からの剝離が認められる。

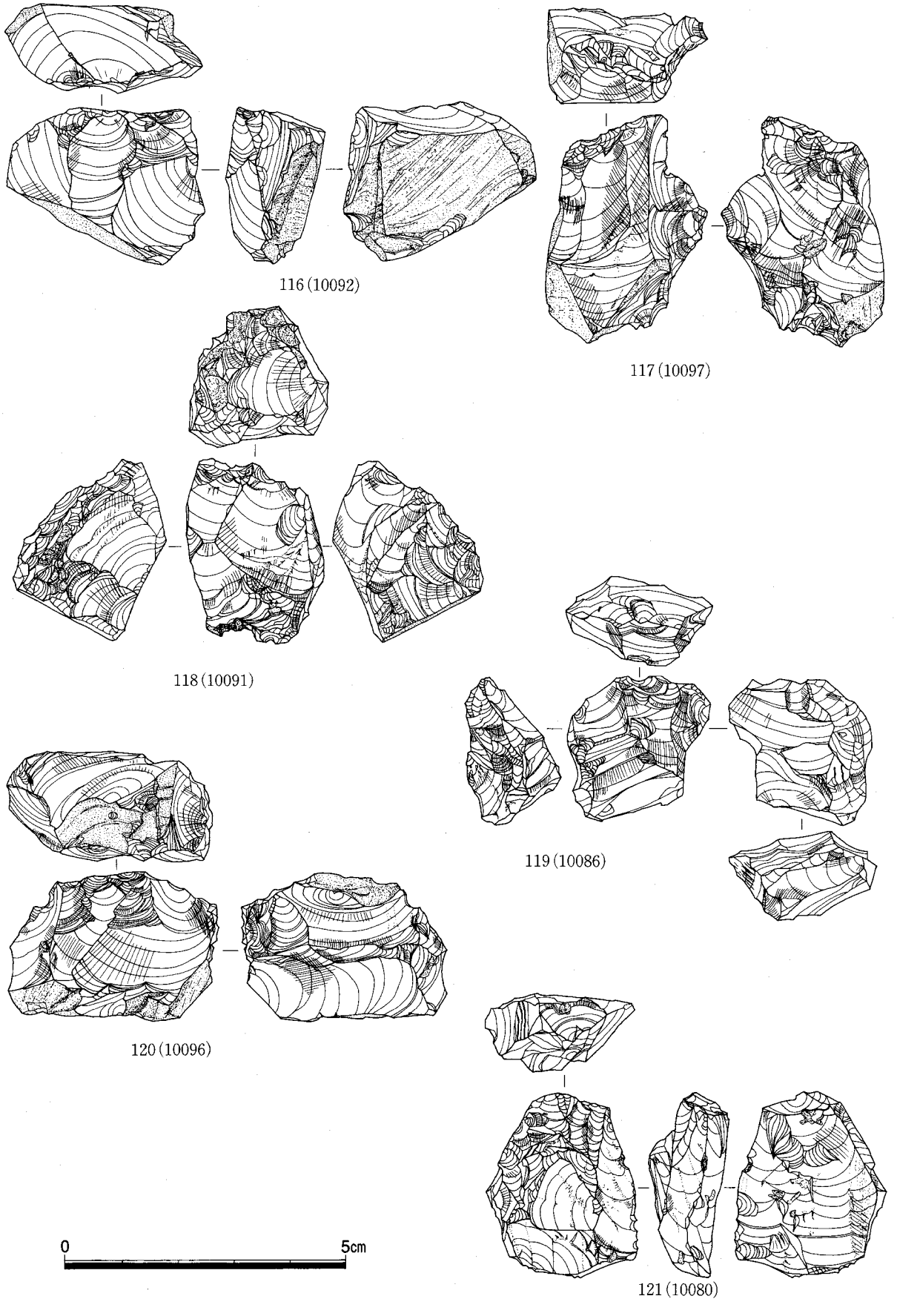


Fig. 52　遺構外出土石器実測図 (7) (縮尺1/1)

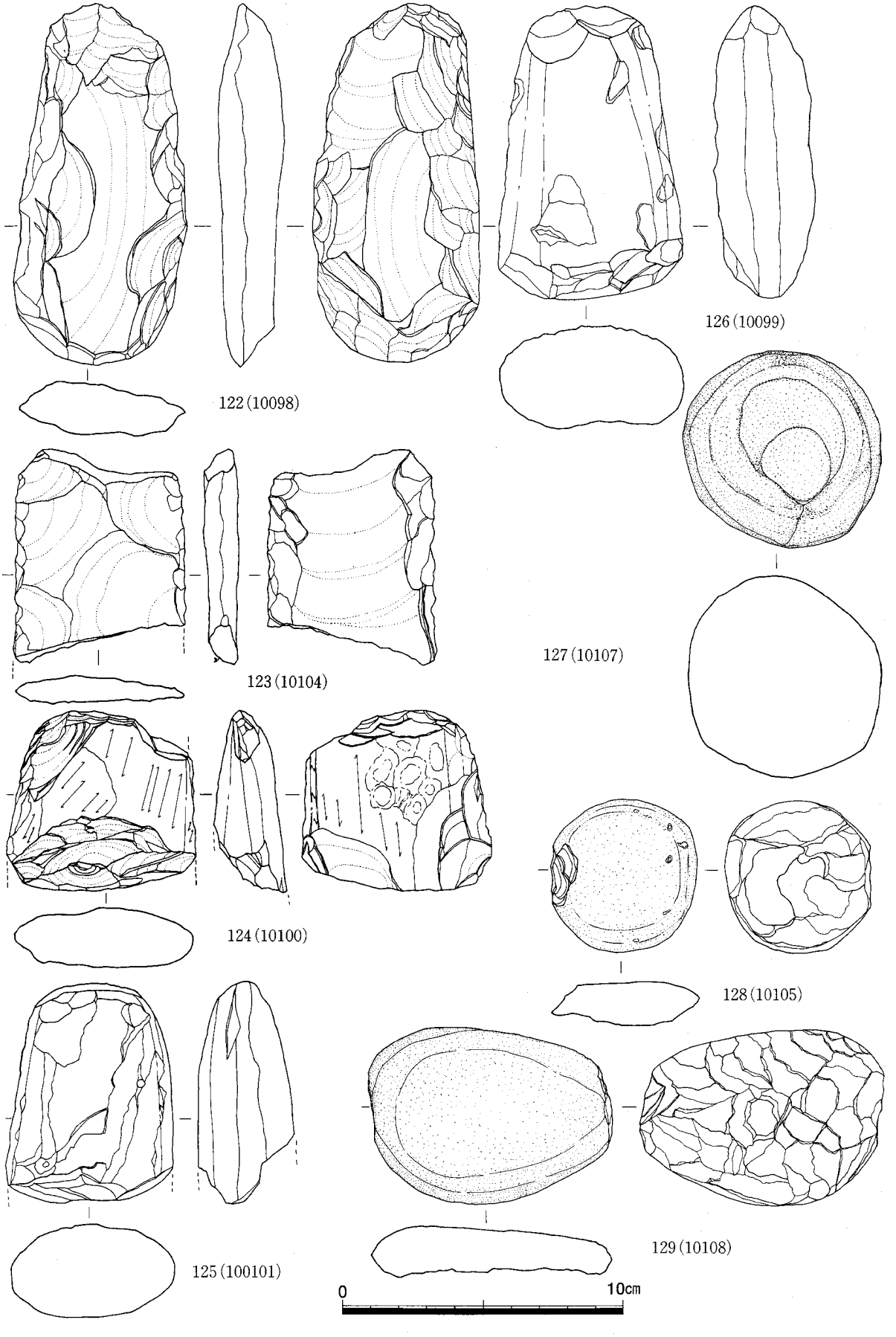


Fig. 53　遺構外出土石器実測図(8)(縮尺1/2)

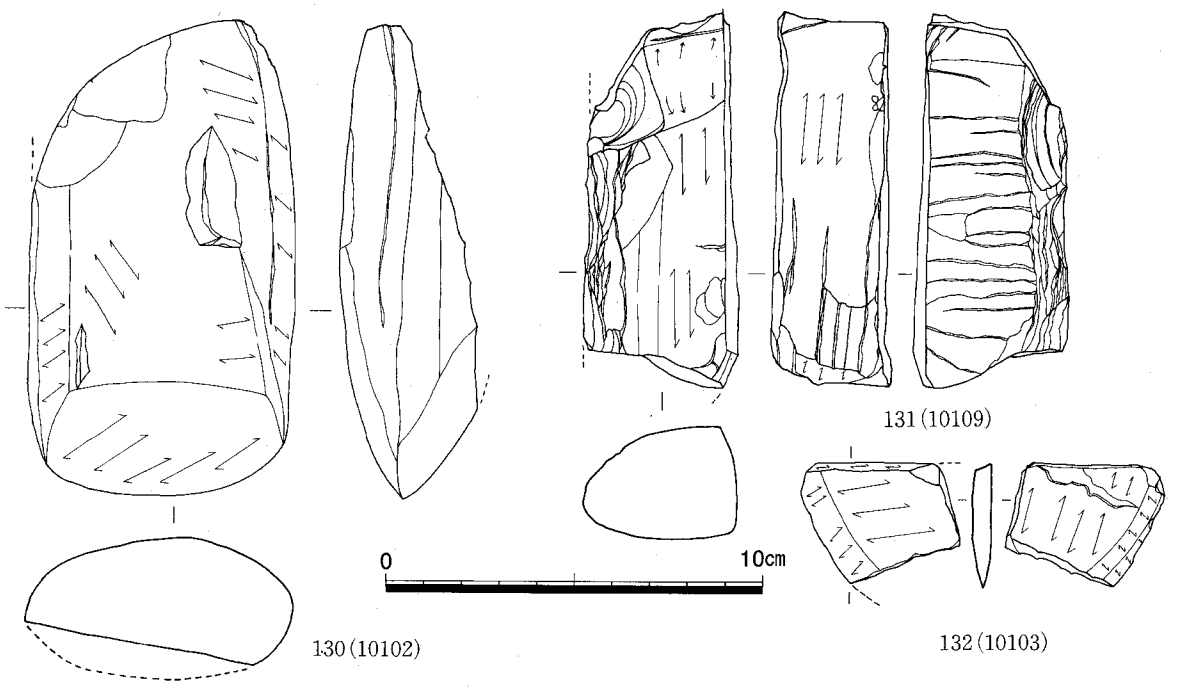


Fig. 54　遺構外出土石器実測図(9)(縮尺1/2)

118　側面の形態は船底型石核に類似する石核であり、打面は右横側面から一条の剝離によって形成されている。両側面の上端部には細かな剝離が施されている。左側辺は下位からの剝離が主体をしめ、右側辺は上からの剝離面によって形成されている。表面は横長剝片を剝離した痕跡を残すがすべて上位方向からの剝離である。裏面に自然面を一部残す。　**119**　打面が小さく僅かに残っている程度で二条の剝離によって形成される。表面の打撃方向は上からの一方向のみで、裏面は上・下の二方向をもつ。下部にも剝離面をもち平坦面を形成しているが、これからの剝離は認められない。

120　原石を横位に使用した石核で、打面は自然面に調整を施し剝取する調整打面である。表面観から横長の剝片を剝取した痕跡をもつ。裏面には横方向からの剝離によって縦長の剝片を剝取している。　**121**　裏面の状態から側面再生剝片である。打面は一条の平坦面である。上・下・横位方向の剝離面が認められる。

打製石斧（Fig. 53-122, 123　PL. 37-122）

122　安山岩製の打製石斧である。両面に素材の横剝ぎの剝離面を有し、周辺部に二次加工を加えている。刃部は完全な形態とは言い難く未製品の部類に入るものである。　**123**　扁平な縦剝ぎの剝片の両側辺部に二次加工を加えただけののもで、上下が欠損しているため明確には石斧とは判断できない。断面から石鎌的要素も含まれている。122と同様、安山岩製である。

磨製石斧（Fig. 53-124～126　PL. 37-124～126）

124　安山岩製の磨製石斧である。中央部から刃部にかけて欠損する。断面から肉厚の石斧である。**125**　凝灰岩製の磨製石斧で、これも刃部を欠損している。研磨方向は不明確である。重量のある肉厚の石斧である。　**126**　閃礫凝灰岩製の磨製石斧で、刃部が丸みを持つ形状を呈する。重量も3点の内最も重いものと思われ、使用頻度が高い。SD-10より出土。

磨石（Fig. 53-127　PL. 37-127）

127　輝緑凝灰岩製の円礫を打烈と研磨によってこのような状態の磨石となったと思われ、端部に打撃痕も残っている。Ⅲ区 Pit 内より出土した。

石錘（Fig. 53-128, 129　PL. 37-128, 129）

128　安山岩製の石錘である。裏面を剝ぎ取り厚さを調整している。片面だけに凹みを施している。

129　128と同様に安山岩製の石錘で、裏面を剝ぎ取り厚さを調整している。両側面に僅かな凹みを有し石錘としている。

磨製石斧（Fig. 53-130　PL. 37-130）

弥生時代の遺物と考えられる物で、玄武岩製の磨製石斧である。全面に研磨が施されて断面V字状を呈する。先端部と裏面が欠損している。SD-06からの出土である。

柱状抉入片刃石斧（Fig. 53-131　PL. 37-131）

刃部・先端部が欠損する。僅かに抉入部が残るが、その形状から小型の柱状抉入片刃石斧であることが判明できた。硅岩製でⅢ区遺構検出面より出土。

石庖丁（Fig. 53-132　PL. 37-132）

凝灰岩製の石庖丁である。全体の2/3が欠損しているが、全面を丁寧な研磨で仕上げている。遺構検出面より出土した。

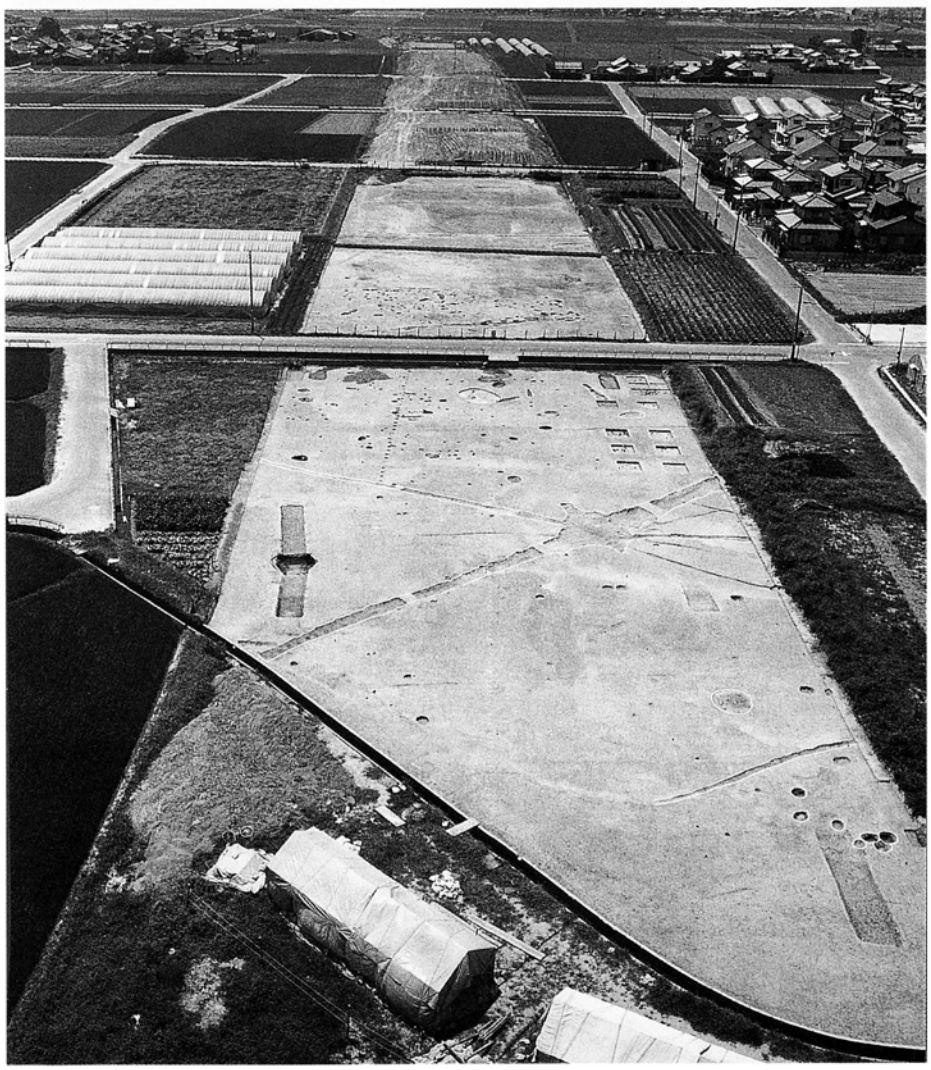
（大庭友子）

Ⅲ　おわりに

今回の調査では糸島平野の東縁にあたり、大規模な遺跡はなく、小規模な遺跡が微高地上に点在する中の一つであった。周船寺遺跡群は冲積微高地の先端に立地する遺跡でその規模は大きくはない。縄文時代晩期の包含層を検出したが、土器が集中するのは５ｍ四方位でほかの地点は散在的な出土状態である。遺構の掘り方は検出出来なかったが溜り状の遺構あるいは住居跡の可能性もある。石器も黒耀石製の石鏃を始め削器、掻器、縦長剥片等が出土している。包含層の時期としては古閑式の新しい形態であろう。近接する千里シビナ遺跡では同様の冲積微高地に三万田式以降の包含層が確認され、小規模ながら縄文時代後期から冲積地への進出が行われたことがいえる。この時期に続く弥生時代前期前半の遺構は検出出来なかったが前期後半の甕棺群がある。計８基の小規模な墓地で板付Ⅱ式並行期の甕棺である。調査区の北側に墓域はさらに拡がりそうであるが、増えたとしても全体でも10基前後の規模と考えられ、この時期の一般的な在り方を示している。甕棺で棺として使用する土器は日常品の転用で、下棺には大部分が長胴化した壺を用い口縁部を打ち欠いている。上棺には同様な壺か鉢を使用している。甕棺の副葬品には１号甕棺から管玉が２点出土しただけでほかにはない。

弥生時代前期には土壙や遺構検出時に少量の土器の破片は出土しているが遺構は認められない。中期になると円形や楕円形等の不定形土壙が30基検出出来た。Ⅱ区からⅢ区にかけての調査区内では最も高い地点に集中している。今回の調査では住居跡は検出出来なかったが、今回調査した土壙群が集落のどの位置にあたるのか、あるいはその土壙の性格は如何なるものであるのか、住居跡が検出てきればある程度の推測が可能であろう。しかし集落は付近に存在するのか、調査地点で削平を受けたものであろう。大部分の土壙は少量の土器の破片しか出土していない。その中で20号土壙は三日月形で浅い丹塗研磨の壺形土器が多く何らかの祭祀用の土壙であることには異論無いであろう。住居跡、墓地等はなく、周辺の遺構では掘立柱建物がその南に２棟見られることからそれと結び付ける他は考えが浮かばない。掘立柱建物の１棟は１間×２間で倉庫と考えられ、もう１棟は３間×４間の側柱のみの建物で倉庫の可能性はなく他の用途を考えなければいけない。近年大型掘立柱建物が各地で報告されているがそれらは大集落で、その地区の拠点集落であることから祭祀あるいは首長者層の居館などが考えられているが、小集落のこのような建物でも同様な用途とするには無理があろうか。

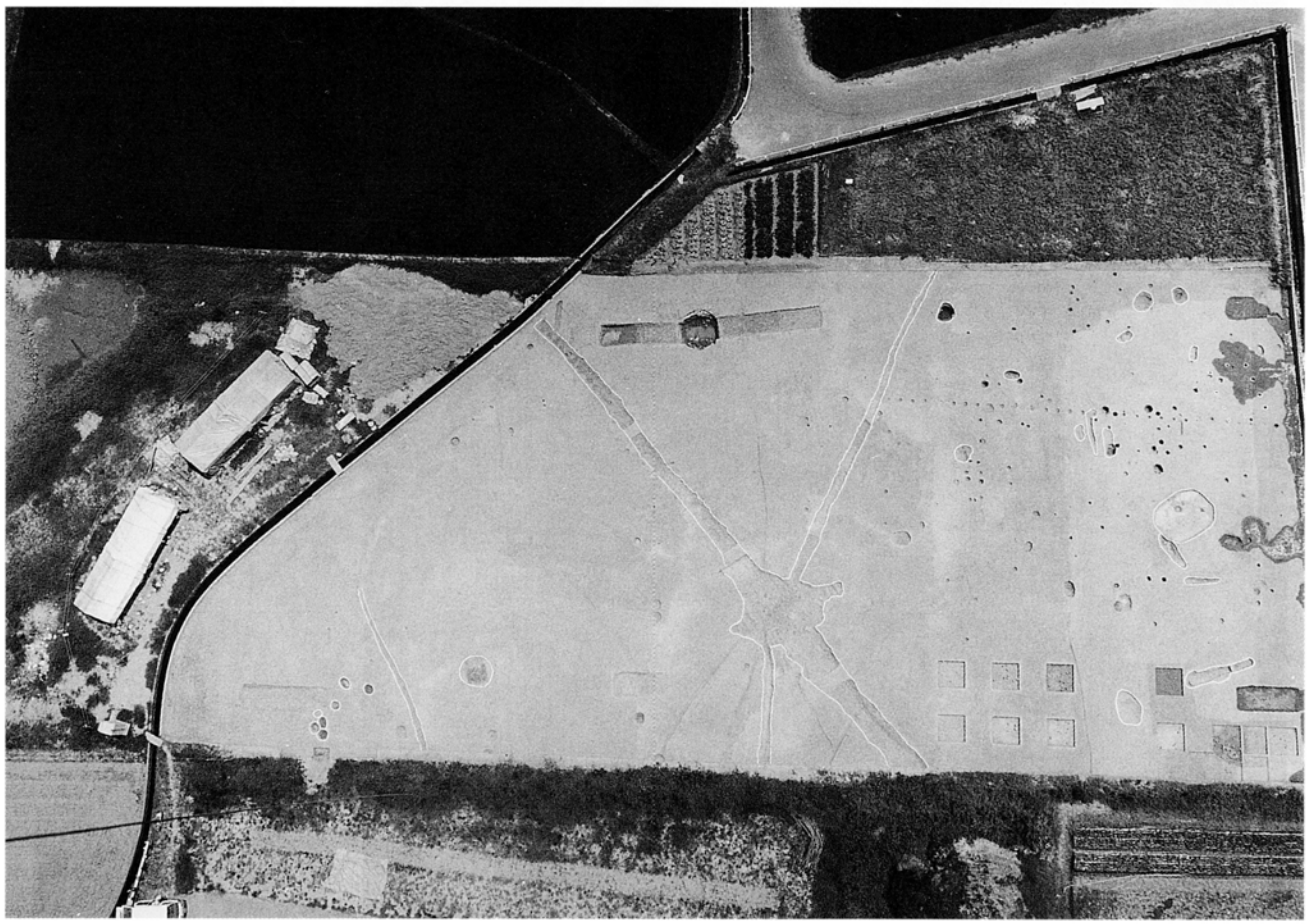
図　　版



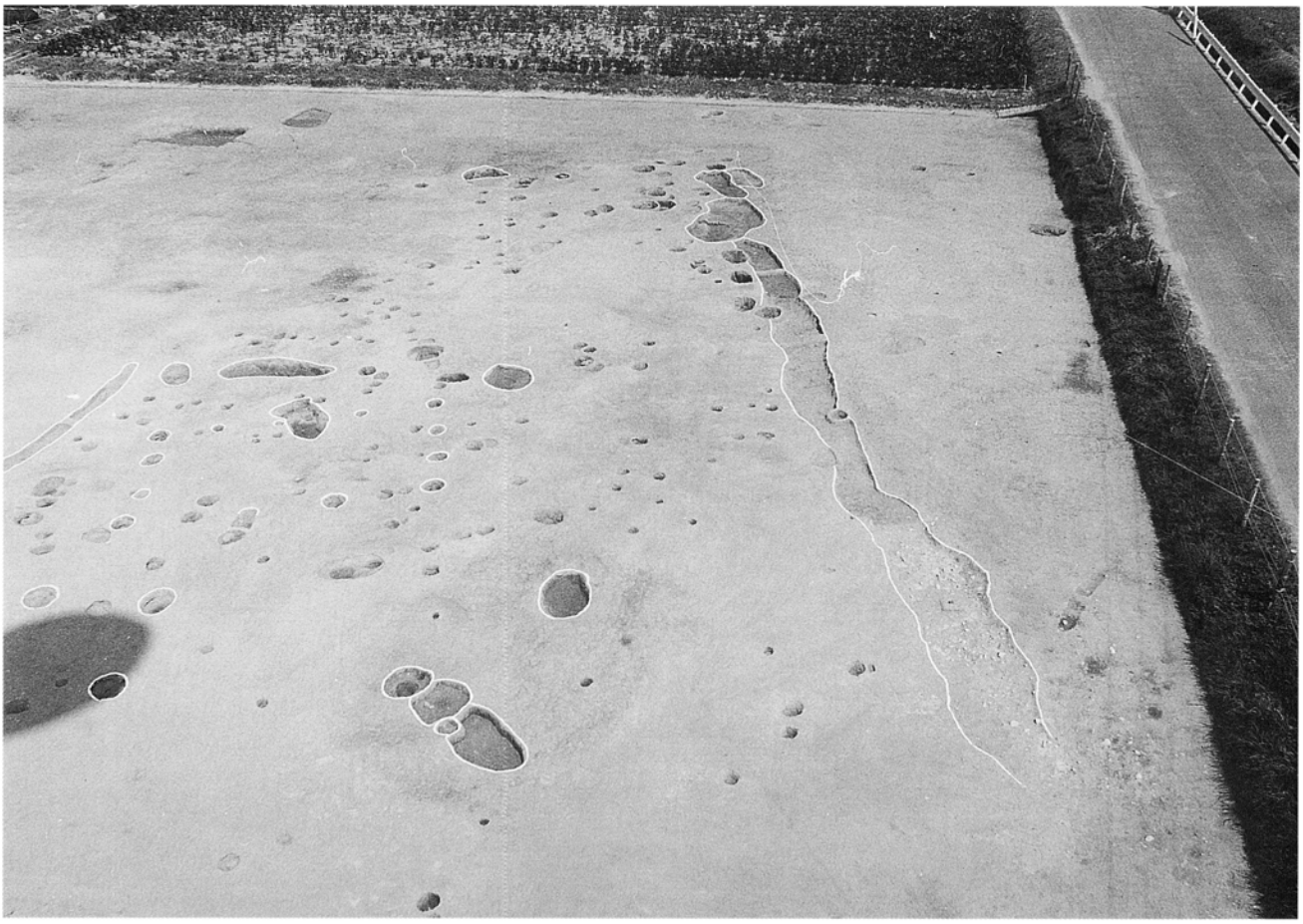
（下）遺跡全景（東より）
（上）遺跡遠景（飯氏遺跡より）

(1) 調査区全景

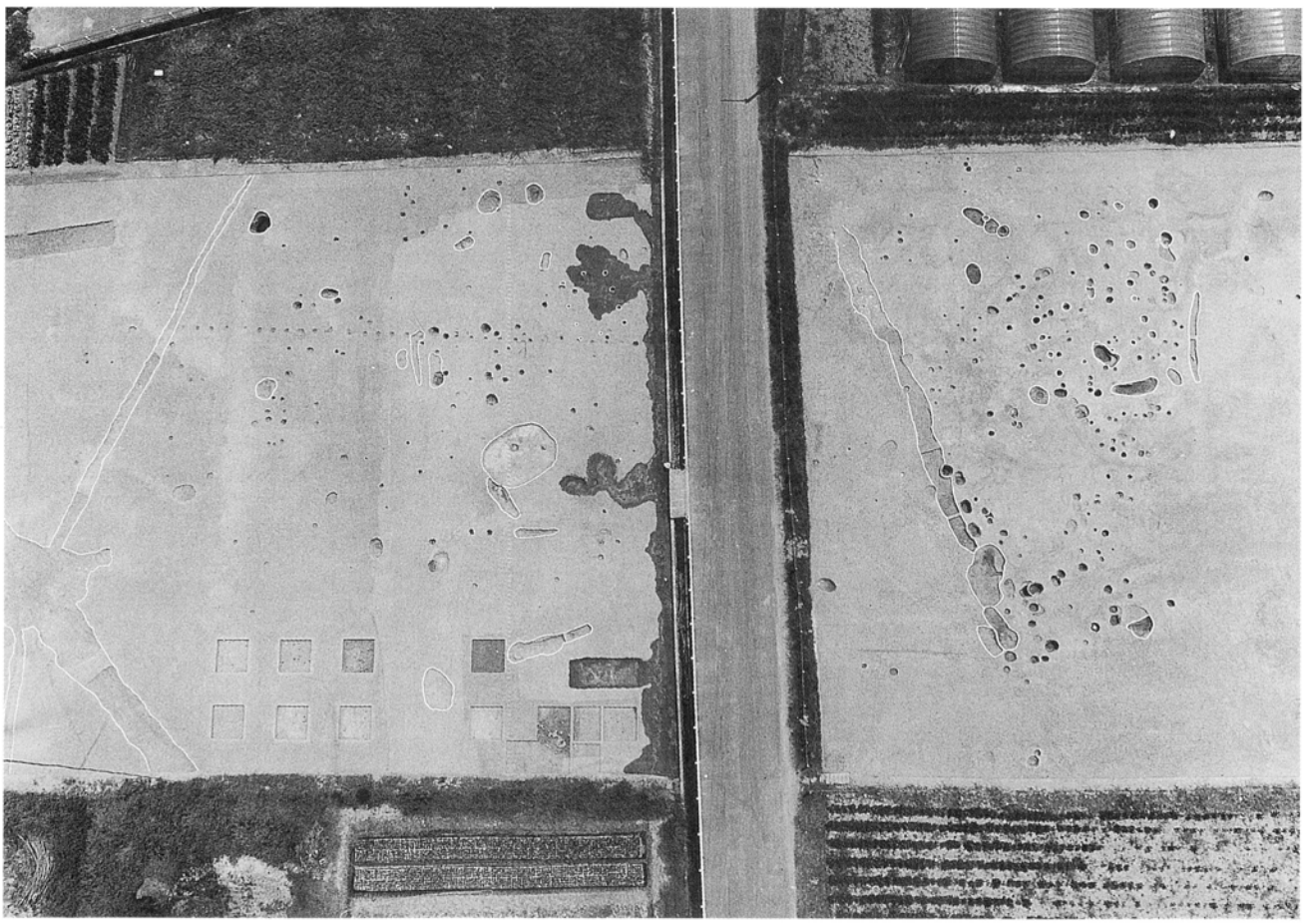
(2) Ⅰ区全景



(1) Ⅱ区全景

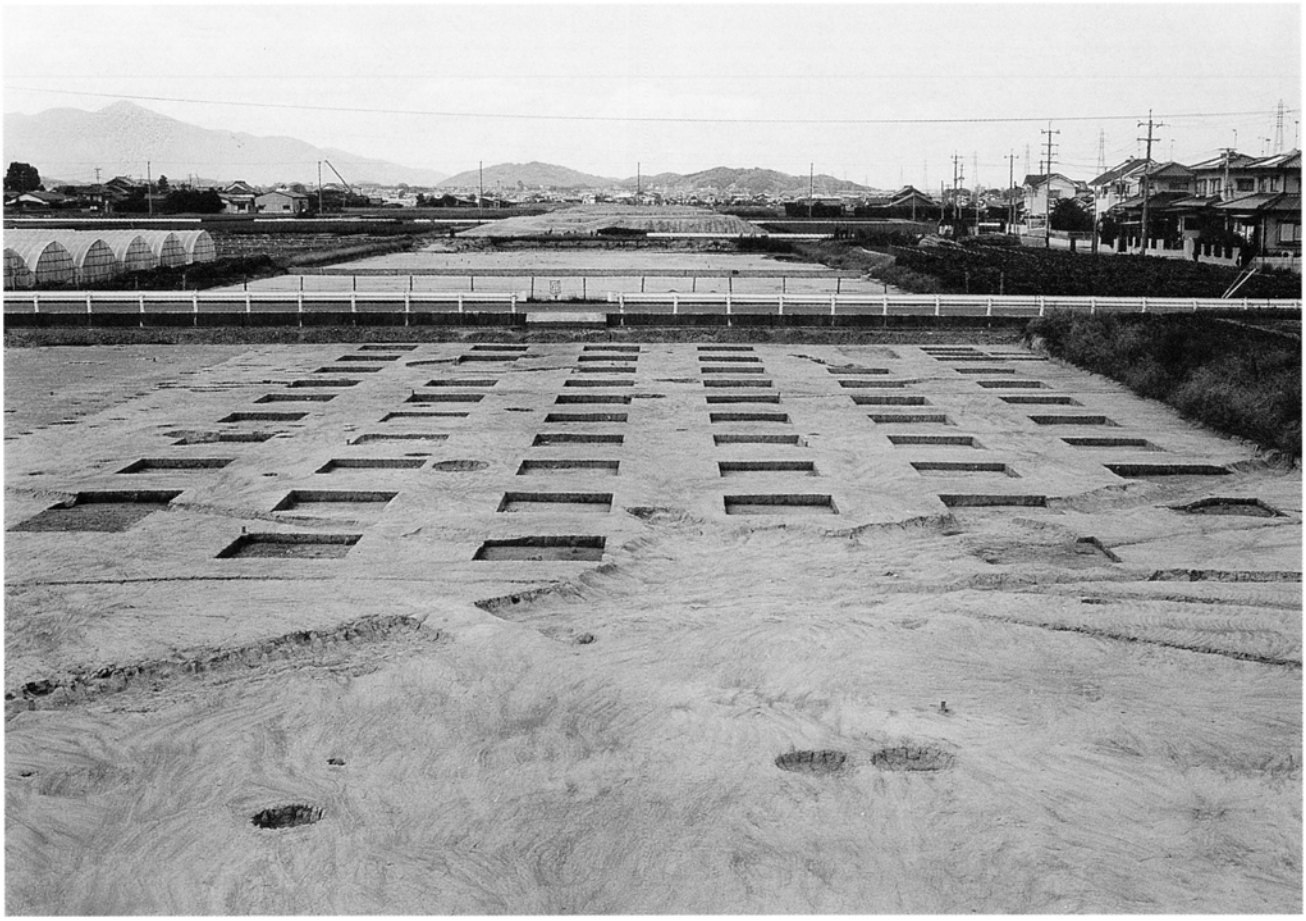


(2) Ⅰ、Ⅱ区全景

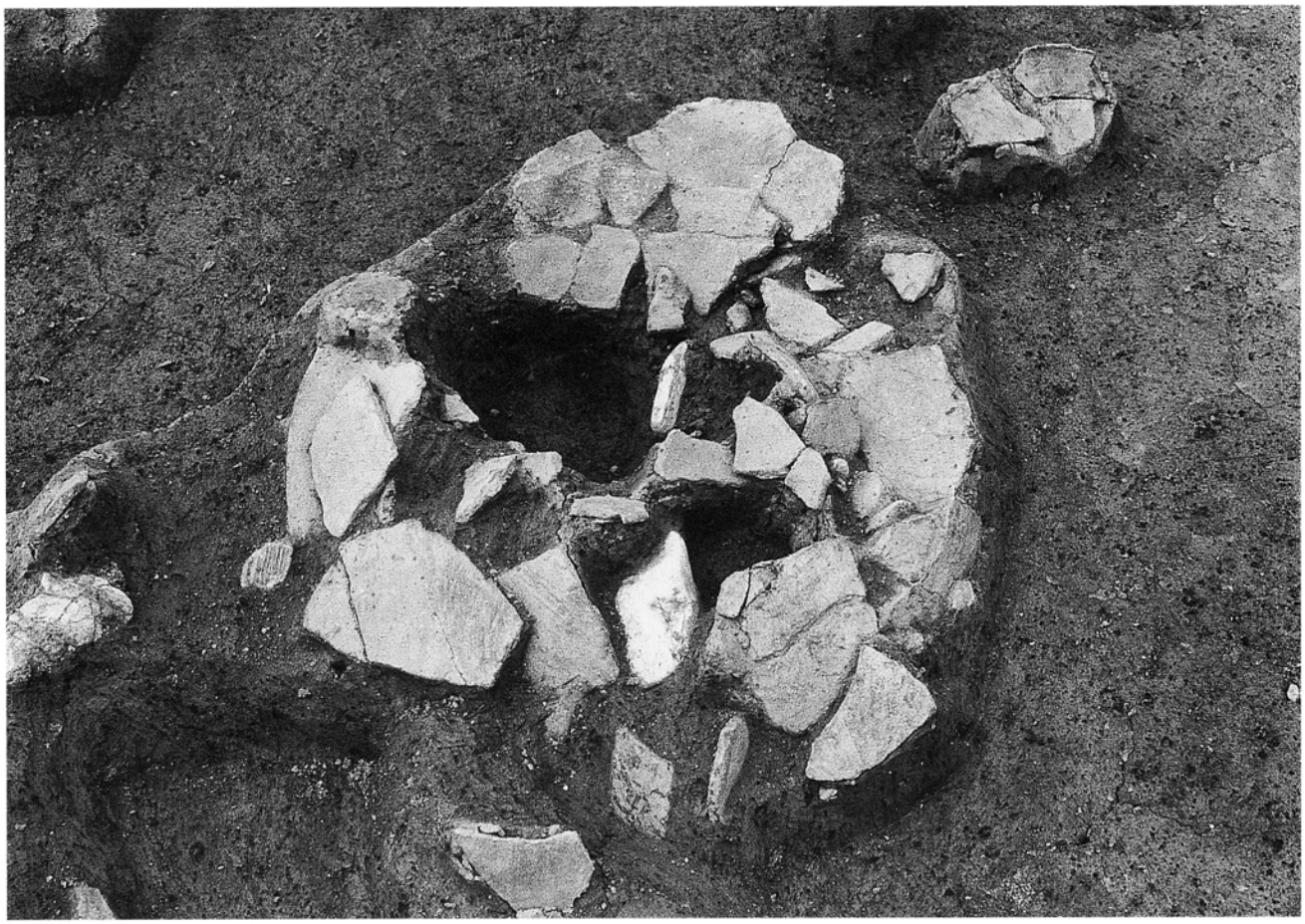


(1) Ⅲ区全景

(2) 縄文時代包含層調査区全景

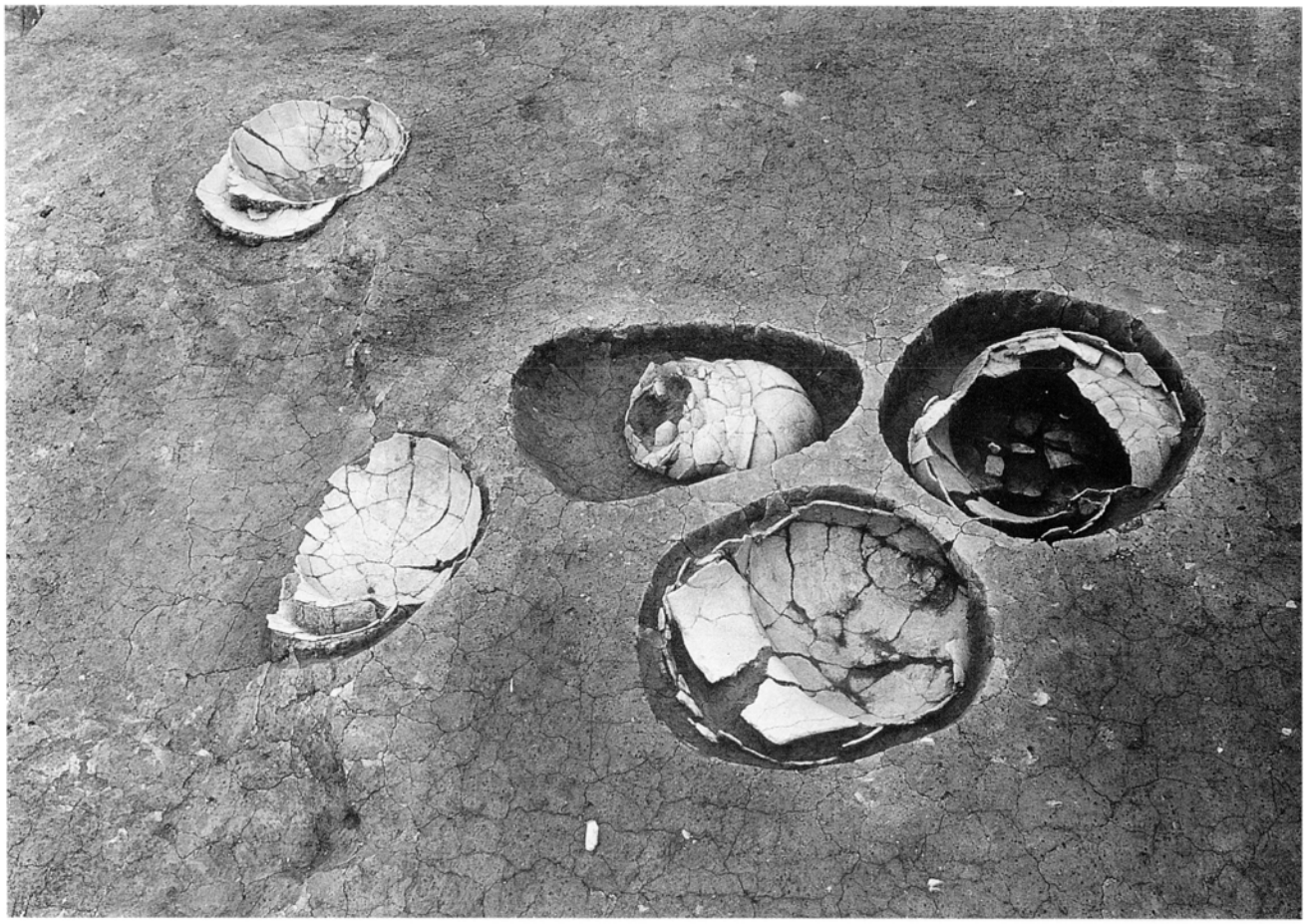


(1) 縄文式土器出土状況

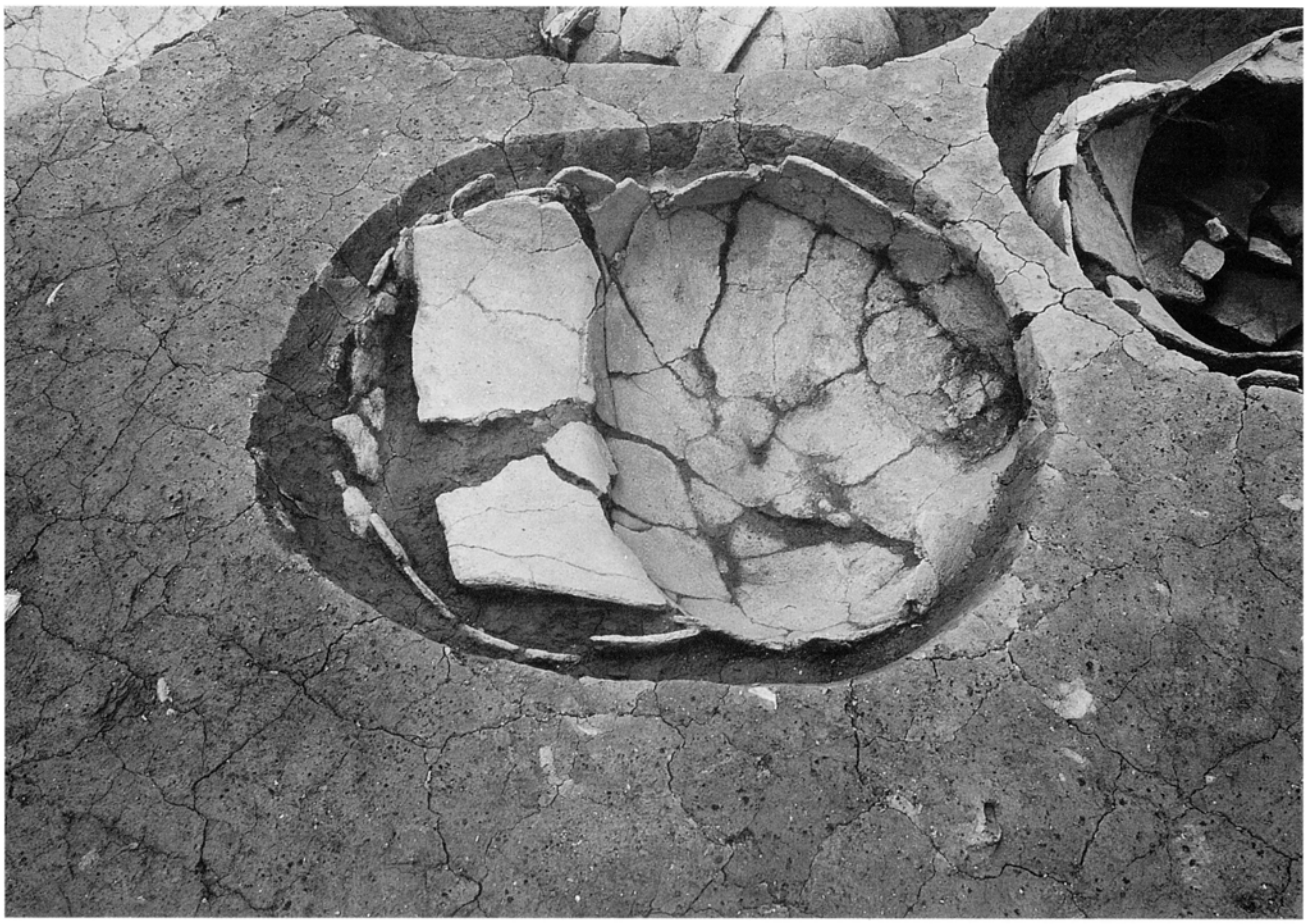


(2) 甕棺群全景（東から）

(1) 甕棺（1～5号）出土状況（東から）



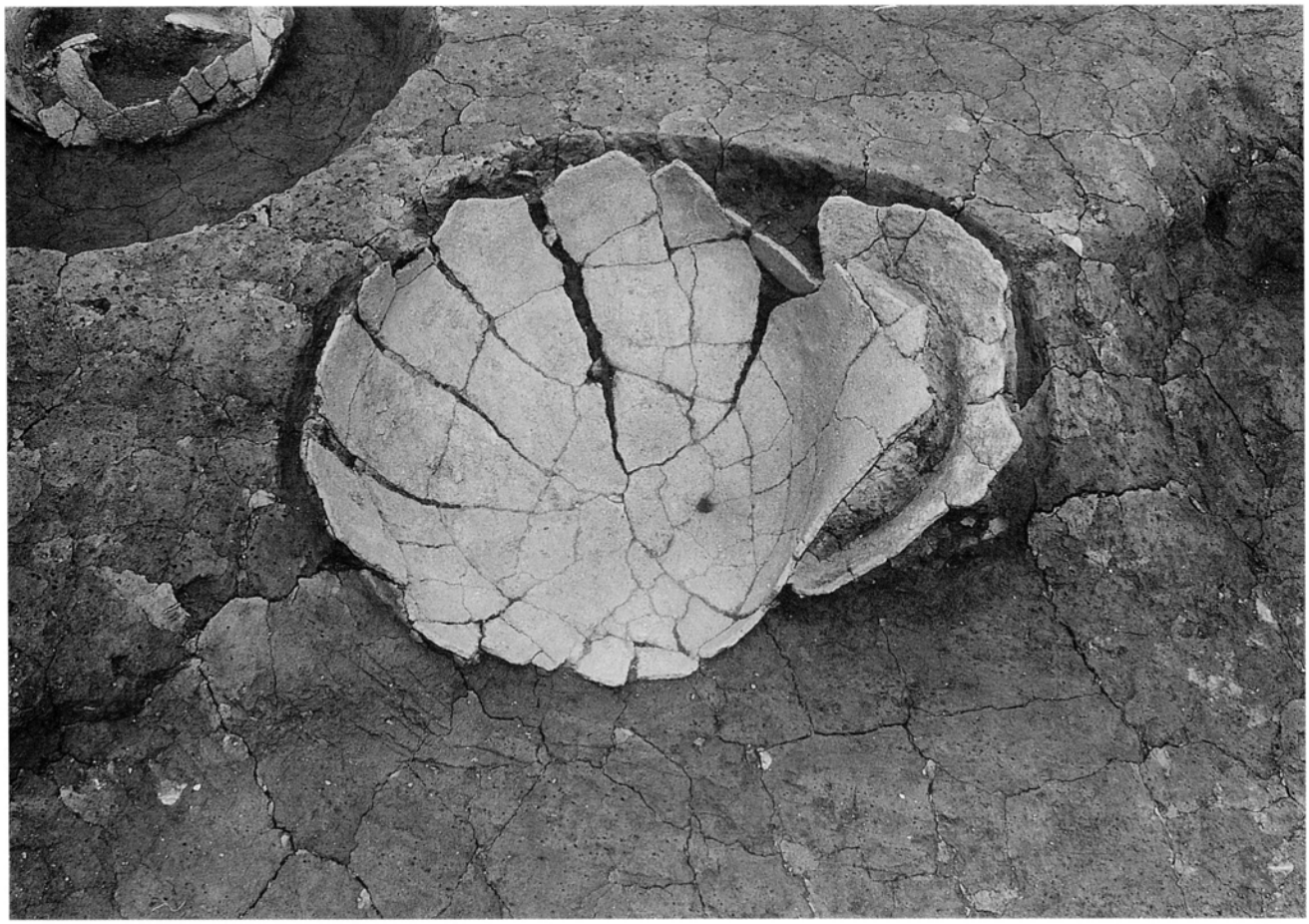
(2) 1号甕棺出土状況（東から）



(1)　2号甕棺出土状況（東から）

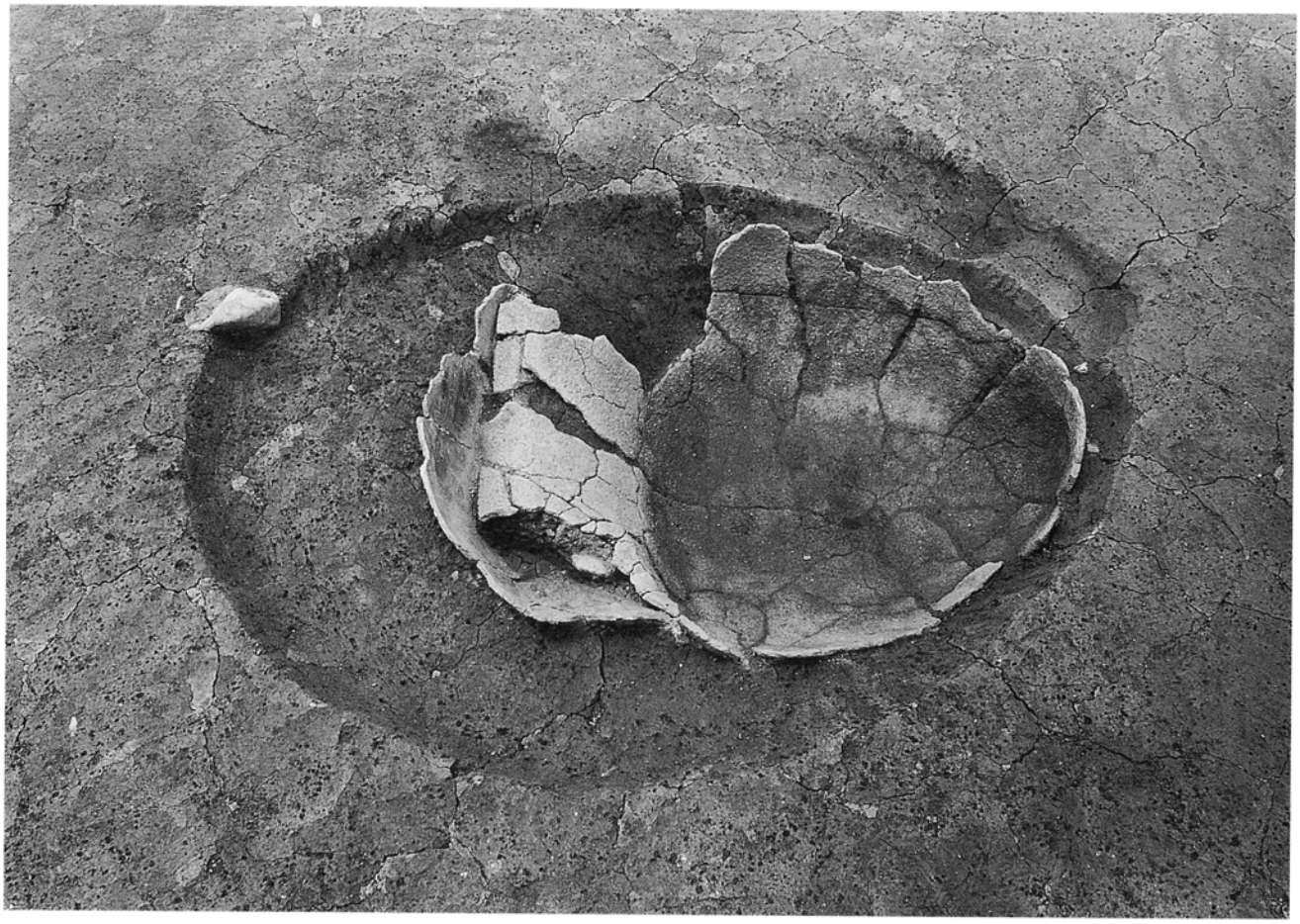
(2)　3号甕棺出土状況（北から）

(1)　4号甕棺出土状況（南から）



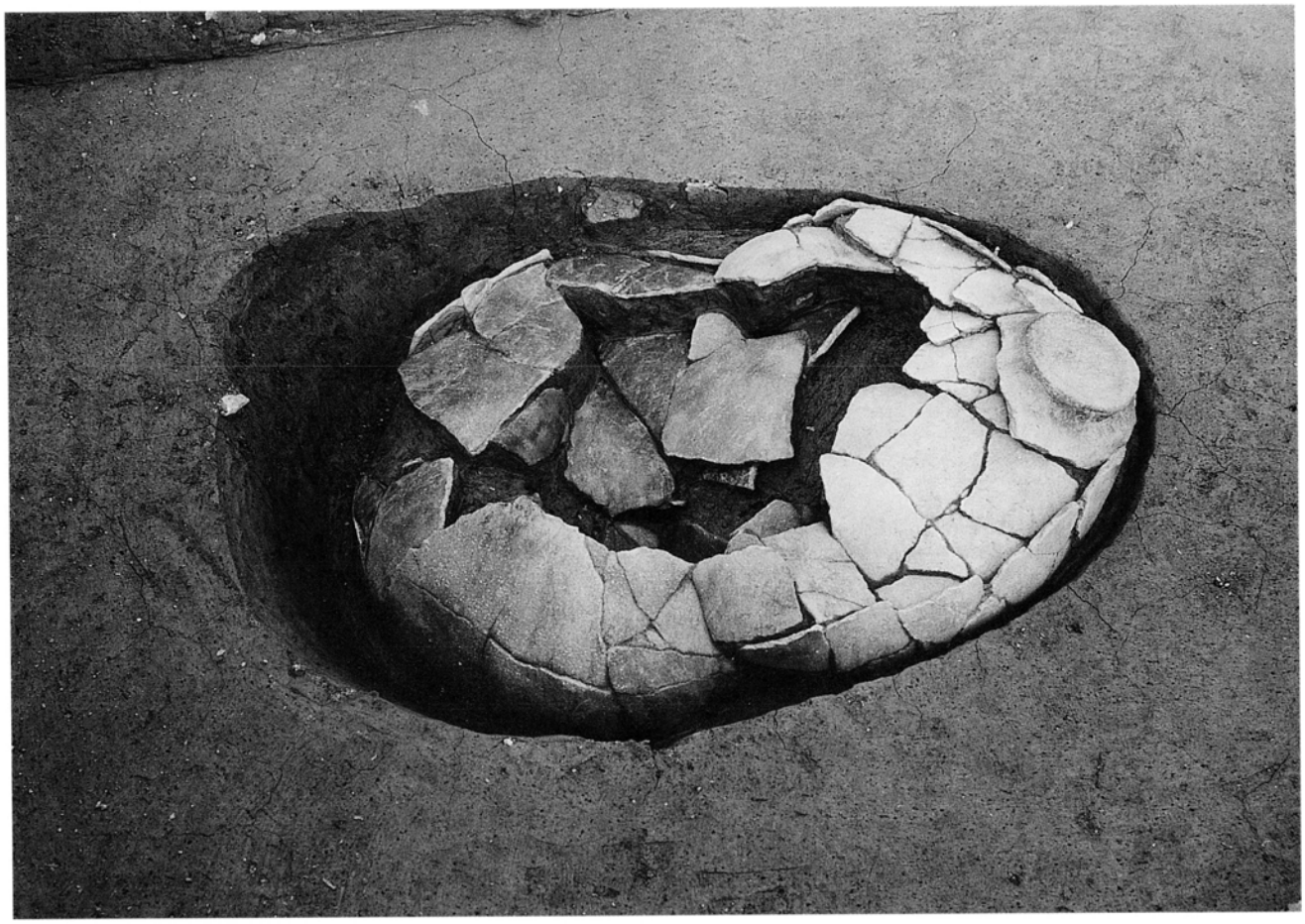
(2)　5号甕棺出土状況（東から）

(1)　6号甕棺出土状況（東から）



(2)　7号甕棺出土状況（東から）

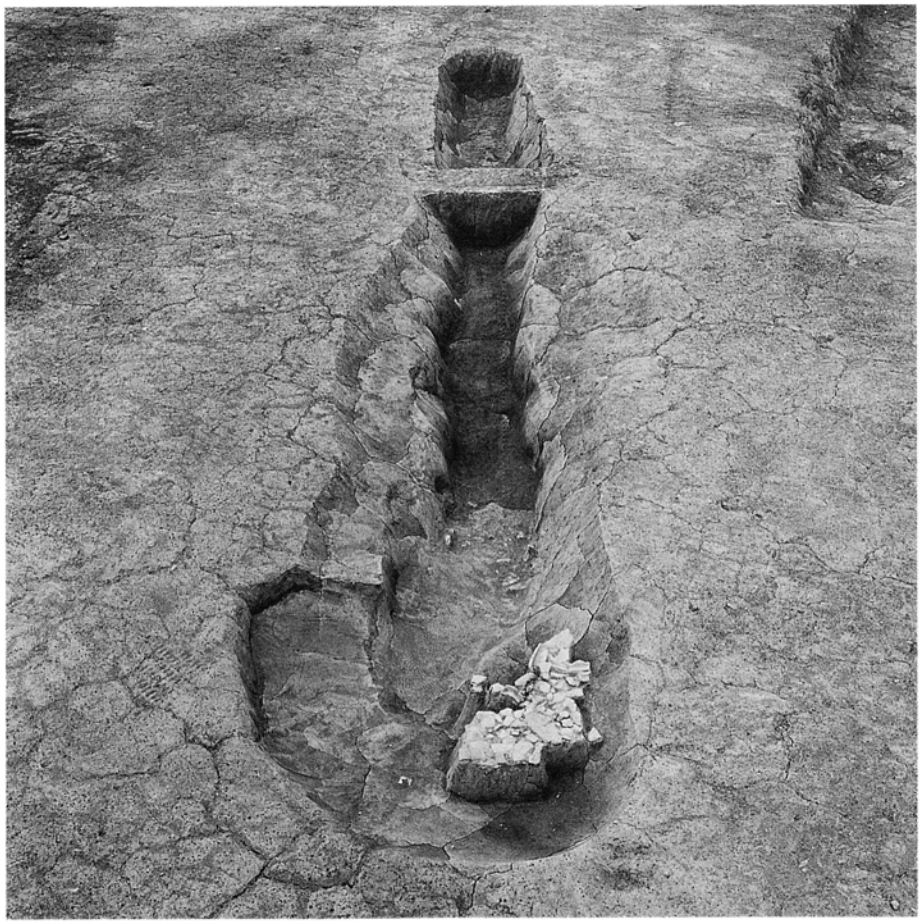
(1)　8号甕棺出土状況（南西から）



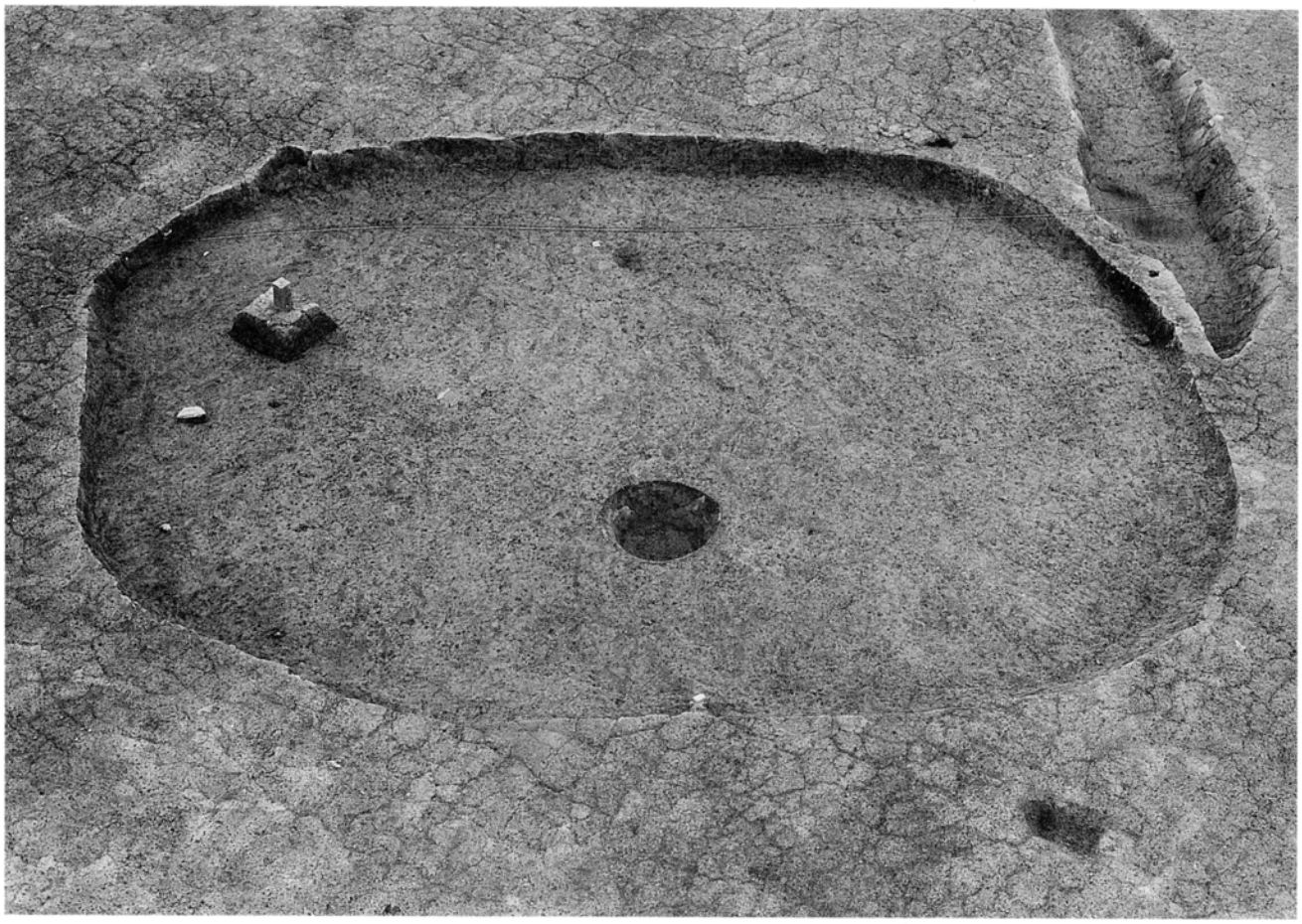
(2)　2号土壙（東から）

(1)　2号土壙遺物出土状況

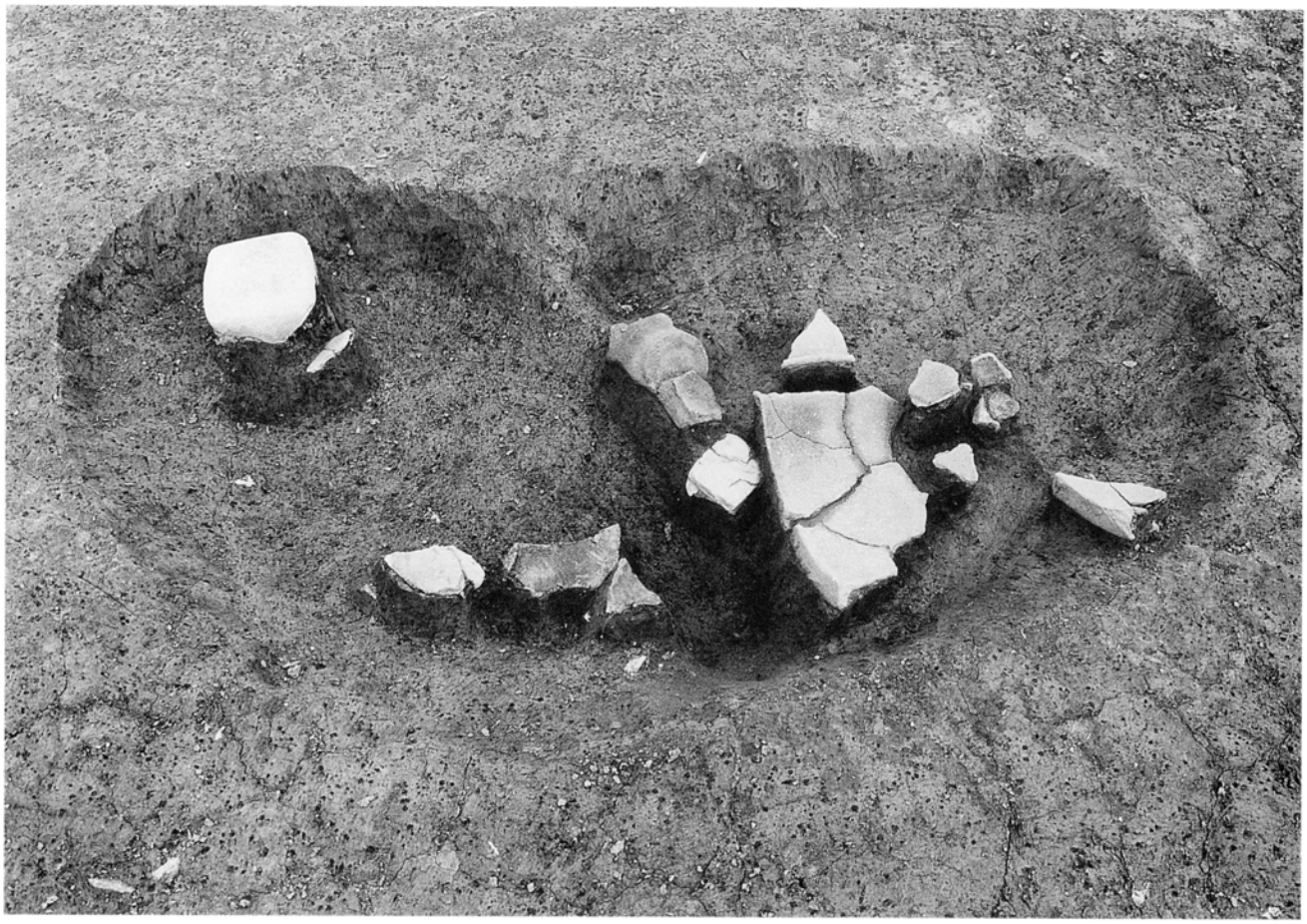
(2)　3号土壙（東から）



(1) 4、5号土壙（東から）

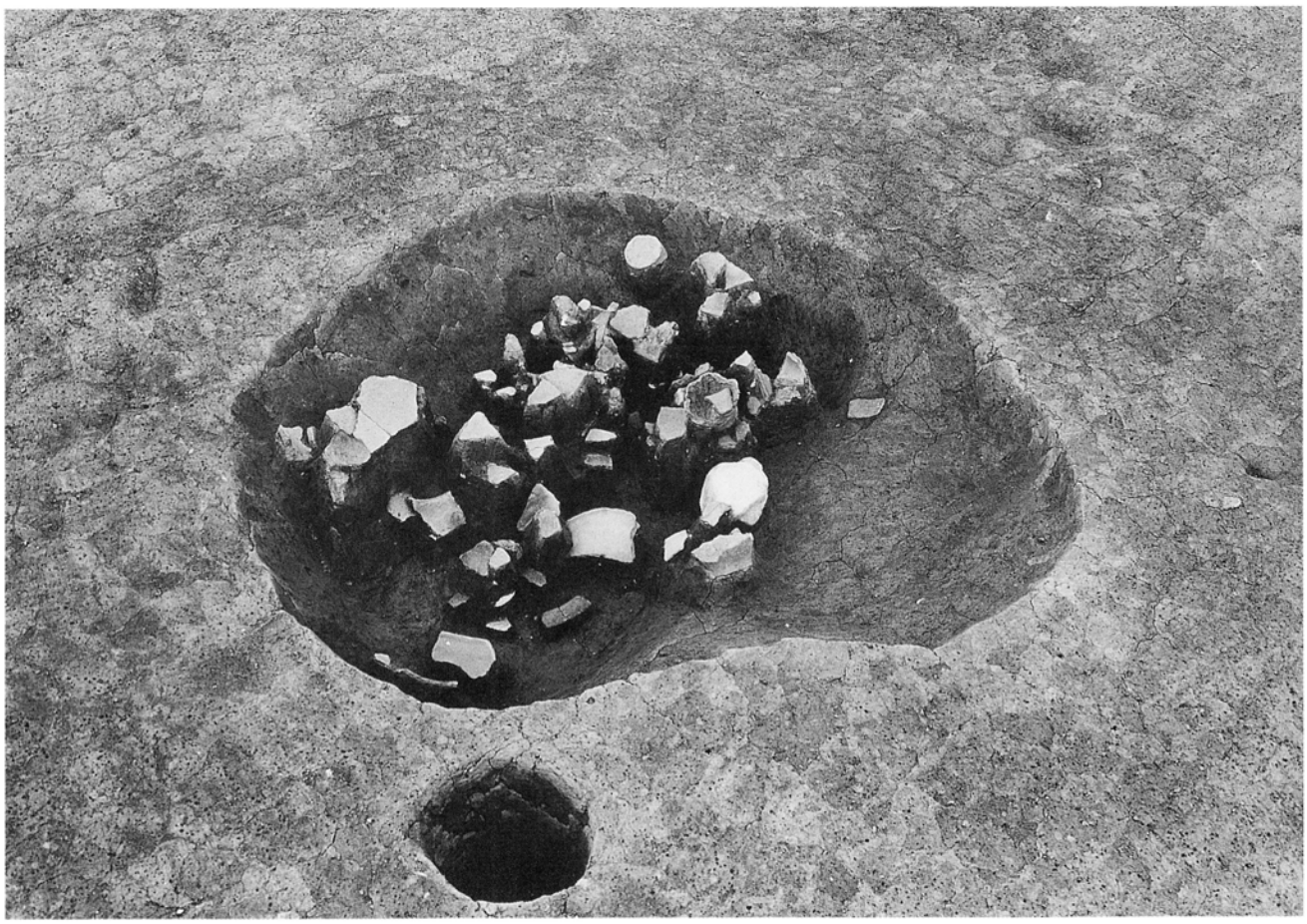


(2) 8号土壙（東から）



(1)　6～8号土壙（北から）

(2)　9号土壙（東から）



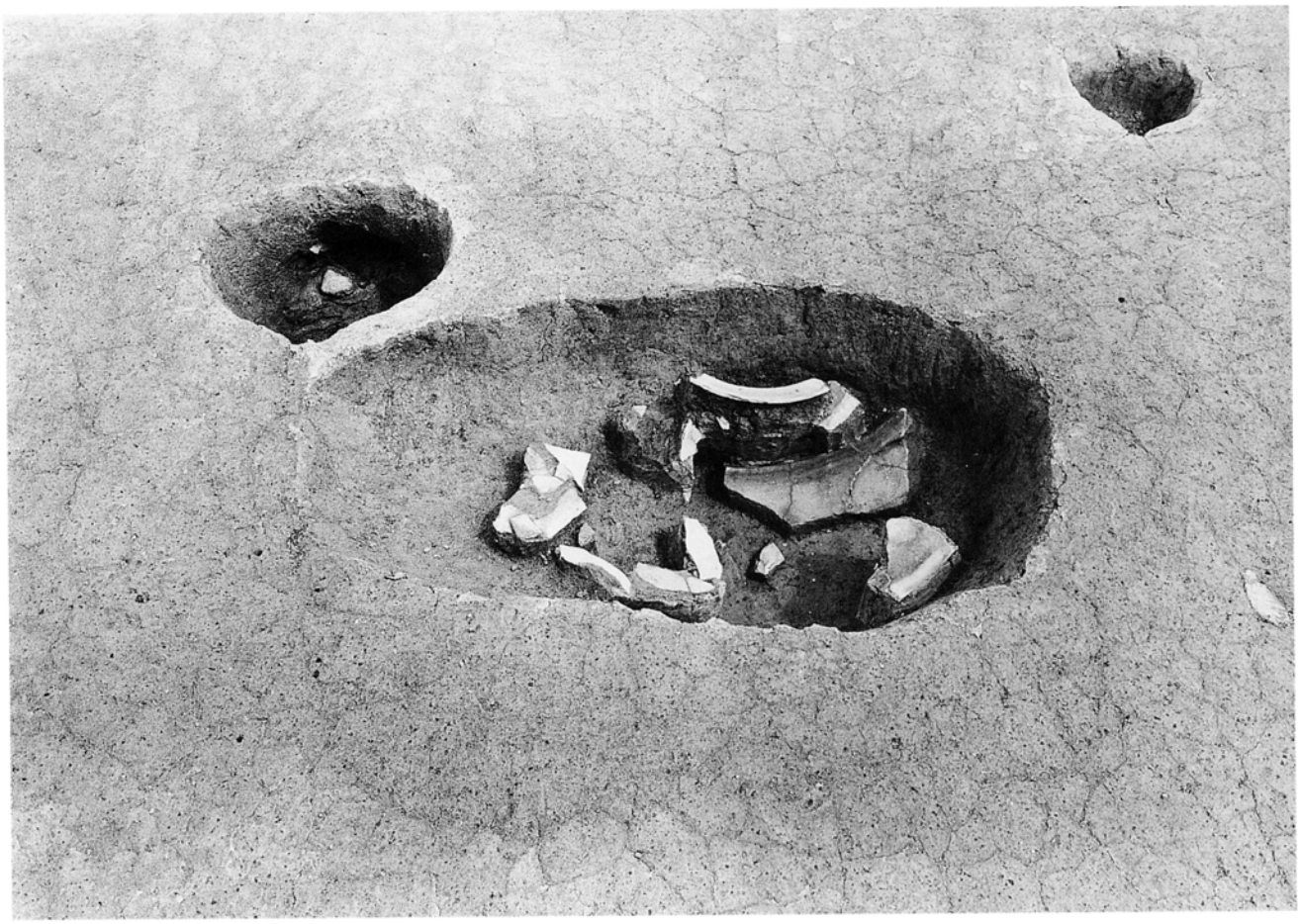
(1) 9号土壙遺物出土状況（東から）

(2) 11号土壙（東から）

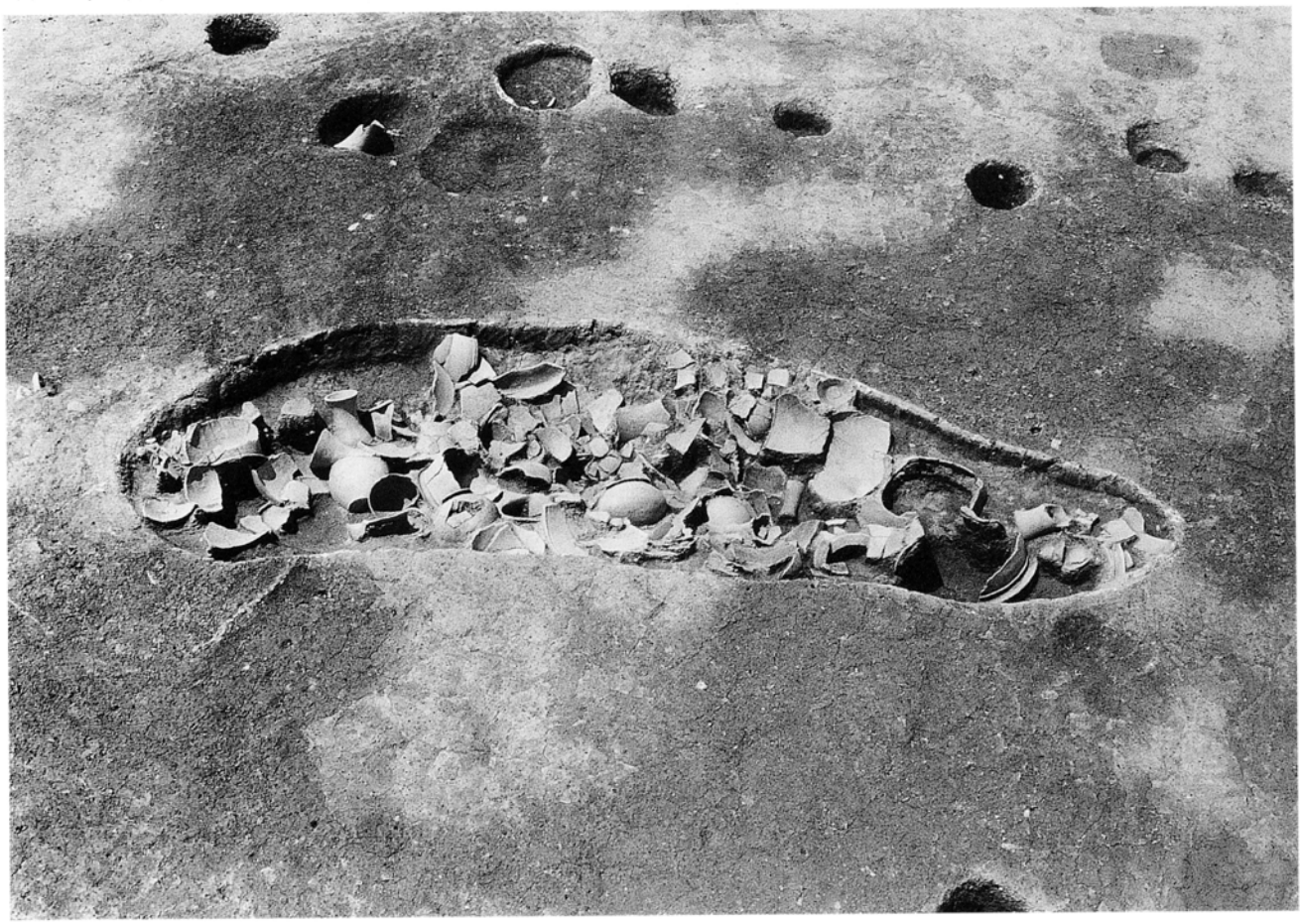
(1) 11号土壙遺物出土状況（東から）

(2) 16号土壙（西から）

(1) 17号土壙（西から）

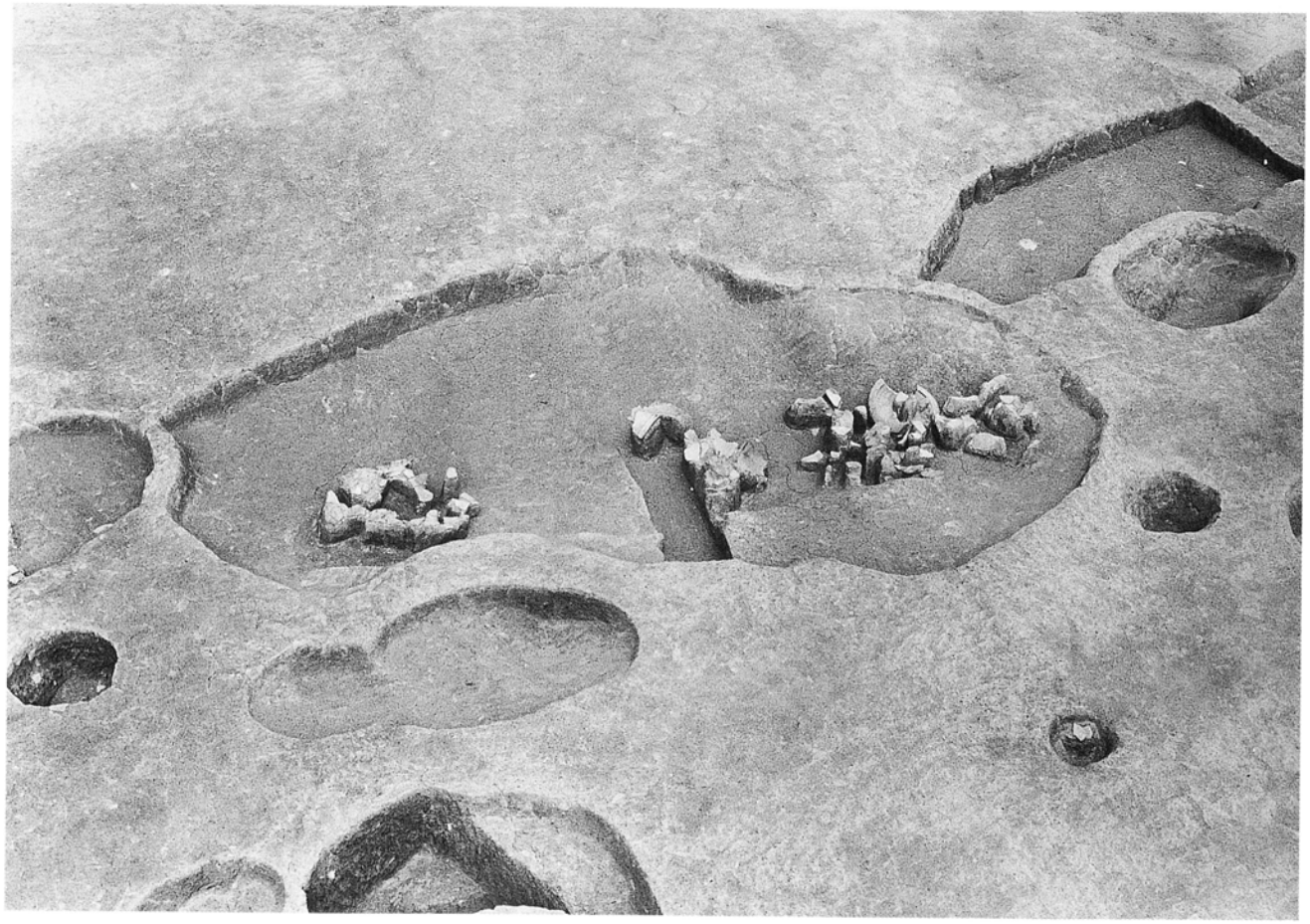


(2) 20号土壙（南西から）

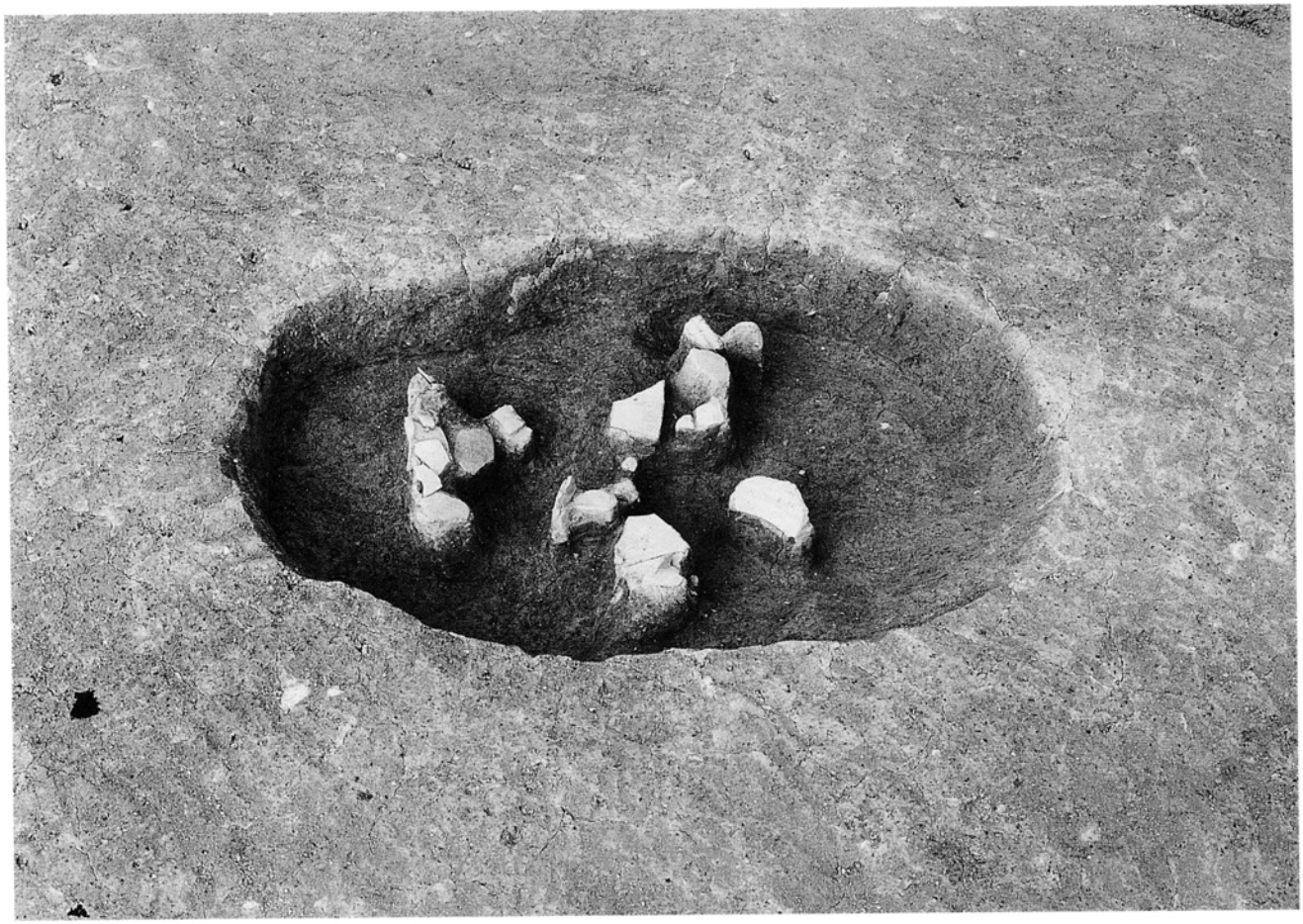


(1) 20号土壙遺物出土状況（西から）

(2) 23号土壙（西から）



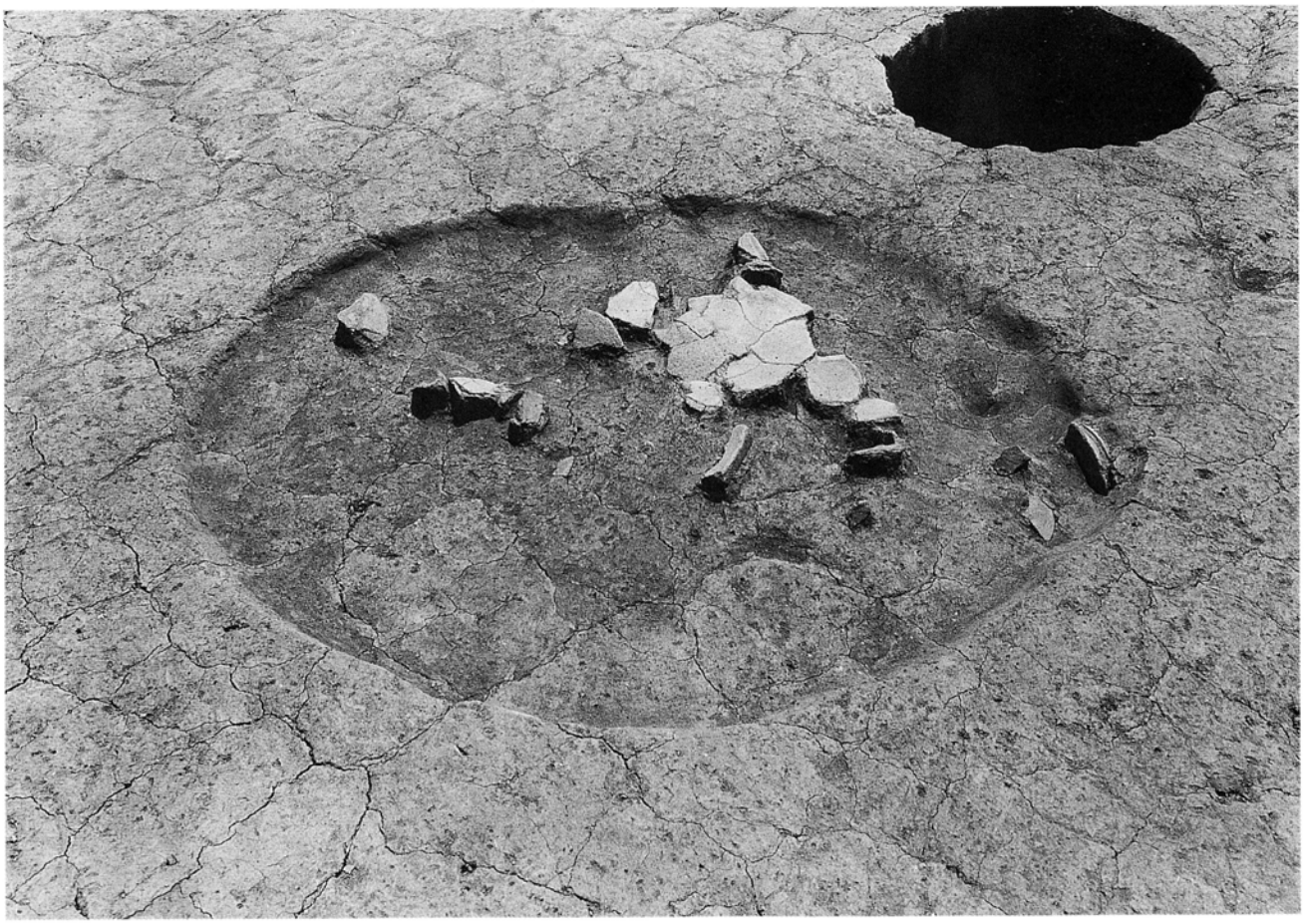
(1) 24号土壙（西から）



(2) 25号土壙（西から）

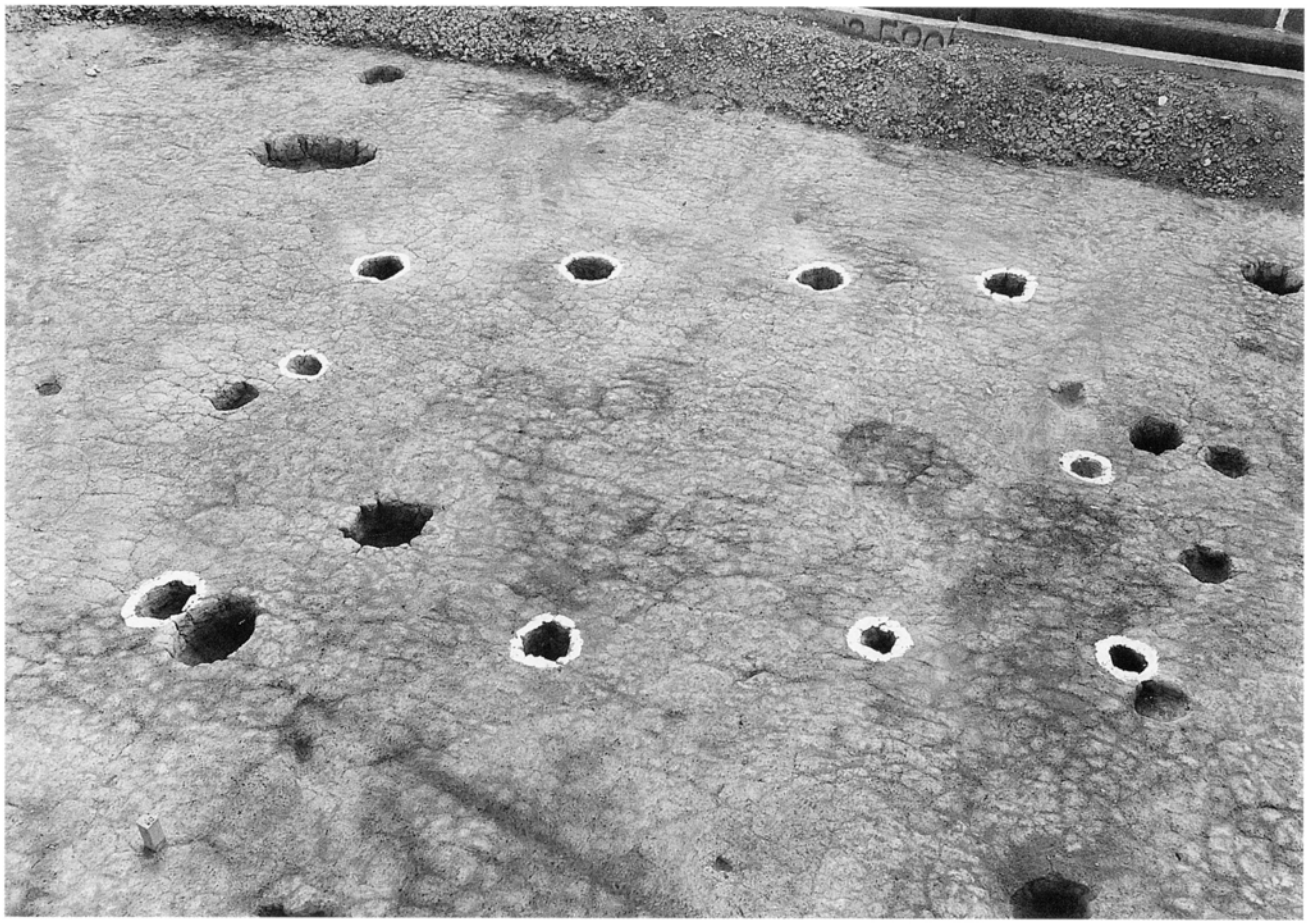
(1) 28号土壙（東から）

(2) 29号土壙（西から）

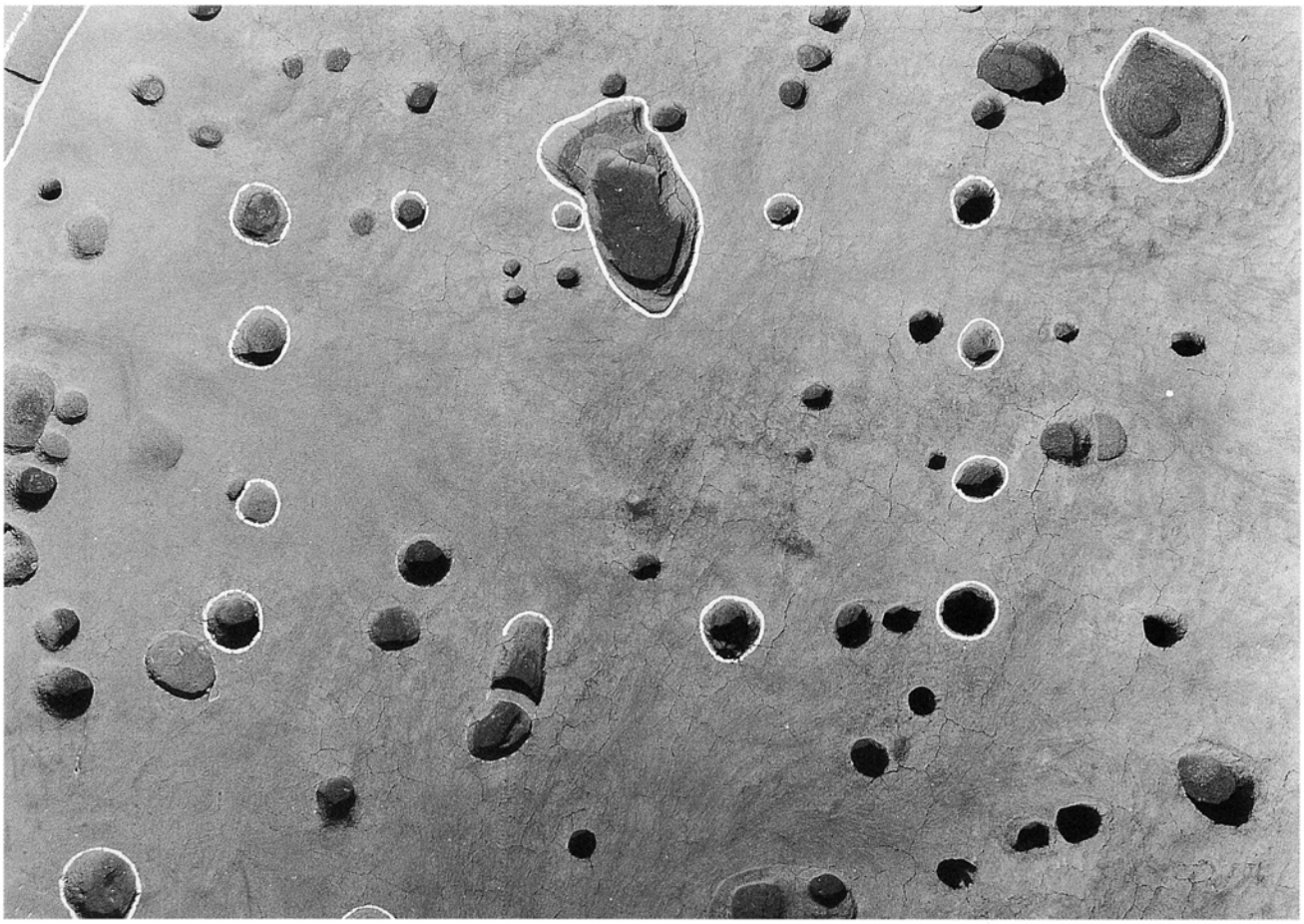


(1) 32号土壙（北東から）

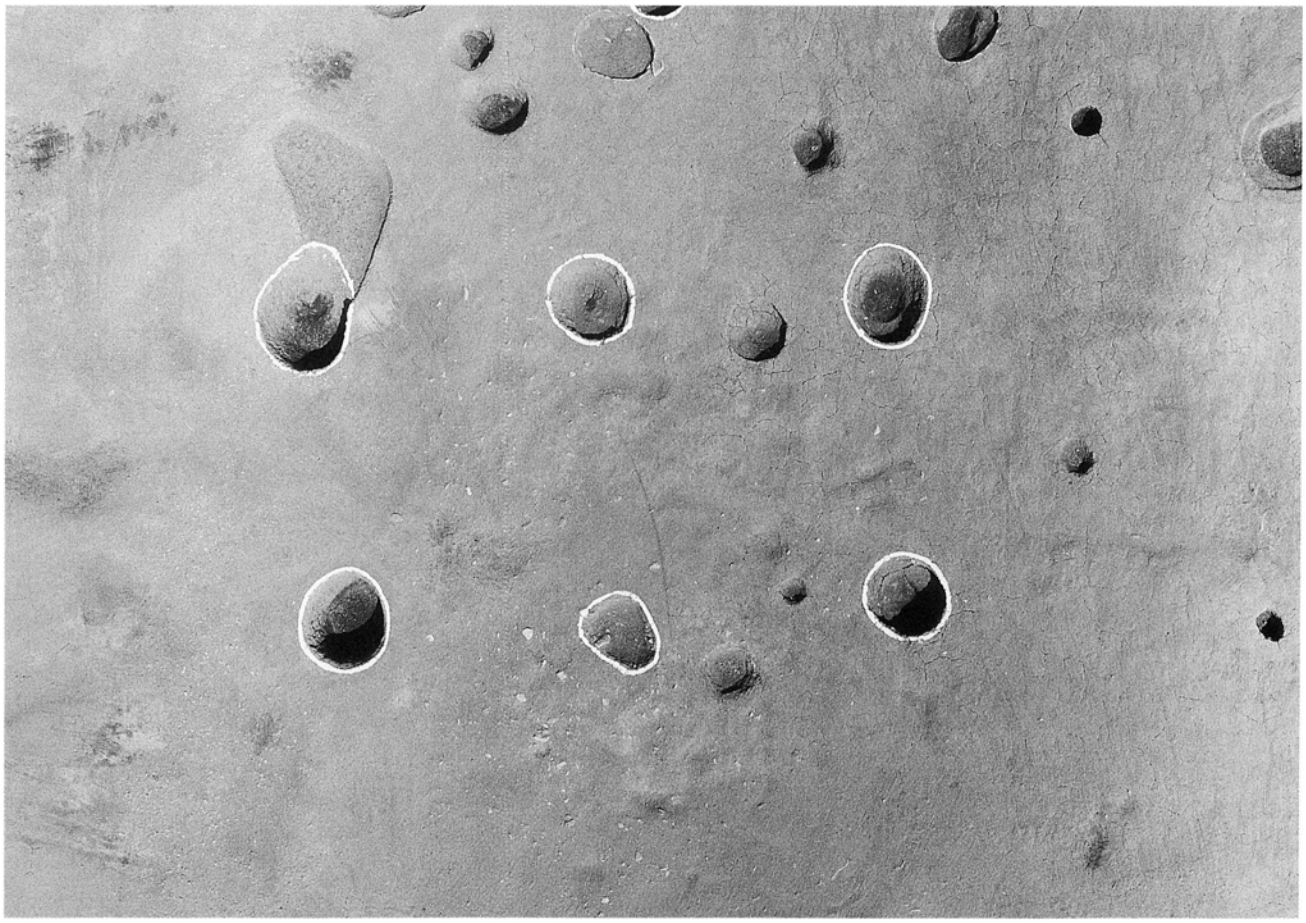
(2) 1号掘立柱建物（北東から）



(1)　2号掘立柱建物

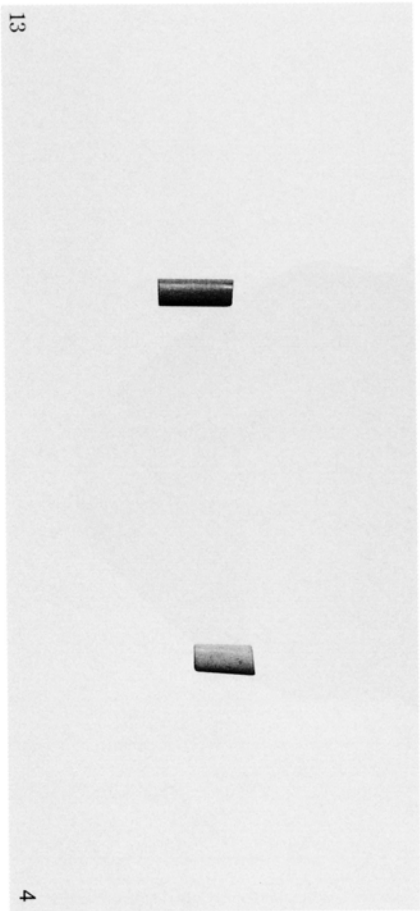


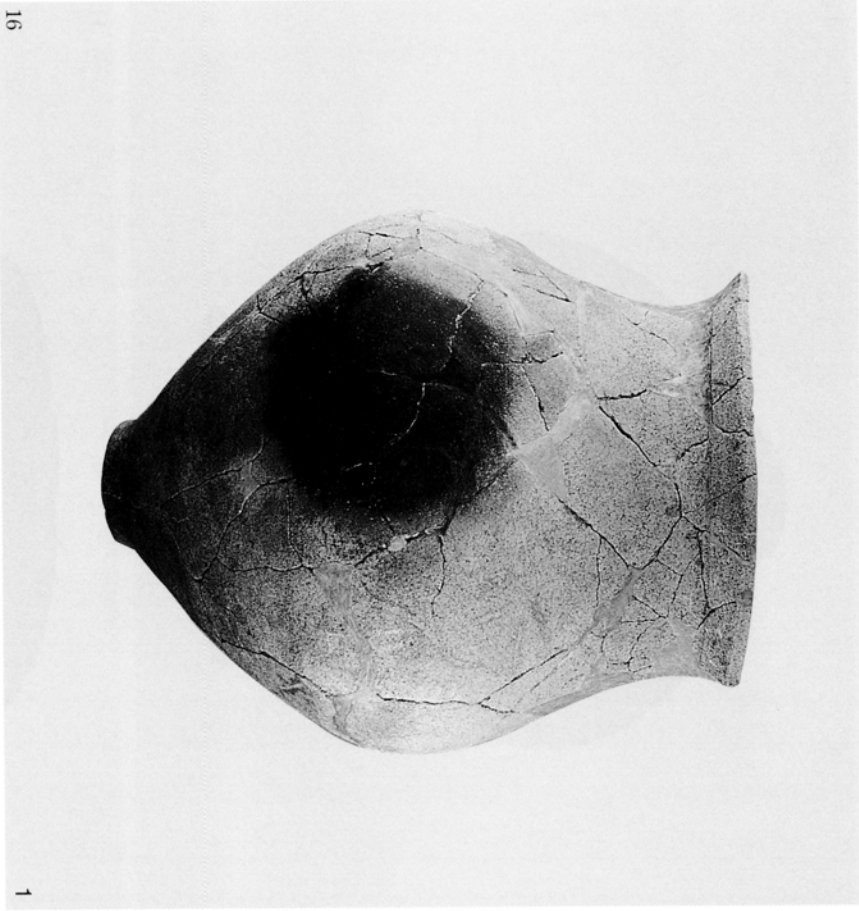
(2)　3号掘立柱建物

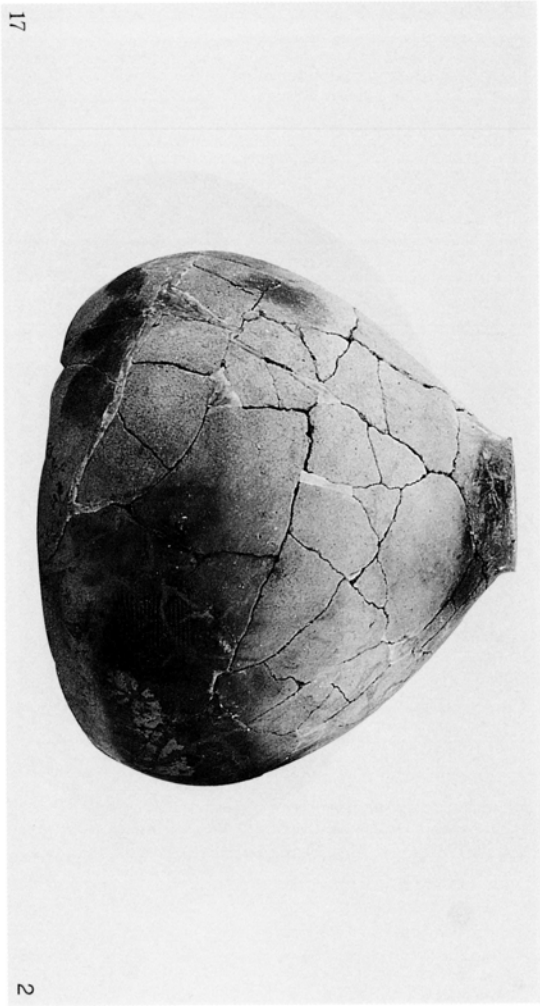


1 … 1号甕棺上　2 … 1号甕棺下　3 … 2号甕棺上　4 … 2号甕棺下

1 … 3号甕棺上　2 … 3号甕棺下　3 … 4号甕棺下　4 … 5号甕棺下







1 … 7号甕棺下　2 … 8号甕棺上　3 … 8号甕棺下　4 … 1号甕棺内出土管玉

20-13 1

19-7 2

20-16 3

24-17 4

26-3 5

26-5 6

26-4 7

26-2 8

28 9

30-2 10

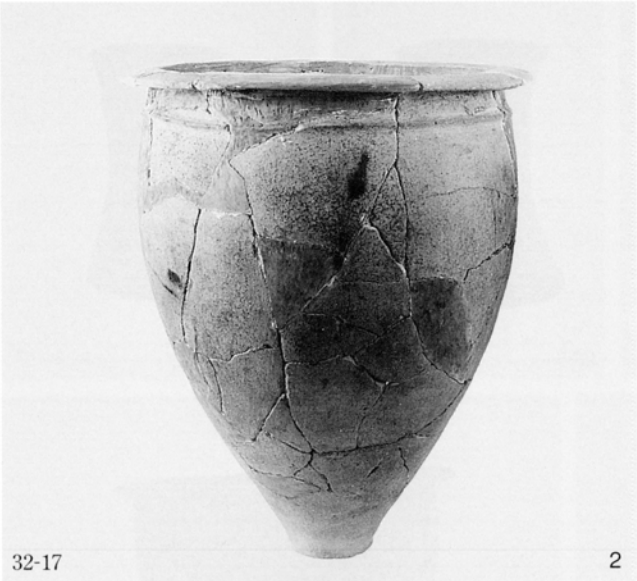
31-14 11

31-8 12

1～3 ･･･ 2号土壙　4 ･･･ 9号土壙　5～8 ･･･ 11号土壙　9 ･･･ 17号土壙　10～12 ･･･ 20号土壙

31-16 1

30-1 5



32-17 2

32-18 6

30-6 3

30-3 7

31-11 4

31-12 8

1～8 ･･･20号土壙

32-22 1

33-28 5

33-24 2

32-21 6

34-32 3

30-4 7

33-23 4

31-10 8

1～8 ･･･20号土壙

33-26 1

32-20 2

33-29 3

32-19 4

33-27 5

31-15 6

30-5 7

34-33 8

33-30 9

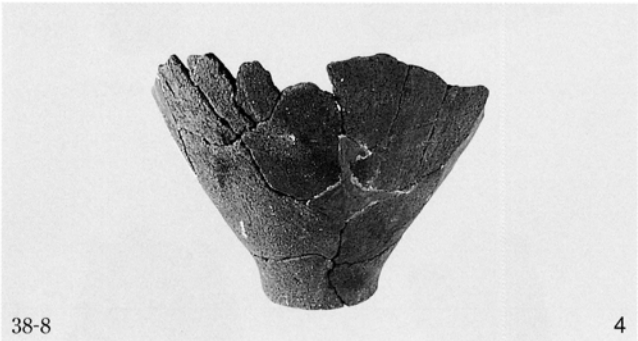
34-34 10

1～10・・・20号土壙

36-9 1

36-2 2

38-12 3


38-8 4

38-7 5

42-11 6

42-16 7

7-11 8

6-1 9

1・2 ･･･21号土壙　3～5 ･･･23号土壙　6・7 ･･･32号土壙　8・9 ･･･包含層

縄文時代晩期包含層出土石器

1（09001）

2（09002）

3（09003）

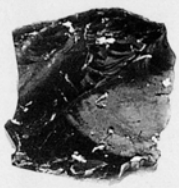
4（09004）

5（09005）

6（09006）

7（09007）

8（09008）



9（09009）

10（09010）

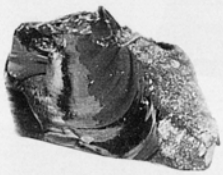
11（09011）

12（09012）

13（09013）

14（09014）

15（09015）



16（09016）

17（09017）

18（09018）

19（09019）

20（09020）

21（09021）

縄文時代晩期包含層出土石器

22（09022）

23（09023）

24（09024）

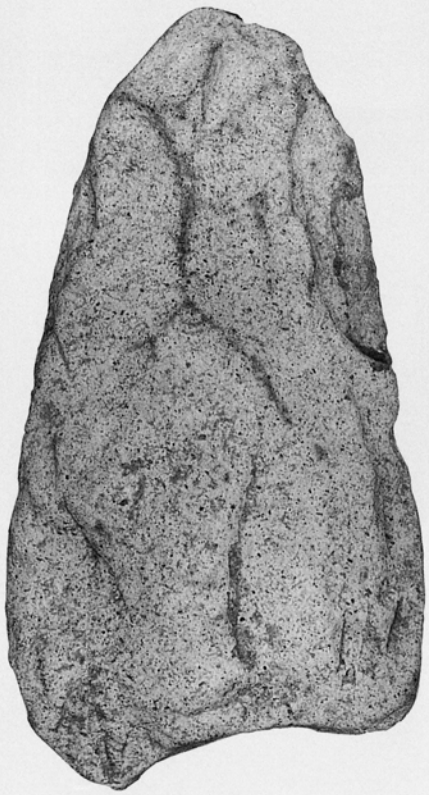
25（09025）

26（09026）

27（09027）

28（09028）

29（09029）



30（09030）

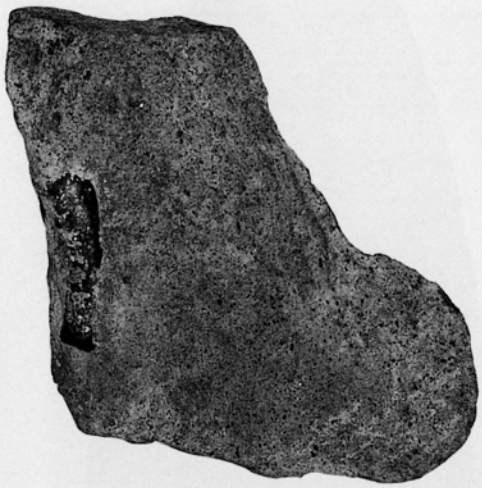
31（09031）

縄文時代晩期包含層出土石器

32（09032）

33（09033）

34（09034）



35（09035）

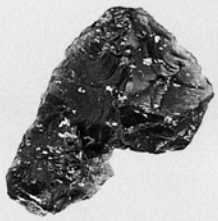
遺構検出面出土石器

36（10001）

37（10002）

38（10003）

39（10004）


40（10005）

41（10006）

42（10200）

43（10201）

44（10036）

45（10065）

46（10028）

47（10035）

48（10033）

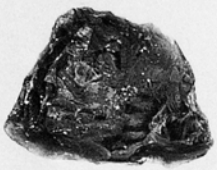
49（10075）

50（10056）

51（10027）

52（10034）

53（10029）


54（10025）

55（10031）

56（10063）

遺構検出面出土石器

57（10030）

58（10072）

59（10024）

60（10051）

61（10053）

62（10032）

63（10066）

64（10067）

65（10074）

66（10055）

67（10057）

68（10038）

69（10058）

70（10043）

71（10046）

72（10071）

73（10048）

74（10059）

75（10042）

76（10054）

77（10064）

遺構検出面出土石器

78（10037）

79（10060）

80（10040）

81（10045）

82（10061）

83（10070）

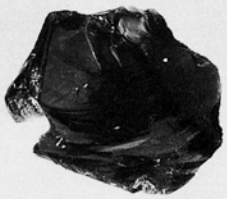
84（10068）

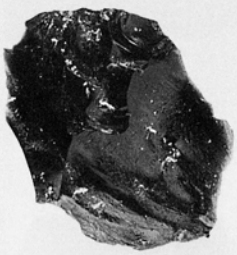
85（10076）

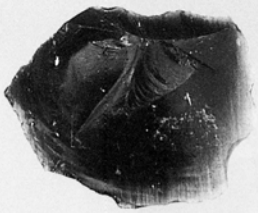
86（10069）

87（10073）

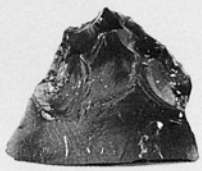
88（10062）


89（10050）


90（10047）


91（10041）

92（10007）


93（10008）

94（10009）

95（10010）

96（10011）

97（10012）

98（10013）

99（10014）

100（10015）

101（10016）

遺構検出面出土石器

102（10019）

103（10017）

104（10018）

105（10020）

106（10021）

107（10022）

108（10023）

109（10077）

110（10088）

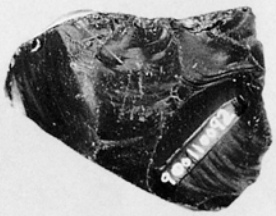
111（10079）

112（10085）

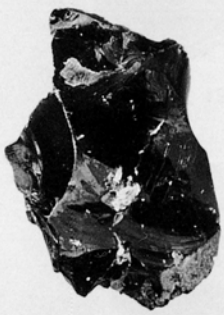
113（10090）

114（10078）

115（10087）



116（10092）



117（10097）

118（10091）

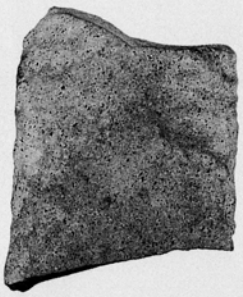
119（10086）

120（10096）

121（10080）

遺構検出面出土石器

122（10098）



123（10104）

124（10100）

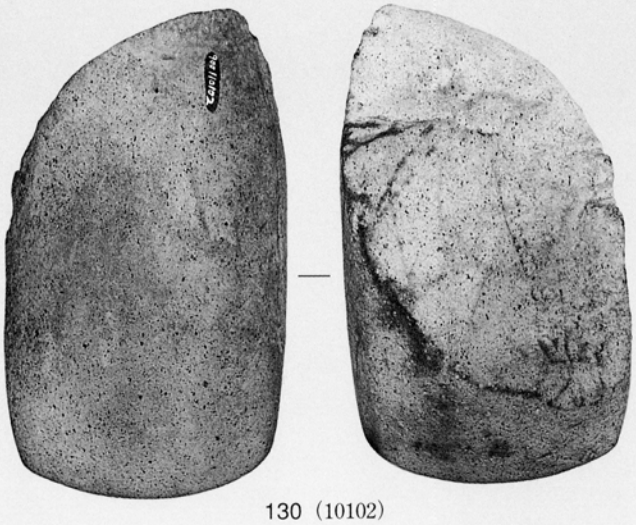
125（10101）

129（10108）

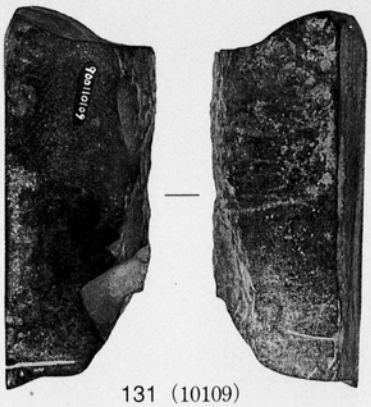
126（10099）

128（10105）

132（10103）



130（10102）



131（10109）

周船寺遺跡群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第429集

1995年（平成７年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１
(092)711－4667

印　刷　株式会社ドミックスコーポレーション
福岡市博多区博多駅南六丁目６－１
(092)431－4061